4b
230
昭4

新撰 女子西洋歷史

文學博士
瀨川秀雄 著

1929

東京 冨山房 神田

42265
教科書文庫
4
230
42-1929
20000
81261

資料室

文部省檢定濟
昭和四年一月二十九日　高等女學校歷史

教科書文庫
4
230
42-1929
2000081261

新撰
女子西洋歷史

文學博士
瀨川秀雄著

広島大学
教
81261
図書

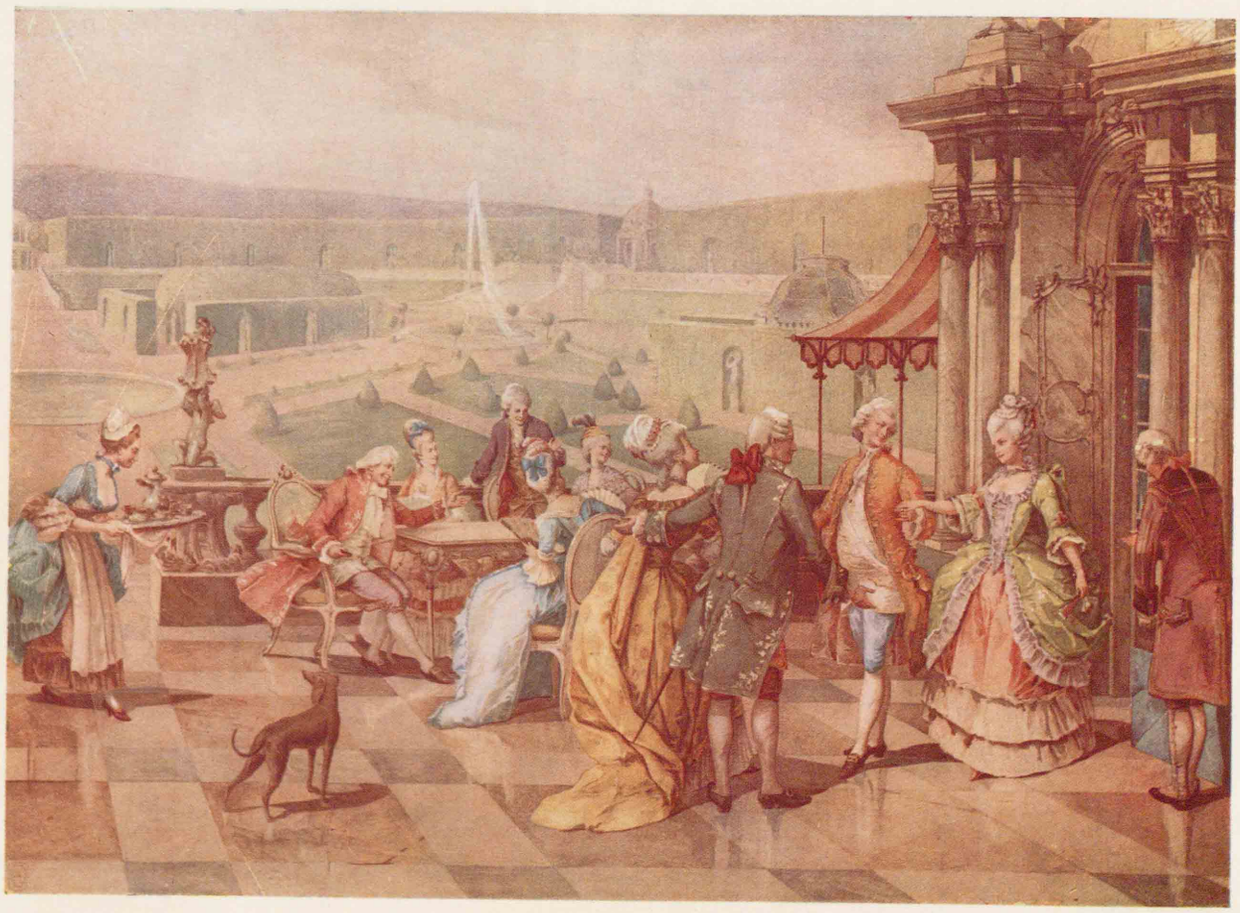
1929

広島大学図書
2000081261

東京　冨山房神田

46
230
昭6

十八世紀に於ける宮廷生活



（裏面の説明を見よ）

十八世紀に於ける宮廷生活

十八世紀に於ける新思潮の特徴は、貴族の特權の由來を說明する歷史や、その特權を擁護する宗教を輕んじ、一切の束縛を脫して自由自然の生活を樂しまうとするにあつた。隨つて宮廷生活も前代と大いに趣を異にし、ルイ十四世時代の威儀本位の形式的儀禮は漸く衰へ、重々しく濃艶で、金色燦爛たる服裝が廢れ、輕快で淸楚を旨とし、その色彩も銀色・艶消金色・淡紅色又は白色などを好むやうになつた。紳士淑女は極めて眞面目で口をきつと結んでゐた前代の風を棄て、口元に微笑を含んだ柔和な容姿を作り、又一般に鬚を剃つて人に惡感を懷かせぬやうに努めた。要するにこの時代の宮廷に於ても、現世を樂しく送るといふ趣意から、貴顯の男女を一堂に招いて晩餐を共にし、舞踏をして一夕の快を恣にし、又は快晴の午後ヴェランダに出で新綠滴るやうな庭園を眺め、茶を喫しつゝ談話を交へたものであつた。

この繪は、その後者の光景を描寫したもので、レーマンの文明史圖繪に收錄せられたものである。

例言

一 本書は女學校の西洋歷史教科書にあてる目的で著したものである。

二 女學校に於ける歷史科の時間は僅少であるから、本書は西洋歷史の梗概を極めて平易簡明な口語體を以て記述した。そして生徒をして西洋文明諸國の盛衰興亡の往迹、西洋文明の由來及びその發達の大要を知らしめる程度に止めた。

三 本文の記事を一層明確にし、且學習上の興味を增す爲に、正確で根據のある大小幾多の圖畫と、鮮明な歷史地圖などとを挿入し、なほ卷末にも數葉の着色地圖を附錄とした。

四 地名・人名及び史的名辭などには、その左側にそれに相當する洋語を記入し、又比較的必要な年代はその右側に記入した。

五 本書の內容について、著者は深甚の注意を拂つてはゐるが、記述の體裁

や史實の精疎などで、なほ當を得ない點があることと思ふ。使用者諸君の示教を仰いで、これを補正することが出來れば幸福である。

昭和三年六月

著者識

新撰女子西洋歷史

目次

第一篇　上古史……一頁

第一章　東方諸國の興亡……一

第二章　ギリシャ……五

第三章　ローマの盛衰……一一

〔上古史摘要及び年表〕……一八―一九

第二篇　中古史……二〇

第一章　ゲルマニヤ民族と東・西兩ローマ帝國……二〇

第二章　サラセンの勃興……二二

第三章　ローマ法王とフランク王國……二四

第四章　神聖ローマ皇帝とローマ法王及び十字軍……二七

第五章　西ヨーロッパの制度及び社會……三〇
第六章　西ヨーロッパ諸國王權の發達……三三
第七章　オスマン・トルコの勃興　東ローマ帝國の滅亡……三六
第八章　文藝の復興　地理上の發見……三七
〔中古史摘要及び年表〕……四二―四三

第三篇　近古史……四三
第一章　宗教改革……四三
第二章　新・舊兩教派の紛爭……四五
第三章　フランスの强大……四九
第四章　イングランドの革命……五二
第五章　ロシヤの勃興……五五
第六章　プロシヤの勃興……五九
第七章　イギリス・フランス植民地の衝突　アメリカ合衆國の獨立……六二
第八章　近古の文明……六五

〔近古史摘要及び年表〕……六九―七〇

第四篇　近世史……七〇
第一章　フランス大革命……七〇
第二章　ナポレオン一世の偉業……七五
第三章　神聖同盟　アメリカ諸國及びギリシヤの獨立……八一
第四章　フランスの政變　ナポレオン三世……八三
第五章　イタリヤの統一……八七
第六章　アメリカ合衆國の内亂とメキシコの動亂……八九
第七章　ドイツの統一……九二
第八章　ロシヤトルコ戰役……九五
第九章　近世の文明……九七
〔近世史摘要及び年表〕……一〇四―一〇五

第五篇　最近世史……一〇五
第一章　アフリカ・アジヤ・大洋洲に於ける歐・米諸國の經營……一〇五

第二章　十九世紀末に於けるヨーロッパの情勢……一一二
第三章　イタリヤトルコ及びバルカン兩戰役……一一四
第四章　世界大戰役の勃發……一一六
第五章　世界大戰の經過(その一)……一一九
第六章　世界大戰の經過(その二)……一二一
第七章　世界大戰の終局……一二三
第八章　大戰後の世界……一二六
〔最近世史摘要及び年表〕……一三六

圖版

一　十八世紀に於ける宮廷生活(口繪)
二　アポロと九女神との舞踏
三　ユリウス・ケーザル
四　西ゴート王の金冠
五　チャールス七世卽位式に於けるジャンヌ・ダルク
六　聖母(三色版)
七　家庭に於けるルーテル(三色版)
八　プロシヤ人の軍資獻納(三色版)
九　ドイツ國で運轉せられた最初の汽車(三色版)
十　ルイ十五世及びルイ十六世時代の婦人の靴
十一　十九世紀後半に於けるフランス婦人の服裝

地圖

一　ローマ版圖擴張圖

二　新陸地及新航路發見時代の世界略圖
三　一六四八年のヨーロッパ
四　一八一五年以後のヨーロッパ
五　アフリカ南北アメリカ及大洋洲現勢圖
六　一九二一年のヨーロッパ

新撰女子西洋歴史

文學博士　瀬川秀雄著

第一篇　上古史

第一章　東方諸國の興亡

㊀西洋文明の淵源　西洋最古の文明はナイル河畔のエジプトと、チグリス・エウフラテス兩河間のバビロニヤとに發生した。そしてヘブライ・フェニキヤ・アッシリヤ及びペルシヤなどの諸國が、その後に獨立して互に往來してゐた間に特殊な文明が作られた。

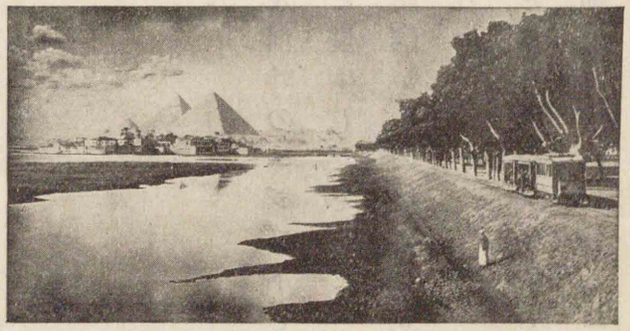
エジプトの建國

㊁エジプト　エジプト Egypt は氣候が熱くてナイル Nile 河畔が豐沃なので、住民の生活が甚だ易かつた爲、今から約五千年前にすでに統一した

王國をなして、最も早く文明の域に達してゐた。國人は多神教の信者で、特に太陽を崇拜し、且魂の不滅を信じ、苟も肉體が腐らない間は、魂は必ずその中に宿るものであると考へ、貴人の屍體をミイラ(Mummy)として保存する風があつた。又ピラミッド(Pyramid)・スフィンクス(Sphinx)・オベリスク(Obelisk)などの雄大なものを造り、太陽曆・象形文字(シャウケイ Hieroglyphic)などを發明し、パピルス紙(Papyrus)をも製造し、測量學・數學・天文學にも秀でてゐた。

エジプトの文明

ナイル河及びピラミッドの現景



㊂ バビロニヤとアッシリヤ

バビロニヤの建國

チグリス河(Tigris)とユフラテス河(Euphrates)との下流地方も、氣候が暖かで土地が肥えてゐたので、バビロニヤ(Babylonia)王國はエジプトと同じ頃にここに興つたが、その後兩河の上流地方にアッシリヤ(Assyria)王國が興つた。

アッシリヤ人は武勇であつたから、バビロニヤ王國を滅して獨立し、

更に四方を征して大帝國を創めた。けれども間もなく內亂が起り、蠻族が北方から侵して來たので、國勢は次第に衰へて、終に新[1]バビロニヤに滅された。

[1] 前八〇〇年

兩國民は多神教を信じ、楔形文字(Cuneiform)を用ひ、又天文や數學に秀で、建築・彫刻などにも巧であつた。

アッシリヤの盛衰

楔形文字

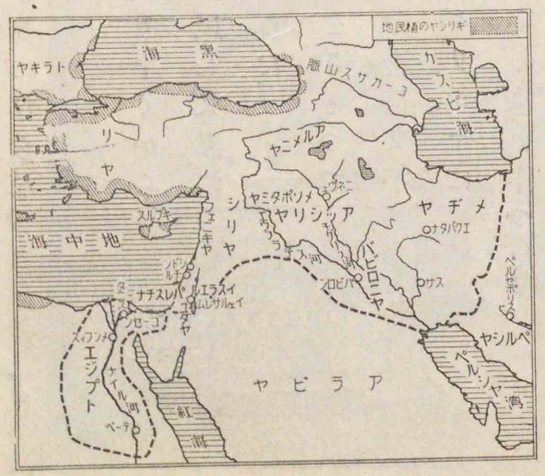
兩國の文化

㊃ ヘブライとフェニキヤ

ヘブライ(Hebrew)人は早くから牧畜を業とし、水草を逐つて移住してゐたが、パレスチナ(Palestine)の地方に定住し、多神教徒の間にあつて、獨りイェホヴァ(Jehovah)といふ一神(ユダヤ教)のみを信じ、國王を擁立してから、國運は隆盛を極めた。

ヘブライの建國と宗教

國人は偶像の崇拜を禁じてゐたので、



古代東方諸國圖

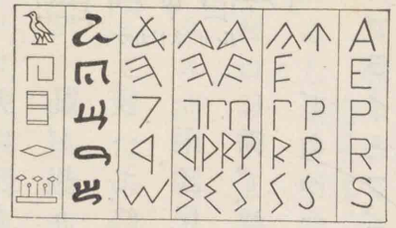
彫刻や繪畫のやうな美術が發達するやうにならなかつた。

フェニキヤ人はシリヤ(Syria)の沿岸地方に興り、早くから海に出て地中海の沿岸や島嶼などに植民し、又黑海や大西洋に航し、印度とも貿易を勵んでゐた。

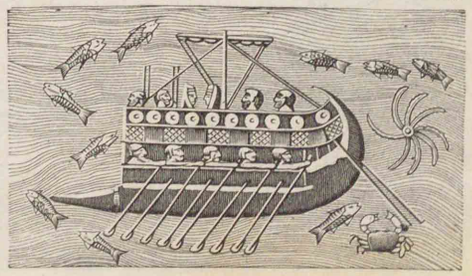
フェニキヤの軍船

國人は多神教を信じ、物品交易の不便をさとつて貨幣を用ひ、又簡單な音符文字を發明してこれをギリシヤに傳へ、今日の西洋文字の基を作つた。

音符文字の發達



㊄ペルシヤ　ペルシヤはその酋長キルス(Cyrus)の時にメジヤ(Media)を滅して獨立し、新バビロニヤやエジプトなどを征服した。そしてダリウス一世(前五二一—四八五 Darius I)は更に西方印度を攻略して空前の大帝國を作つ



踏舞のと神女九とロポア（巴里館畫翰チッピ市スツレロッ）

（畫面の說明を見よ）

アポロと九女神との舞踏

アポロは藝術の神で、その下に學藝を分掌してゐる九女神（ミューズ）が附隨してゐる。九女神は敍事詩（カリオプ）の女神・抒情詩（エンテルプ）の女神・戀愛詩（エラト）の女神・悲劇（メルポメネ）の女神・喜劇（タリヤ）の女神・讃美歌（ポリヒムニヤ）の女神・舞踏（テルプシコール）の女神・歴史（クリオ）の女神・天文（ウラニヤ）の女神で、いづれも快活輕妙な態度で、アポロ神を中心として舞踏してゐる光景は、眞に迫つてゐる、實に女性美を圓滿に發揮したものと謂ふべきである。

この繪はラファエルの親友で知名の畫家であつたギュリオ・ロマノ（Giulio Romano）（一四九二―一五四六）の大作で、イタリヤ國フロレンス市のピッチ繪畫館（Galleria Pitti）の所藏である。

ダリウス一世が捕虜を引見する光景

ペルシヤの西方ベヒスタン村にある石碑の一部。

た。王は内治に勵み、制度を整へ産業を興したので、領内はよく治り國富み兵强く、國民は堵に安んずることが出來た。

㈥ 婦人の地位　エジプト・バビロニヤ・フェニキヤ・アッシリヤ及びペルシヤなどの古代東方諸國では、社會並びに家庭に於ける婦人の地位は概して低く、尊敬を受けることも亦少かつた。しかし、ヘブライでは家族制度が確立してゐたので、婦人は家庭に於ては相當に敬愛せられてゐた。

第二章　ギリシヤ

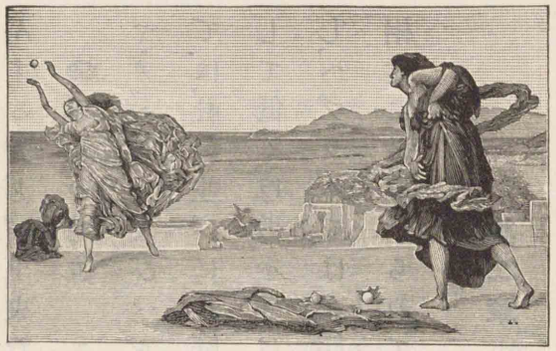
㈠ ギリシヤの土地と住民　ギリシヤはバルカン（Balkan）半島の南端にあつて港灣に富んでゐたから、住民は早くから航海や商業に長じ、又地

スパルタ婦人の遊戯

ギリシヤの二民族

スパルタ

中海の沿岸や諸島にも植民した。内地は多くの山脈で小區域に分たれてゐたのと、人民が自由を愛してゐたのとで、各地方の都市は各獨立して小國家を作つた。しかし、國人はその民族・宗教・言語を同じうしてゐたので、常に同一國民であるといふ觀念を失はなかつた。その上オリンピヤ(Olympia)に祀つてあつたゼウス(Zeus)神の爲、四年毎に國民祭を行つて大競技會を催し全國民を熱狂させたことも、亦同一民族である觀念を養成し、且これが文化の進歩を助けることとなつた。



㈡スパルタとアテネ　ギリシヤ民族中のドリヤ族(Doria)はスパルタ(Sparta)市を作り、イオニヤ族(Ionia)はアテネ(Athens)市を創め、各〻特殊な發展を遂げた。

スパルタは貴族政治を行ひ、且自衛の爲に七歳以上の男兒に尚武

アテネ

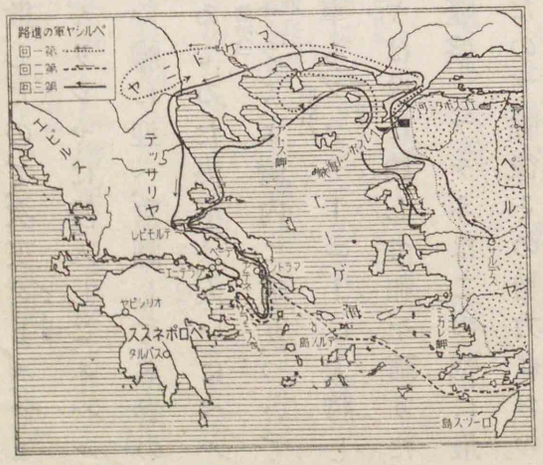
戰役の原因

ペルシヤ戰役圖

的教育を施して強健な兵士を作り、婦人も亦身體を強くし、婦德を磨いてゐたので、國運は次第に強盛となつた。

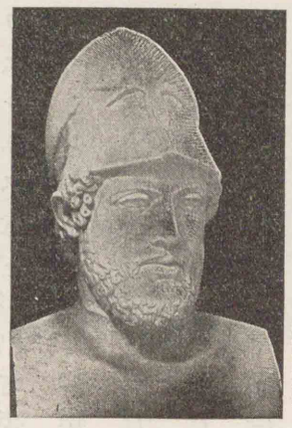
アテネは初は王政であつたが、後には貴族政治となり、少數の貴族が政權を恣にして平民との爭が絶えなかつた。けれどもソロン(Solon)やクリステネス(Clisthenes)などが出て、平民にも政權を分つこととしたので、多年の紛爭が止み民主政治の基が確立した。

㈢ペルシヤ戰役(Persian Wars 500–449 B. C.)　曩にペルシヤに征服せられた小アジヤ沿岸のギリシヤ植民地が、アテネの援を得て叛いたので、ギリシヤの征服を望んでゐたペルシヤ王ダリウス一世はこれを鎭めた後、ギリシヤに出征して本役を起した。しかし、ダリ



戰況

ウス一世は二回の遠征を企てて共に失敗したので、次王クセルクセス(Xerxes)はその遺志を繼ぎ、自ら大軍を率ゐてギリシヤに侵入した。スパルタ王レオニダス(Leonidas)等はこれをテルモピレ(Thermopylae)(前四八〇)の嶮に迎へ、奮鬪して名譽の戰死を遂げたが、テミストクレス(Themistocles)等の率ゐてゐた海軍は、大いにペルシヤの艦隊をサラミス(Salamis)灣内に破り(前四八〇)、ついでギリシヤの陸軍もプラテーエー(Plataeae)に大勝し(前四七九)たので、ペルシヤは遂に屈して和を請うた。



ペリクレス　ローマ、ヴァチカン博物館藏大理石半身像。

四 アテネの隆盛　アテネはこの戰に最も偉功を樹てたので、戰後その勢力はおのづから他の諸國を凌ぐやうになつた。その上大政治家ペリクレス(Pericles)が出て善良な民主政治を行ひ、市を改修し海軍を盛にし、且學藝を奬めたので、國運は隆昌に向つた。

五 ギリシヤの内亂　スパルタはアテネの盛なのを嫉み、黨與を集めて宣戰した。これをペロポネスス戰役(Peloponnesian Wars 431–404 B.C.)といふ。そして二十七年間の戰爭で、スパルタは漸くアテネを降してギリシヤの全權を握つた。ところが間もなく、中部ギリシヤのテーベ(Thebes)市にエパミノンダス(Epaminondas)・ペロピダス(Pelopidas)などの名將が出て、スパルタ軍を破つて一時その權力を奪つた。しかし、兩將も間もなく戰歿したので、テーベは俄かに衰へた。

ペロポネスス戰役

六 アレクサンドル大王　この時、ギリシヤの北なるマケドニヤ(Macedonia)國にフィリップ(Philip)といふ偉人が出て、次第にギリシヤの都市を從へ、終にその全土を征服したが、不幸にも家臣に弑せられた。その子アレクサンドル大王(Alexander the Great)は内亂を鎭め、ペルシヤに侵入し、エジプトに到り、更に轉じて西方印度(India)を侵略し、スサに凱旋した。大王はその征服した諸地方を統一して、東・西兩洋に跨る大帝國を建てようとしたが、バビロンで病歿したの(前三二三)

アレクサンドル大王　ローマ、カピトル博物館藏大理石半身像。

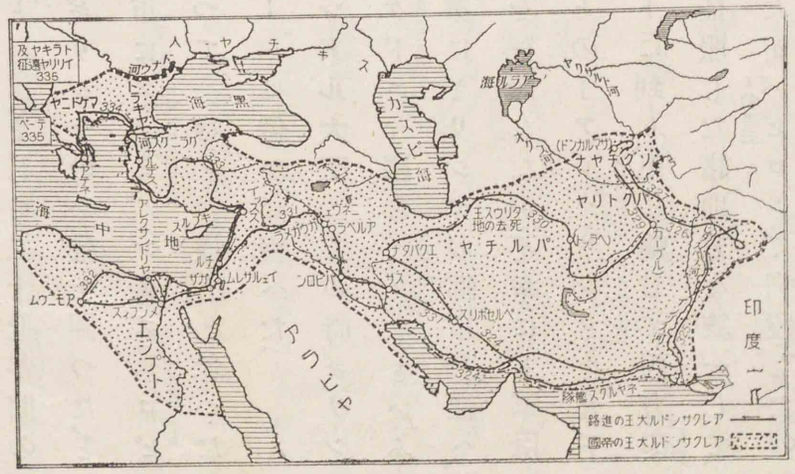
1 この年張儀が魏の相となつた

で、その計畫は水泡となつた。けれども大王の輸入したギリシヤの文化は、廣く征服した領土内で、東方各地の文化と融合して、世界的の文明を成すやうになつた。

大王の歿後英主がなかつたので、部下の諸將は各地に據つてマケドニヤ・シリヤ・エジプトなどの獨立國を作つたが、後、いづれもローマに併せられた。

アレクサンドル大王東征圖

七 ギリシヤの文明　優美で創造力に富んでゐたギリシヤ人は、快活な自然の感化を受けたのと、東方の文物を學んだのとで、更に獨得な新文明を作つてヨーロッパ文明の源をなすやうになつた。そして文學にホーマー、歴史にはヘロドツス、哲學にソクラテス・プラトー！アリストトルなどの大家が出た。


印度
海黒
海中
地
エジプト
ヤリトクル
ヤ・チ・ル・バ
ヤニドケア
ペーラ
335
及ヤキラト征遇ヤリリイ
335
河ウナ
ムウニモア
スパルタ
エルサレム
ヤリルト河
ヤリ河
ドンカルクリア
ケヤラ
海ヒラア
ヤリルト河
ヤリ河
ヤリトクル
ヤ・チ・ル・バ
ヤリルポセルペ
ヤリ
ヤリ
ヤリ

第三章　ローマの盛衰

ローマの建國

政體

近隣の攻略

㈠ローマの建國とその政治

ローマはイタリヤ半島の中部、チベル河畔に創設せられたローマ市から起り、後、近隣の諸部落を征して漸く強大となつた。（前七五三）

政體は初、王政で、後、共和政治となつたが、貴族が政權を專らにしたので、平民は不平を唱へて久しく相爭つた。けれども平民の權利が次第に伸張し、紀元前四世紀の末には貴族と殆ど同等となつたので、多年の軋轢は跡を絶つやうになつた。（前五〇九）

ローマ市を作つた三民族中の一なるエトルリヤ族の墓碑

これから貴族と平民とは、協力して他の民族に當り、まづ中部イタリヤを征服し、ついで南イタリヤにあつたギリシヤの植民市をも略（前三五三）

1 漢の高祖の時代この年項羽が死んだ

カルタゴとポエニ戰役

カルタゴの滅亡

して、イタリヤ半島の大部を統一することが出來た。

㈡ローマの興隆と版圖の擴張

當時アフリカの北岸にカルタゴ（Carthago）といふフェニキヤの植民市があつて、早くから貿易・植民に努め、國富み海軍に長じ、西部地中海の海上權を獨占してその勢が强盛であつた。

ハンニバル
ナポリ博物館藏大理石半身像。

新に興つたローマはこれと權を爭ひ、終に戰爭した。これをポエニ戰役（Poeni (Punic) War）といふ。その第一役（前二六四—二四一）にはローマが勝つて、カルタゴからシシリー島（Sicily）を奪ひ、その第二役（前二一八—二〇一）にはカルタゴの勇將ハンニバル（Hannibal）がイタリヤに侵入して[1]ザマ（Zama）で敗れたので、カルタゴは再び重い條件で和を請うた。その後ローマは、カルタゴが徐々にその勢力を回復するのを見て大いに憂ひ、三たび軍を起して終にこれを滅した。（前一四九—一四六）

これより先ローマはすでにシリヤを破り、（前一九〇）マケドニヤを征し、（前一六七）更に

前一四六

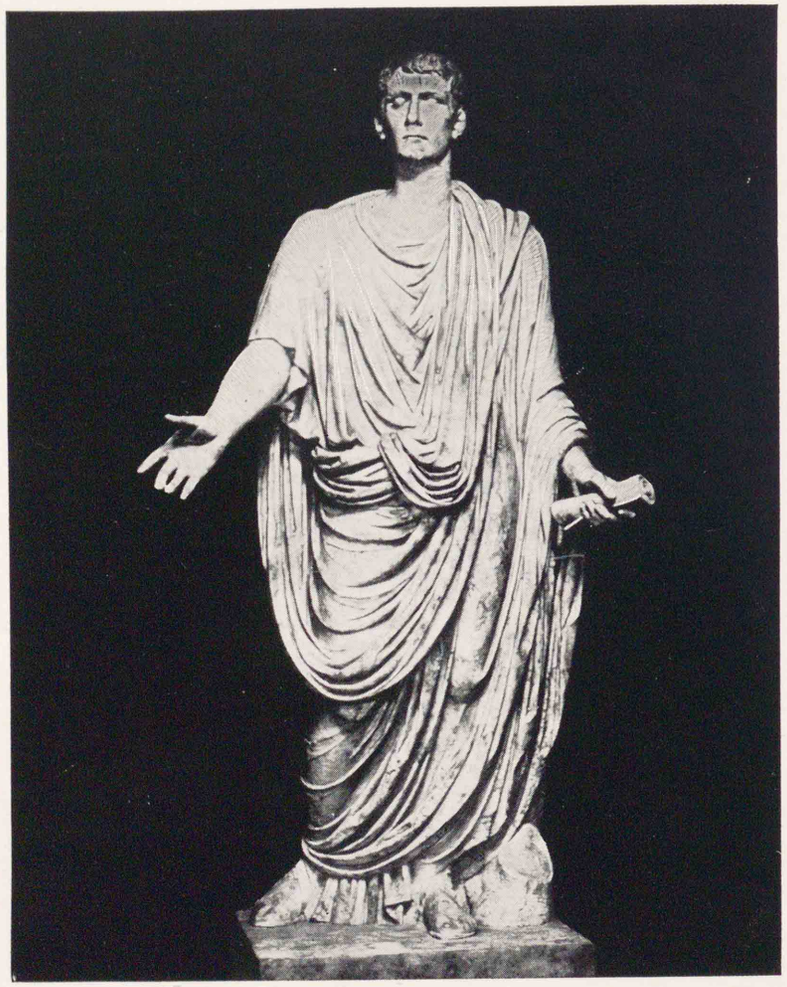
ギリシヤを滅してその地を併せたので、地中海沿岸の諸國は概ねその領土となつた。

㊂ローマの内訌とケーザルの治績　ローマの市民は海外の領土から流入した無限の富によつて奢侈遊惰に流れ、多數の農民は奴隷に壓迫せられて、その業を失つた。富者はこの間にあつて政權を私し、次第に土地を併せたから、國家の中堅であつた中産階級が次第に衰へ、貧・富の兩階級が對立して相爭ふやうになつた。

三頭政治とケーザル

この時、貧民黨からケーザル（Caesar）といふローマ第一の偉人が出て、ポンペイウス・クラッスス（Pompeius Crassus）と共に三頭政治（Triumvirate）を組織し、ローマの政權を握つた。

ついでケーザルは（前五八―五一）ガリヤ（Gaul）地方の蠻民を征し、ローマの文化をこの地方に移してから、威名は日に盛になつた。ところがポンペイウスはこれを嫉み、竊かに元老院と結んで彼を除かうとしたので、ケーザルは俄かにローマに歸つてその黨を仆し、文・武の大權を一身に集めて弊



ユリウス＝ケーザル（ローマ・ラテラン博物館藏）

（裏面の説明を見よ）

ユリウス"ケーザル

ユリウス"ケーザルはローマ第一の偉人であるから、その半身像や全身像は鄭重に保存せられてゐる。ロンドンの大英博物館には大理石の半身像があり、ナポリの國立博物館には大理石の全身像がある。ここに掲げたのはローマのラテラン博物館藏の大理石の全身像で、身に外袍を纏ひ、左手に書卷を把り、右手の指を擴げて何事かを陳述しようとする姿勢を示し、悠然として迫らない態度は精悍にして侵すことの出來ない風手と相俟つて、偉大な政治家として人をして追慕景仰の念を禁ずる能はらしめるものである。

ケーザルの殺害

オクタヴィヤヌスとクレオパトラ

ローマ、カピトル繪畫館藏油繪。オクタヴィヤヌス

ローマ帝政の始

政の改革・產業の保護・植民の奬勵・曆法の改正などを斷行して、治績が大いに擧つた。けれども間もなく、反對黨の爲に殺されたので、天下は復亂れた。

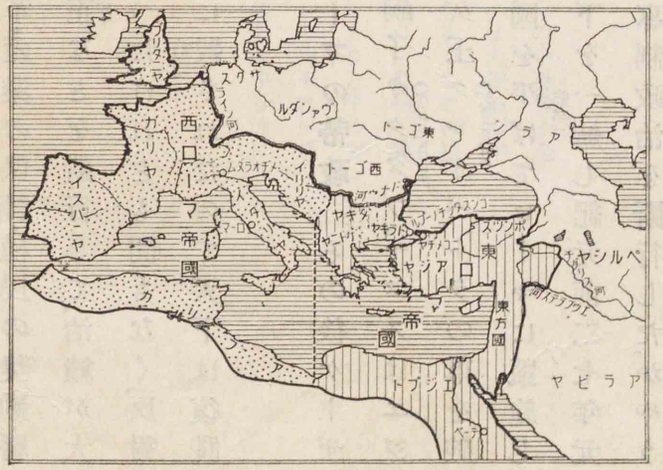
四 ローマの帝政 その後ケーザルの養嗣子オクタヴィヤヌスはエジプトの女王クレオパトラの軍を破り、その國を平げてローマに凱旋し、遂に天下を一統し、紀元前二七年元老院からアウグスツスの尊號を受けて專制政治を斷行した。かやうにしてローマの共和政治は名だけとなつたので、史家はこれから後をローマ帝政時代と呼んだ。そしてアウグスツスは內政を整へ國防

を嚴にし、土工を起し、又大いに文藝を奬めてローマ文化の隆盛時代を作つた。

(五)ローマ帝政の末路　アウグスツスの歿後約二百年間は、帝國の政治がなほよく行はれてゐたけれども其の後は國民の元氣が衰へ、道德は壞れ、軍人は跋扈[バッコ]して恣に皇帝を廢立し、外からは蠻族が侵入して來たので、國運は著しく衰へた。

[1]その後コンスタンチヌス大帝(Constantine the Great, 306)が出て內亂を鎭めて全國を一統し、都を今のコンスタンチノープル(Constantinople)に遷し、勵精治を圖

コンスタンチヌス大帝　金貨の上に彫刻せられたもの。



ローマ帝國分裂圖

[1]仁德天皇の頃

帝國の分裂

つたので、中興の政が一時成就したけれども帝の歿後は內憂と外患とが交〻起り國威益〻衰へて、三九五年以後帝國は東・西に分れてから、終に永久合一することが出來なかつた。

ローマの政治・法律

(六)ローマの文化　ローマ人は實用を尙ぶ國民であつたから、政治は最も得意とした所で、その發達した法律は後世の模範と仰がれた。これに反して學問や藝術は、概ねギリシヤの模倣で創造力が少かつたが、雄大と堅牢とを以て勝れた劇場・競技場・浴場・凱旋門・軍道・水道など實用の土木事業に於て、その特色を發揮した。要するにローマ人の世界文明に寄與した最も偉大な功績は、ギリシヤの文明を吸收してこれをローマ化し、更にその廣大な領土內にこれを撒布させた點にあつた。

文化普及の功績

ローマの力士　カラカラ大浴場にあつた寄石細工の一部、ローマ、ラテラン博物館藏。

㊐婦人の地位　ローマに於ける婦人の地位は、その初期ではギリシヤと大差がなかつたが、共和政治の末年から、婦人は社會上著しく解放せられて、演劇や競馬や舞踏などを男子と共に、見物することが出來るやうになつた。しかし、これが爲に風紀は頽廢し、離婚の數が甚だしく增したのは遺憾であつた。

キリスト

㊅キリスト　ローマの宗教は多神教であつたが、地方には種々な宗教が行はれてゐた。これ等の宗教はいづれも國家的若しくは地方的のもので、世界的なものは一つもなかつた。ところがアウグスツス帝の治世にイエス＝キリスト（Jesus Christ）がイェルサレム（Jerusalem）附近の地に生れ、ユダヤ教の教義を改善して博愛・仁慈を旨とする世界的の一神教を創め、自ら救世主と稱して熱心に布教した。さ

キリスト教の創始

上古史摘要及び年表

上古期は太古から紀元三七五年ゲルマニヤ民族の大移動を起した時代までを包み、我が仁德天皇の御代、支那東晉の孝武帝の初政に及んでゐる。この期の初にエジプト人はナイル河畔に、バビロニヤ及びアッシリヤ人はエウフラテス・チグリス兩河の間に居つて西洋文化の曙光を

上古史摘要及び年表

上古期は太古から紀元三七五年ゲルマニヤ民族の大移動を起した時代までを包み、我が仁徳天皇の御代、支那東晉の孝武帝の初政に及んでゐる。この期の初にエジプト人はナイル河畔に、バビロニヤ及びアッシリヤ人はエウフラテス・チグリス兩河の間に居つて西洋文化の曙光を放つたが、その後突如として興つたペルシヤ人の爲に、その領國が悉く併有せられた。當時ギリシヤはバルカン半島の南方に興り、進歩民主主義のアテネと保守貴族主義のスパルタとによつて代表せられ、初は協力してペルシヤの大軍を粉碎し、一時威名を天下に轟かすことが出來たが、アテネ・スパルタ及びテーベは交〻覇を爭つて共に衰へ、終に北方の蠻族マケドニヤに滅されたその後アレクサンドル大王はエジプト・ペルシヤなどの諸國を征服して、東・西兩洋に亙る大帝國を建て、東・西文化の融合を企てて、世界史上に一新紀元を開いた。

これより先ローマはイタリヤの地に興り、その卓絶した武力を用ひて數多の民族を征服し、更にアレクサンドル大王の歿後に瓦解した諸國をも攻略して、歐・亞及びアフリカに跨る大帝國を建て、且ギリシヤから傳へた文化をその版圖内に撒布して、ヨーロッパの文明史上に貢獻するところが頗る多かつた。

年代 皇紀	年代 西紀	重要事項	國史・東洋史との對照 日本	國史・東洋史との對照 支那	國史・東洋史との對照 重要事項
五五	前六〇六	アッシリヤの滅亡	神武	春秋	
一八一	四八〇	テルモピレの戰。サラミスの海戰	懿德	春秋	翌年孔子が歿した
二五七	四〇四	アテネの降伏（ペロポネスス戰役の終結）	孝昭	春秋	翌年韓魏趙が興り戰國の世となる
三三〇	三三一	ペルシヤの滅亡（アレクサンドル大王の建圖）	孝安	戰國	前二年蘇秦が合縱を唱へた
五一五	一四六	カルタゴの滅亡	開化	漢（景帝）	前八年吳楚七國の亂
六一七	四四	ケーザルの暗殺	崇神	漢（元帝）	後十一年王莽が我が國に入貢した
六三四	二七	ローマ帝國の創始（オクタヴィヤヌスがアウグスツスの尊號を受けた）	垂仁	漢（成帝）	新羅王子天日槍が歸化した（？）
六五七	四	イエス＝キリストの誕生	垂仁	漢（哀帝）	後十一年王莽が簒立した
九八五	後三二五	ニケーヤ宗教會議	仁德	東晉 明帝	前三年始めて宮室を營ませた
九九〇	三三〇	コンスタンチノープルの奠都	仁德	東晉 成帝	
一〇五五	三九五	ローマ帝國の分裂	仁德	東晉 孝武	前十一年佛教が始めて百濟に入つた

キリスト

キリスト教の創始

サレム附近の地に生れ、ユダヤ教の教義を改善して博愛・仁慈を旨とする世界的の一神教を創め、自ら救世主と稱して熱心に布教した。前四

㊇キリスト ローマの宗教は多神教であつたが、地方には種々な宗教が行はれてゐた。これ等の宗教はいづれも國家的若しくは地方的のもので、世界的なものは一つもなかつた。ところがアウグスツス帝の治世にイエス＝キリスト（Jesus Christ）がイェルサレム（Jerusalem）

ればユダヤ人はこれを快とせず、イェルサレムに滯在してゐたローマの官吏に訴へたので、キリストは遂に十字架上で殺された。[三二]爾來代々の皇帝は概ねキリスト教を邪教として斥けたにも拘らず、弟子等は少しもその信仰を飜さず、益〻布教に努めて撓まなかつたので、信徒の數は日に增加した。その上コンスタンチヌス帝が自らその信者となつて布教を公認したのと、テオドシウス帝(Theodosius)がキリスト教をローマの國教としたのとで、キリスト教は四方に弘まり、後にはヨーロッパの社會上・政治上に偉大な關係をもつやうになつた。[三三]

第二篇　中古史

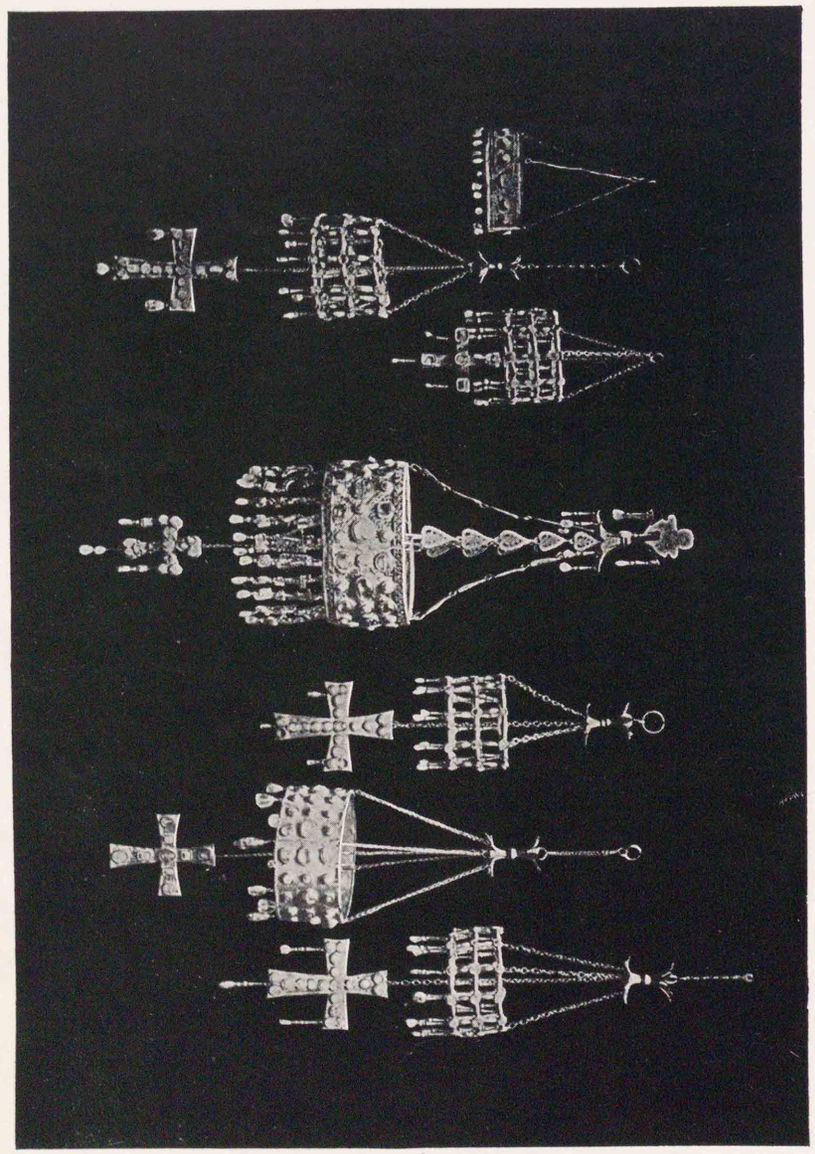
第一章　ゲルマニヤ民族と東・西兩ローマ帝國

㊀ゲルマニヤ民族の移動と王國の創建

ゲルマニヤ民族の移動の發端

ゲルマニヤ(Germania)民族は北ドイツの平原に住んでゐた蠻民であるが、資性勇猛で戰を好み、ローマの衰運に乘じて屢〻その北邊を侵した。ところが四世紀(三五五)の後半にアジヤの方から來たフン族(匈奴)(Huns)がヴォルガ(Volga)河の流域から西の方に移往したので、ゲルマニヤの一部族である東ゴート(Goths)はこれに降り、西ゴートはローマ皇帝の許を得てドナウ河(Danube, Donau)の南に移住した。これがゲルマニヤ民族移動の發端である。

これからゲルマニヤの諸民族は大いに移動し、西ゴートは一旦ローマを侵した後、イスパニヤ(Spain)に入つて西(四一五)ゴート王國を建てた。ついで



(裏面の説明を見よ)

西ゴート王冠（ニルカ，リバ）（國立博物館藏）

西ゴート王の金冠

寶石を以て飾られたこの金冠は、一八五八年イタリヤ國トレド(Toledo)の附近で發見せられたもので、紀元七世紀の後半(六四九—六七二頃)に西ゴート王として君臨してゐたレセスヴィント(Reccesvinth)及びその一族の冠用したものである。

王冠の上部に鎖を附け、下部に眞珠・青玉などの寶石を垂下してあるのは、或時代にこれを寺院に寄進した爲かと思はれる。

1 雄略天皇の末年

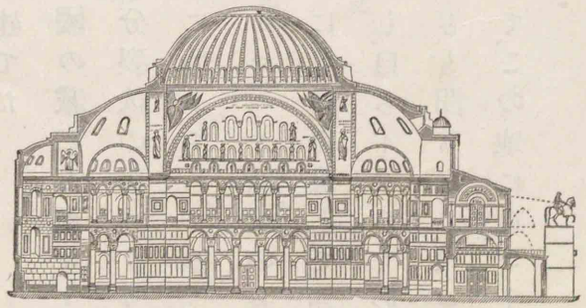
ゲルマニヤ村落の狀態　ローマ市にあるアントニウス圓柱の表面に印刻せられたものに據る。

ヴァンダル(Vandal)はアフリカの北岸(カルタゴの故地)(四九)に、フランク(Franks)はガリヤ(四八)の北部に、アングロ=サクソン(Anglo-Saxons)はイングランド(England)南半の地に各〻王國を建てた。

㊁西ローマ帝國の滅亡と東ゴート王國の創立

分裂後の西ローマ帝國は內憂・外患に惱まされて國勢愈〻衰へたので、ゲルマニヤ傭兵(ヤトヒヘイ)の長オドワケル(Odoucer)は遂に皇帝を廢して西ローマ帝國を滅し(一四七六)、自らイタリヤの主となつた。けれども間もなく、東ゴートは彼を仆して、この地に東ゴート王國を創めた(四九三)。

㊂東ローマ帝國の盛衰　西ローマ帝國が滅びた頃は、東ローマ帝國も衰へてゐたが、ユスチニヤヌス帝が即位(五二七)してから、形勢は一變した。帝は内政を勵み、宗教の爭を鎭め、ローマ法典を編纂し、又養蠶の法を支那から傳へ、ビザンツ式に基いてセント=ソフィヤ以下多數の寺院を建て、國境の防備をも嚴重にした。又帝は西ローマの舊領を回復しようと思ひ、ヴァンダル王國を滅し、更にイタリヤを略して國威を内・外に輝かした。けれども帝の歿後は國運が再び衰へた。



ユスチニヤヌス帝の建てたセント=ソフィヤ寺院の縱斷面

第二章　サラセンの勃興

㊀マホメットの事蹟　サラセン(Saracen)はもとアラビヤ(Arabia)の住民で、牧畜や隊商を營み、各部落は割據してゐたが、マホメット(Mahomet)が出て新宗教を以てこれ等を統一してから、國運は俄かに興つた。

教祖マホメットはメッカ市(Mecca)に生れ、初め商業を營んでゐたが成功しなかつた。後、ユダヤ教・キリスト教を參酌してイスラム教(回教)(Islam)といふ一神教を創め(六一〇)、自ら神の使であると稱して熱心に布教したが、メッカ人に迫害せられて(六二二)メヂナ(Medina)に奔つた。ついで武力でメッカを取返し、アラビヤの大半を征服してその教を弘めた。

マホメット

㊁サラセンの强大とその分裂　マホメットの歿後、その繼承者をカリフ(Caliph)と稱し、政治・宗教・軍事上の大權を握り、教祖の意志を繼いで征伐と布教とに力を盡したので、東はペルシヤを滅し、北は東ローマを侵し、西はアフリカの北岸を略してイスパニヤに入り、更に進んでフラ

1 推古天皇の御代、前年厩戸皇子が薨じた唐の高祖卽位五年

マホメット

カリフ

版圖の擴大

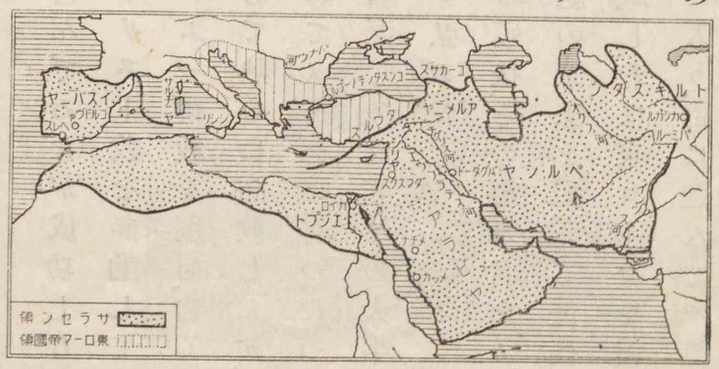
サラセン帝國の分裂

ンク王國に侵入したが敗退して、イスパニヤの地を保つた。

その後サラセン帝國は東・西に分れ、東はチグリス河畔のバグダード(Bagdad)に、西はイスパニヤのコルドヴァ(Cordova)に都した。

サラセンの版圖擴張圖

(三)サラセンの文化　東・西の兩サラセン國は共に競つて學問や藝術を勵まし、且力を農・商・工業に用ひたので、國勢は大いに振ひ、文化の進歩も遙かに當時の西ヨーロッパの諸國を凌ぐやうになつた。

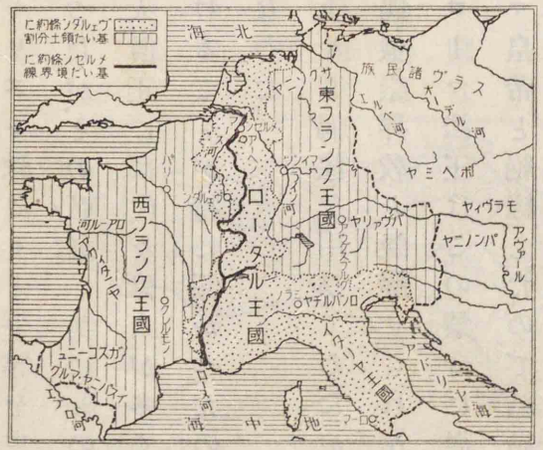

ヤ・シ・ル・ベ
アラビヤ
ロイヤ
トブシエ
スルタ
ニ・メルア
スカーコ
ルガンカ
ルーニバ
ヤ・ニバスイ
ヤ・ーリン
ヤ・ーリン
ヤ・ーリン

チャールス大帝

大帝は大志を抱き數十回の戰爭で、イタリヤとイスパニヤとの北部地方を取り、又ゲルマニヤの諸部落をも統一したので、八〇〇年にはローマ法王レオ三世(Leo III)から帝冠を受けて、西ローマ帝國を再興した。そして帝は心を內治に用ひて農・工業を保護し、學藝を奬めるなど、治績の大いに見るべきものがあつた。

西ローマ帝國の再興

帝の歿後に、その子孫は遺領を爭つて紛擾が絕えなかつたが、八四三ヴェルダン(Verdun)及びメルセン(Mersen)の兩條約で、これを東フランク・西フランク・イタリヤに三分した。これは後のドイツ・フランス・イタリヤ三國の基をなしたものである。



大帝の領土とその分裂略圖

第四章　神聖ローマ皇帝とローマ法王及び十字軍

㈠オット大帝と神聖ローマ皇帝　東フランク卽ちドイツではチャールス大帝の血統が絕えてから、諸侯が王を選擧する制となつた。その後オット一世(九二Otto I.)が王位に登つて諸侯の叛亂を平げ、蠻族の侵寇を防ぎ、イタリヤを併せ、[1]九六二年ローマ法王から帝冠を受けて神聖ローマ皇帝と稱した。これからドイツの國王は概ね代々この稱號を用ひ、法王の選擧や僧官の任免にも干涉するやうになつた。

オット大帝の偉業

神聖ローマ皇帝の尊號

[1] 村上天皇の御代、醍醐天皇の太祖が卽位した

㈡ドイツ皇帝と法王との衝突　十一世紀の中頃(一〇五三)、ローマ法王となつたグレゴリー七世(Gregory VII.)は、皇帝の上に立つて世界を統御しようと思ひ、まづ教會の積弊を改め、ついで僧官任免の權を皇帝の手から奪はう

グレゴリー七世

グレゴリー七世

法王權の極盛

つた。殊に法王インノセント三世(Innocent III.)は各國の帝王を凌ぐ程であつた。

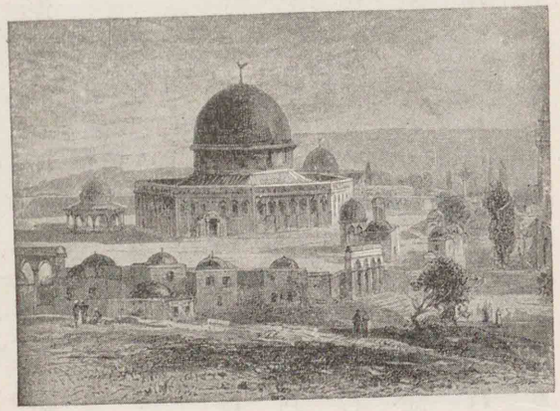
十字軍の原因

(三)十字軍　キリストの墳墓の地であつたイェルサレムは、初めサラセンの有であつたが、セルジュック=トルコ(Seljuk-Turks)がこれを略して(一〇七六)から、西ヨーロッパの諸國から來る順禮者を虐待したので、ローマ法王ウルバン二世(Urban II.)は熱心に聖地回復の軍を起す必要を唱へた。そこで宗教心に燃え、敵愾心に富んでゐた封建武士等は、大いに感激して前後數回出征した。これを十字軍(Crusades)といふ。

十字軍の經過

イェルサレム

武士出發の光景



十字軍の結果

かくて第一回十字軍(一〇九六—一〇九九)の結果、聖地はキリスト教徒の手に回復せられ、やがてイェルサレム王國が建てられたけれども、後、トルコ人に滅されたそ(一〇九九—一一八七)の後これを回復する爲になほ數回遠征を試みたが、終にその目的を達するやうにならなかつた。

十字軍失敗の結果、宗教熱は急に冷め、法王の威信は地に墜ちた。又出征し

た諸侯や武士のうちには產を失つたり、死んだりしたものが多かつたので、封建制度は大いに衰へた。けれども東・西兩洋の交通が開けて、航海や貿易の事業が發展し、都市の興隆を促し、サラセンの發達した學藝を西歐の諸國に輸入して、ヨーロッパ人の見聞を廣めたなど、その影響する所は頗る大きかつた。

第五章　西ヨーロッパの制度及び社會

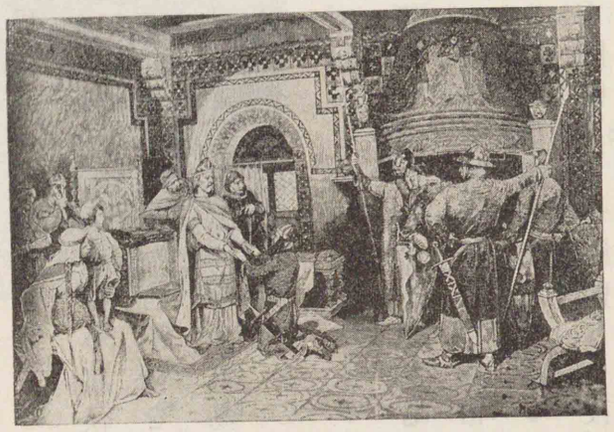
封建制度の起因

㊀ 封建制度 Feudalism　封建制度はフランク國でサラセンの侵寇を退ける爲に、王領や寺領を割き、封土としてこれを部下に與へて新に君臣の關係を結び、その報酬として部下は平時馬を飼ひ、乘馬・用兵の術を練習し、事ある日には、王に從つて忠誠を盡させたのに基いてゐる。その後封土が世襲となり、これを有するものも亦その一部を部下に與へて、更に君臣の關係を作るやうになつた。ついで諸侯・僧侶・都市もこの

組織

例に倣ひ、多數の家來を封じて自衞を圖つたので、十世紀になつてその組織が完備し、爾後約五百年間、イングランド・フランス・ドイツなどの西ヨーロッパの諸國に於ける重要な政治組織となつた。

武士宣誓式擧行の光景



武士の修養

㊁ 武士道　封建制度が發達するに隨つて、武士といふ一階級が出來た。卽ち武士は幼時禮節を學び武藝を磨き、その上神前に嚴かな儀式を擧げて武士道を守る誓をしたものである。隨つて武士は忠誠を旨とし、名譽を重んじ、神を崇び婦人を敬ひ、その上弱者を憐み權勢に屈しなかつたので、社會の華として非常に重んぜられた。

武士の氣風

農民の狀態

㊂ 農民と商人との狀態　古代のヨーロッパ人は勞働を賤しみ、これ

を奴隷に委ねて顧みなかつたが、中古紀になつてからキリスト教の感化を受け、勞働を人生の訓練と考へこれを尊重するやうになつた。けれども經濟生活はまだ小規模で、商・工業も幼稚であつた。中でも農民は武士の壓制と地主の誅求とで、最も悲慘な境遇に陷つてゐた。

商人の狀態

都市の商人は初め諸侯に屬してゐたが、農民に比して稍富裕であつたので、次第に自治權を買收して、その束縛を脫するやうになつた。十字軍以後地中海の貿易が俄かに活氣を呈し、貨幣の流通も漸く盛となつたので、イタリヤのヴェニス(Venice)・ジェノア(Genoa)・フロレンス(Florence)などの諸市がまづ發展した。ついでライン(Rhine)・ドナウ及びローヌ(Rhône)などの諸大河の沿岸の要所に、多數の都市が興るやうになつた。

かやうに發達した都市は、十二世紀以來互に同盟して王侯の壓制を防ぎ、商業の發達を圖るものもあつた。ライン都市同盟・スワビヤ(Swabia)都市同盟・ハンザ(Hansa)同盟などは、その最も有名なものであつた。

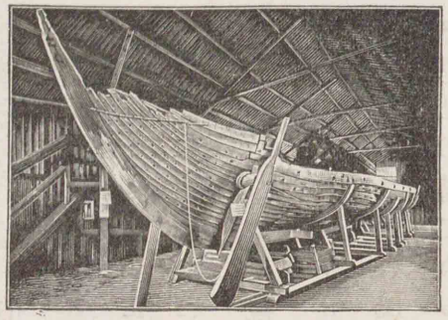
アングロ・サクソンの建國

ノルマンのイングランド征服

第六章　西ヨーロッパ諸國王權の發達

一　イングランド

五世紀の中頃から、アングロ・サクソン人がイングランドに渡り、土人を北方へ逐つて新に七王國(ヘプタ・ーキー Heptarchy)を作つたが、九世紀になつてエグバート(八二七―八三七 Egbert)王はこれを統一してイングランド王國(England)を建てた。



ノルマンの船　ノルウェーのオスロー大學藏。

その頃、ノルマン(Normans)といふ北方の民族が頻りに西ヨーロッパの諸國を侵してゐたが、イングランドも亦十一(一〇六六―一〇四二)世紀の初に、一時その一派であるデーン(Danes)人に併せられた。その後一〇六六年になつてノルマンディー侯ウィリヤムが大擧して侵入し、アングロ・サクソン人を破つてイングランドの王位に登つた。ノルマン王統は僅かに四代で絶え、ウィリヤムの

外曾孫アンジュー伯ヘンリーがフランスから來て王となつた。そしてフランスにあるイングランド王の領土は、フランス王の領土よりも遙かに大きかつたから、兩國の衝突は避けられない勢となつた。次王ジョン John は性質亂暴で失政が多く、外ではフランスにあつた領地の大部を失ひ、內では重稅を課して民衆を苦しめたので、一二一五年貴族や僧侶などはロンドン市民と共に、國王の失政を責め、王に迫つて大憲章（マグナカルタ）Magna Charta に署名させ、人民の生命及び財產の安全を保護した。これがイギリス憲法の基である。その後ヘンリー三世は大憲章を守らなかつたから、貴族・僧侶の外新に州・市の代表者をも召集（一二六五）して、始めて議會 Parliament を開いて國事を審議させた。これが實にイギリス下院 House of Commons の起源である。

大憲章の制定

議會の起源

二　フランス　フランスでは初は、諸侯の力强くて王權が振はなかつたが、十二世紀の後半から英主が相次いで出で、內は諸侯の權力を抑へ、外は法王を威壓したので、王權が漸く伸張した。その後フィリップ Philip VI.

チャールス七世卽位式に於けるジャンヌダルク

（裏面の說明を見よ）

ジャンヌ"ダルク

十六才

国民性発揮の

祖国の危機を救ふ

ブルゴーニュ公がイギリス

から金をもらひ一万ルーブル

でジャンヌ"ダルクを賣つた

そして、フランスのアンで焼きころ

された。時年十九才であつた

チャールス七世卽位式に於けるジャンヌ"ダルク

ジャンヌ"ダルクはオルレヤンの少女として知られ、百年戰役でフランス軍が連戰連敗し、國運危殆に瀕してゐたのを遺憾とし、自らフランスを救ふ天使であると稱へ、國王の認許を得て軍隊の先頭に進んでこれを指揮した。卽ちダルクは頭に白甲を戴き、白馬に跨り、腰に長劍を横へ、左手に百合の花を縫箔した大旗を提げて將卒を激勵した。そしてその燃ゆるやうな愛國の熱情と颯爽たる英姿とによつて、士氣は忽に鼓舞せられ、僅かに一週間でオルレヤン域の重圍を解いてイギリス軍を破り、一四二九年にチャールス七世を奉じてレンス大伽藍で嚴肅な卽位式を行はせた、

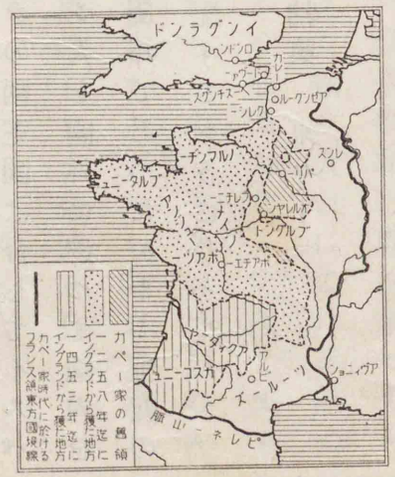
この油畫は、畫家ルヌヴーがその光景を描寫したもので、パリーのパンテオンの壁畫として有名である。

百年戰役の原因及びその結果

百年戰役略圖

六世が國王になると、イングランド王エドワード三世は自分が王位を相續する權利があると稱し、フランスに侵入して宣戰した。これを百年戰役といふ。この役にフランス軍は常に敗れ、オルレヤン城も圍まれて國運頗る危くなつた。この時、ジャンヌ"ダルクといふ一少女が現れて、國難を救ふべき神託を受けたと稱し、自ら陣頭に立つて將士を激勵したので、士氣は大いに振ひ、忽ちオルレヤン城の圍を解き程なく敵軍を國外に驅逐して國運を回復した。

Jeanne Orléans Hundred Years War 1339-1453 Darc 一四三三



㊂西歐諸國の王權擴張

フランスでは百年戰役後、諸侯の疲弊したのに乘じてこれを抑へ、王權の擴張に努めたので、十五世紀の末にはフランス王は全國を統一することが出來た。イングランドでも百

[1] 將軍義政の時代

イスパニヤ王國の建設

ポルトガル王國の建設

オスマン=トルコの建國

年戰役について薔薇戰役[1] War of Roses 1455–1485といふ内亂が三十年間も續き、諸侯の家が多く斷絶したので、王權は大いに發達した。

イスパニヤ Spain ではコルドヴァ[一〇五一]のカリフ朝が滅びて、數多のキリスト教國が再び興つた。そしてアラゴン Aragon・カスチラ Castile の兩王國は合してイスパニヤ王國を建て[一四九二]、諸侯の權を抑へ、サラセン人を國外に逐つて國内を統一した。ポルトガル Portugal は初め、カスチラの屬邦であつたが、十一世紀の末に獨立し十三世紀にはその全土を支配するやうになつた。

第七章　オスマン=トルコの勃興　東ローマ帝國の滅亡

一　オスマン=トルコ

オスマン=トルコ Osman Turks はトルコ民族の一派で、もと カスピ海 Caspian Sea の東方に住んでゐたが、蒙古族 Mongol の壓迫を避けて小アジヤに移り、十三世紀の終りに、酋長オスマン Osman がその地に小王國を建てた。そ

アンゴラの戰

マホメット二世

東ローマ帝國の滅亡

文藝復興の原因

の子孫は東ローマ帝國の衰運に乘じて、次第にその領土を略し、バヂャシッド Badjasid 一世は更にブルガリヤ Bulgaria・マケドニヤ・ギリシヤなどを征服し、進んでコンスタンチノープルを圍んだ。この時、チムール Timur が東ローマ皇帝の願を容れ、來つてバヂャシッドとアンゴラ Angora で戰ひ[一四〇一]、大いにこれを破つた。ところがチムールは間もなく病歿[一四〇五]して、その帝國が忽ち瓦解したので、トルコは再び勢を回復し、マホメット二世 Mahommed II. は遂にコンスタンチノープルを陷れて[一四五三]東ローマ帝國を滅し、都をここに遷し、四方を攻略して大帝國を作つた。

第八章　文藝の復興　地理上の發見

一　文藝の復興

中古の前半期はヨーロッパ到る所混亂を極め、文藝の研究は殆ど顧みられなかつた。ところが十一世紀以來大學の創設

やサラセン文化の輸入などで、人智が漸く發達した。その上東ローマ帝國の滅亡後、東方の學者でイタリヤに來るものが多かつたので、十三世紀頃から人道學者(Humanists)が輩出し、宗門の傳說や敎會の束縛を離れてギリシヤやラテンの古典を研究し、以て眞の人性を發揮することを熱望した。プロレンスの人ダンテ(Dante)はその最も有名な代表者である。そしてこの學說は、爾後ドイツ・フランス・イングランドなどの諸國にも傳つた。

中古美術の特色

(二)美術の復興　美術も亦文學の復興と關聯して、同樣に發達した。中古の前半期の美術は、いづれも敎會の束縛を蒙つてゐたが、その後半期の所謂復興時代になつては、かかる束縛を破り、古來襲用した美術上に寫實の新分子を加へ、人生の眞と美とを表すことに努めるやうになつた。そこで建築は從來のローマネスク式(Romanesque Style)卽ちローマ風の建築・ゴシック式(Gothic Style)卽ちドイツ風の建築の外、新に復興式を出し、彫刻は古代

聖母…ラファエルの筆（フロレンス繪畫館藏）

（裏面の說明を見よ）

ラファエル＝サンチは藝術家の泰斗ミケランジェロと共に、文藝復興期に於ける特に傑出した畫家であつた。初め父に就いて繪畫を學び、後、ペルーヂノの薫陶を受けてその畫風を慕ひ、次第に熟達するやうになつた。フロレンスに移つてから、好んで聖母及びその一族の畫を描いて大名を博した。本畫はパリーのルーヴル博物館、ウィーンの繪畫館所藏の聖母と共に、顯著なものの一である。

ミケランジェロとラファエル

ラファエル

磁針及び火藥の應用

ゲーテンベルヒ

活版術

ギリシヤの壘を摩し、繪畫は最も著しい發達を遂げた。中でも建築・彫刻に於けるミケランジェロ、Michaelangelo繪畫に於けるラファエル Raphaelは、共に萬世の師表と仰がれた。この外レオナルド＝ダ＝ヴィンチ Leonard da Vinciは畫家として、ブラマンテ Bramanteは建築家として、共に不朽の大作を遺してゐる。

三 器械の發明とその應用 文藝の復興と前後して、諸種の發明やその應用も盛に起つて世態を一變させた。中でも磁針の應用で遠洋航海の發達を促し、新大陸や新航路の發見となり、火藥の應用で戰術の革新を促し、封建制度の崩壞を助けた。次に活版術は十五世紀の中頃、ドイツのマインツ Mainzの人グーテンベルヒ Gutenbergの木製活字の發明に起源し、後、その徒がこれに改良を加

へ、金屬の活字を作るやうになつてから、廣く諸國に採用せられ、多數の印刷本を低廉な費用で供給する途が始めて開かれて、學問の普及や文化の發展に貢獻したことが實に偉大であつた。

初期の活字印刷機

㊃ 印度航路の發見　中古の後半期に、トルコが興つて東・西交通の要路を占め、東洋の貨物に重稅を課したので市價が暴騰し、東洋貿易は爲に一頓挫を來した。そこでヨーロッパ人の嗜好に適した東洋の貨物を、直接原產地から輸入しようと思ひ、遂に地中海以外の海洋を航行して、印度や東方アジヤ地方に達すべき新航路を發見しようとするやうになつた。

ポルトガル人の印度に達する新航路の發見

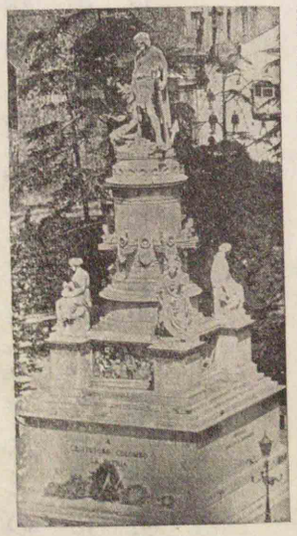
かくてポルトガル人は王室の特別な奬勵で、十五世紀以來熱心にアフリカの西端に向つて探檢的航海を試みたが、終に一四九八年に、

ヴァスコ・ダ・ガマ

その國人ヴァスコ・ダ・ガマ Vasco da Gama はアフリカの南端なる喜望峰 Cape of Good Hope を迂回して、印度の西岸に達することが出來た。

㊄ アメリカの發見　これより先イタリヤのジェノアの人コロンブス Columbus は、地球が球形であるから、西航すれば印度に到ることが出來ると唱へ、イスパニヤの女王イサベラ Isabella の援を得て、一四九二年大西洋を西航し、偶然西印度諸島中の一島 San Salvador に着いた。その後彼はなほ三回の航海を試み、遂にアメリカ大陸を發見することが出來た。

ジェノア市に於けるコロンブス記念碑



㊅ 世界一周　ポルトガルの人マジェラン Magellan は、イスパニヤ王の命を奉じて大西洋を航し、南アメリカの南端

マジェランの世界周航

を迂回して太平洋に出て、一五二フィリッピン諸島を發見した。マジェランはこの地で歿したが、部下のものはなほ航海を續け、喜望峰を廻つて本國に歸つた。これが世界一周の始で、地球が球形であることは、實際に證明せられたのである。

中古史摘要及び年表

中古期は三七五年ゲルマニヤ民族が大移動を起してから、宗教改革の發端まで約一千百五十年間を包み、我が仁德天皇の御代の末から後柏原天皇の御代の中頃（足利氏の季世、戰國時代）までで、支那

中古史摘要及び年表

中古期は三七五年ゲルマニヤ民族が大移動を起してから、宗教改革の發端まで約一千百五十年間を包み、我が仁德天皇の御代の末から後柏原天皇の御代の中頃（足利氏の季世、戰國時代）までで、支那では東晉の孝武帝の末から明の武宗の時代に及んでゐる。この期の初にゲルマニヤ民族は西ローマ帝國を滅し、その遺領に數個の獨立した王國を建てて、次第にその勢力を伸ばした。そしてドイツ皇帝はその威力の强大なのに乘じ、遂に帝權を以て全ヨーロッパを統一しようとした。キリスト教會を總監するローマ法王はこれに反して、帝王の上に立つて法權でこれを統べようとし、ここに兩者の間に多年の紛爭を惹起した。しかし、兩者共に失敗したので、封建制度の新組織は西ヨーロッパ諸國の間に用ひられて、到る所に政治的分裂の傾向を馴致したけれども本期の末には國家主義が漸く唱道せられ、一旦分裂した小邦を更に結合して、イングランド・フランス・イスパニヤ及びポルトガルなどの諸國を現出するやうになつた。

前期の末に燦爛たる光を放つた文藝は、本期の前半に於て全く放擲せられたが、その後半には再興せられた。トルコが過重な通過稅を課した爲に、一時廢滅しさうになつた東洋貿易も、新陸地・新航路の發見によつて再び盛となつた。

年代 國史・東洋史との對照

皇紀	西紀	重要事項	日本	支那	重要事項
一〇三五	三七五	ゲルマニヤ民族移動の始	仁德	東晉孝武	前三年佛教が高勾麗に入つた
一二三六	四七六	西ローマ帝國の滅亡	雄略	宋廢帝	後三年宋滅亡
一二八二	六二二	マホメット教國の紀元元年	推古	唐高祖	後十二年景教が唐に入つた
一四六〇	八〇〇	チャールス大帝が西ローマ皇帝となつた	桓武	唐德宗	後四年最澄が入唐した
一六二三	九六二	オット一世が神聖ローマ皇帝となつた	村上	宋太祖	前二年太祖が後周を滅して自立した
一七五六	一〇九六	第一回十字軍の發端	堀河	宋哲宗	後十九年女眞が國號を金と稱した

年代 國史・東洋史との對照

皇紀	西紀	重要事項	日本	支那	重要事項
一八七五	一二一五	イングランド大憲章の發布	順德	南宋寧宗	後六年承久の亂。前九年鐵木眞が成吉思汗と號した
一九二五	一二六五	イングランド國會（下院）の創設	龜山	南宋度宗	後三年蒙古の使が我が國に來た
二〇一六	一三五六	ドイツ金印勅書の發布	後村上	元順宗	後二年尊氏歿。後十二年元滅亡
二一一三	一四五三	東ローマ帝國の滅亡	後花園	明景宗	後十四年應仁の亂が起つた
二一五二	一四九二	コロンブスがアメリカ大陸を發見した	後土御門	明孝宗	前十二年欽察汗國滅亡
二一五八	一四九八	ヴァスコ・ダ・ガマが印度カリカットに達した	後土御門	明孝宗	

第三篇　近古史

第一章　宗教改革

㊀宗教改革の氣運　中古の末、ローマ教會の風紀が紊れて來たので、改革を唱へるものが屢〻起つたが、いづれも目的を達することが出來なかつた。その後文藝が復興し、教會革新の氣運は大いに熟したに拘らず、法王は毫も反省せず、ローマのセント=ピーター寺院建立の資金を得ようとして、罪障消滅符(Indulgence)を販賣した。ドイツの僧マルチン=ルーテル(Martin Luther)は大いにその非を鳴し、教會改革の必要を唱へて斷然法王に反對した。これが宗教改革(Reformation)の發端で、實に一五一七年であつた。

教會の腐敗

ルーテルの改革説

㊁チャールス五世とルーテル　その後イスパニヤ王チールス一世(一五一九)が選ばれてドイツ皇帝となり、チャールス五世(Charles V.)と稱した。帝は北イタリ

チャールス五世

ヤの地でフランス王と爭つてゐた關係上、ローマ法王の要求を容れて、特にルーテルをウォルムスの國會に招いて、その說を取消させようとした。しかし、ルーテルは頑としてこれを斥け、益〻新教義の弘布に努めた。

三　改革運動の成功　チャールス五世はルーテル派の新教徒（これをプロテスタントといふ。Protestant）を抑へようとしたが、フランス王は皇帝の勢力を嫉んでトルコと結び、新教徒を援けて飽くまで皇帝に反抗したので、チャールス五世も遂に素志を飜し、[1]一五五五年アウグスブルグ（Augsburg）に宗教和議を結び、ドイツの王侯及び都市に信仰の自由を許した。これからルーテルの教はドイツを中心として、デンマルク（Denmark）・スウェーデン（Sweden）・ノルウェー（Norway）など

ルーテル自說を棄てず

罪障消滅符販賣の光景

ハンス・ホルバインの筆になつた木版畫に據る。

アウグスブルグ宗教講和

1 後奈良天皇の弘治元年　この年毛利元就が陶晴賢を嚴島に滅した

ルテールる家庭に於け

（表面解說參照）

家庭に於けるルーテル

獨逸マルチンルーテルは一四八三年十一月十日ザクソニヤ州アイスレーベンに生る。父は鑛夫にして、子の意忘に從ひ法律學を修めんとせしが、途に一四八五年十一月十九日ヒルデブルヒ僧院に入りて、研學二年、ウィッテンベルヒ大學の神學教授となり、偶一五一七年十月九日ルーテルは彼の有名なる「ローマ」に出でて新設僧庵に法律學を修めんとせしが、途に一四八五年十一月十日ザクソニヤ州アイスレーベンに生る。父は鑛夫にして、子の意忘に從ひ

植民地などを領し、ポルトガルの王位をも兼ねて國富み兵強く、その勢力は全歐を壓した。王は早くからこの勢力を利用して舊教の普及を企て、まづ領國ネーデルランドに舊教を強ひ、又その特權を奪つて專制政治を行つた。そこで新教に歸依してゐた北部の七州は、大いに怒つて獨立を宣言し、オレンジ公ウィリヤム(Orange)を推して總督とし、數回交戰の後、(一五八一)オランダ共和國を作つた。

オランダ獨立の原因

オランダは戰爭中、(一六〇一)東印度商會(Dutch East India Company)を創立し、ついでジャヴァ島(Java)の(一六一九)バタヴィヤ(Batavia)に根據地を置き、臺灣を占領して盛に我が國及び支那と貿易し、一時東洋貿易の全權を握つた。

東印度商會の創立

㊂イングランドの宗教改革　イングランドでは、ヘンリー八世が皇后の離婚問題でローマ法王と關係を絶ち、(一五三四)イングランド教會の首長となつた。次王エドワード六世(Edward VI.)は新教に贊し、教義上、復法王と分離したが、姉メリー(Mary)が相續して舊教を復した。異母妹エリザベス(Elizabeth)がその

イングランド王法王と絶つ

1 後陽成天皇の慶長三年　この年秀吉が薨じた

後を承けると、又前代の方針を變じ、新教に基いたイングランド教會を確立してこれを國教とした。そして首長令と統一令とを出し、文・武の官吏に國教を奉じ、女王に忠節を盡すことを誓はせ、從はないものには嚴罰を加へることとした。その結果、清淨派(Puritan)に屬するもので、オランダやアメリカの新大陸方面に移住したものが頗る多かつた。

エリザベス女王の新教主義

㊃フランスの紛爭　フランスではユグノー(Huguenots)と稱する新教派が成立したので、舊教派との間に爭が起り、イングランド・ドイツの二國はユグノー派を援け、法王とイスパニヤとは舊教派に黨し、戰亂と虐殺とが相ついだが、ヘンリー四世は(一五九八)ナント勅令(Edict of Nantes)を發して、信教の自由と新・舊兩派の同權とを認めたので、多年の紛爭が漸くなくなつた。

ナント勅令

㊄三十年戰役　ドイツでもアウグスブルグの宗教講和後、新・舊兩教徒はなほ軋轢してゐたが、ボヘミヤの新教徒がその王フェルヂナンド(Ferdinand II.)二世の壓制に反抗して(一六一八)兵を擧げたので、三十年戰役が起つた。

三十年戰役の原因

1 明正天皇の寛永九年この年秀忠が薨じた

デンマルク王を破る

グスタフ＝アドルフ

スウェーデンの干渉

ワレンスタイン

フランスの戰爭參加

翌年フェルヂナンド二世はドイツ皇帝となつて新教徒を破り、ついで北方から侵して來たデンマルク王クリスチヤン四世（Christian IV.）の軍をも擊退した。間もなくスウェーデン王グスタフ＝アドルフ（Gustavus Adolphus）がフランスと結んで來り侵したから、帝は勇將ワレンスタイン（Wallenstein）を擧げてこれに當らせたので、兩雄は一六三二リュッツエン（Lützen）に於て戰ひ、グスタフ＝アドルフは大勝したけれども、不幸にも陣歿した。

その後フランスは、政治上の目的から戰爭に加つたので、ドイツ國民の戰意は俄かに衰へ、終に一六四八ウェストファリヤ（Westphalia）の條約を結んで講和した。

ウェストファリヤ條約の内容

ルイ十四世の親政

この條約で、フランスはライン左岸の地を、スウェーデンはポメラニヤ（Pomerania）の地を得、スウィスとオランダとの二國は各、その獨立を認められ、新・舊兩教徒の同權も亦承認せられた。

この戰爭で、列國の宗教上の爭は全く終を告げたが、ドイツ帝國内の諸侯は割據獨立したから、帝權は愈、衰へ人口が著しく減じて、都市と農村とは共に疲弊し、文化は廢れ國民の意氣は衰へ、愛國の精神も亦跡を絶つやうになつた。

第三章　フランスの强大

㊀ フランスの興隆

ヘンリー四世の歿後、リシュリー（Richelieu）やマザレン（Mazalin）などの賢明な宰相が相ついで出で、幼主を輔けて内は王權を固くし、外は大いに國威を發揚した。

マザレンの歿後、ルイ十四世（Louis XIV.）は萬機を親裁し、コルベール（Colbert）などの能

マザレン

吏を用ひて財政を整へ、産業を勵まし、且植民や貿易の事業を興したので、國力が充實して王權は強盛となつた。

㈡ルイ十四世の外征　ルイ十四世は早くから大望を抱き、初、ネーデルランドを攻め、次に隣國オランダと戰ひ、更にファルツ Pfalz を侵して多少の戰果を收めた。その後イスパニヤ王チャールス二世が歿すると、ルイ十四世はその遺志を奉じ、己の孫フィリップを立ててイスパニヤ王とした。ところがドイツ皇帝レオポルド二世はこれを悅ばず、フランスの强大を嫉んでゐたイングランド・オランダ・ポルトガルなどの諸國と同盟して宣戰した。これをイスパニヤ繼承役といふ。War of Spanish Succession

この役に兩軍は十三年間戰つたが、フランス・イスパニヤの軍は屢〻利を失つた。しかし、イングランドに政變が起つて主戰黨內閣が倒れ

イスパニヤ繼承役

ユトレヒト講和

たのと、ドイツ皇帝ジョセフ一世が歿したのとで局面一轉し、遂にユトレヒト Utrecht で講和し、フランスとイスパニヤとの兩國が合併しないことを條件として、フィリップ五世はイスパニヤ王となつた。

㈢ルイ十四世の榮華　ルイ十四世は數度の外戰によつて、莫大な軍資を費したばかりでなく、華麗宏壯なヴェルサイユ Versailles の宮殿を營み、榮華を擅にした。これが爲にフランス語は、各國上流社會の用語となり、その文學・禮式及び風俗なども各國の模範と仰がれ、一時ヨーロッパ文化の中心となつた。けれども國民の氣風は漸く衰へ、租稅の徵收愈〻その度を高めて、不平

ルイ十四世の家庭

ロンドン、ウォレス集古館藏油繪。

革命の萠芽

の聲が四方に起り、大革命の萠芽はここに胚胎した。

第四章　イングランドの革命

㊀エリザベス女王の治績

イングランドの舊教徒は、新教を信じてゐたエリザベス女王を廢し、イスパニヤ王フィリップ二世の援を得、スコットランドの前女王メリーを迎へようとした。そこでエリザベスはまづメリーを殺し、ついでイスパニヤ王フィリップ二世の派遣した無敵艦隊(Invincible Armada)をイギリス海峽で破り、イングランドが他日海軍國たる基を作ることが出來た。この外女王の治世には、北アメリカの東岸にヴァージニヤ(Virginia)の植民地を作り、又1600東印度商會(East India Company)設けられて印度拓殖の端緒啓け、或は學藝を奬めて大

メリーの誅戮

無敵艦隊の撃破

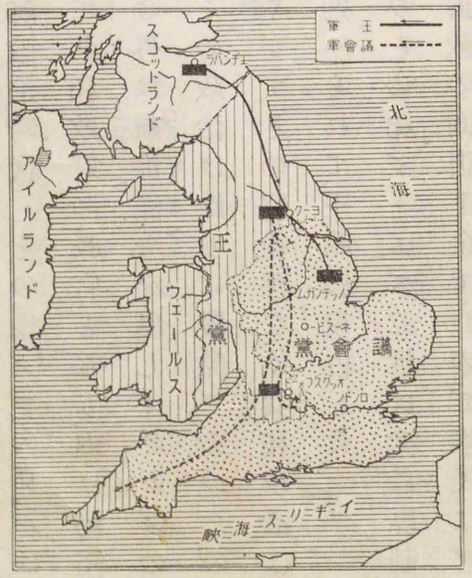
シェクスピヤ

學藝の奬勵

劇詩家シェクスピヤ(Shakespeare)を始め、詩人スペンサー(Spenser)・哲學者ベーコン(Bacon)などを出して、文學の隆盛時代を現出した。

㊁內亂

エリザベスが歿してチュードル(Tudor)朝が絕えたので、ジェームス一世がスコットランドから入つてイングランド王となり、スチュアート(Stuart)朝の始祖となつた。國王は王權は神聖であると唱へて專制政治を行ひ、屢〻議會と衝突した。その子チャールス一世も亦失政が多く、武力で議會を壓しようとしたので、議會も亦兵を集めて王に逆らひ、終に八年に互る內亂となつた。この時、議會黨の勇將オリヴァー・クロムウェル(Oliver Cromwell)は大いに王軍を1645ネースビー(Naseby)に破つて國王を奔らせた。ついで



革命時代のイングランド圖

チャールス一世の失政

國王の刑戮

クロムウェル

名譽革命

海運業を抑へて國威を揚げたが、その政治は餘りに嚴酷であつたので、不平の聲が漸く喧しくなつた。やがてその歿後程なく、共和政治は滅び、前王の長子チャールス二世が迎へられて、王政は復古した。

㊂王政復古　チャールス二世及びその弟ジェームス二世は、共に專制政治を行ひ、殊にジェームス二世は舊教の回復を企てたので、國民は怒つて王を廢し、その女婿で、オランダの統領であつたものを迎へて國王ウィリヤム三世とし、議會の公にした「權利の宣言」を守らせた。これを名譽革命といふ。Glorious Revolution

國王は捕へられ、議會はこれを死刑に處して、共和政治の成立を公にした。Commonwealth

㊁共和政治時代　その後クロムウェルは推されて共和政府の長官となり、內は勤王黨を除き、外は航海條令を出し、オランダの推[illegible]Navigation Act

大ブリテン王國

ルス族の建國

ロシヤの獨立

㊃大ブリテン王國　ジェームス一世以來、イングランド王はスコットランドの王位をも兼ねてゐたが、兩國は議會を別にしてゐた。ところが女王アンの時、全く合して大ブリテン王國（爾後イギリスと記してイングランドと區別する）Great Britain と稱した。女王が死んで嗣がなかつたので、ジェームス一世の外曾孫ジョージ一世が、ドイツのハノーヴァー家から入つて王統を繼いだ。これが今のイギリス王室の始祖である。George I.

第五章　ロシヤの勃興

㊀ロシヤの建國　ロシヤはノルマンの別派なるルス族の酋長ルーリックの建てた國であるが、一時蒙古人に攻略せられ、その後約二百年欽察汗國に屬してゐた。ところがモスコー大公イワン三世は、その束縛を脫して獨立し、その孫のイワン四世は皇帝と稱した。その後帝位はロマノフ朝に移り、數代を經てペートル大帝となつた。Kiptchack　Rurik　Moscow　Ivan III.　Czar　Romanov　Peter the Great

ペートル大帝の内治

ペートル大帝

ペートル大帝のバルチック海沿岸地方略取の希望

チャールス十二世

を視察し、歸國後新に海軍を興し軍制を改め、教育の普及を企てたので、その面目を一新した。

㈡ペートル大帝　ペートル大帝は英邁で大志を抱き、早くから西歐の文物を輸入して國民を開發しようと思ひ、自らドイツ・オランダ・イングランド・オーストリヤなどを巡歷して、親しく造船術を究め、制度・文物

㈢北方戰役　大帝は曩にトルコから一六九六アゾフ海附近の地を奪つたので、スウェーデンからバルチック海の沿岸地方を略取しようと思つて、デンマルク・ポーランドと同盟し、一七〇〇スウェーデンに對して宣戰した。これを北方戰役といふ。スウェーデン王チャールス十二世

[1] 中御門天皇の享保六年將軍吉宗の時代

チャールス十二世遺骸護送の光景

ポルタヴァの戰

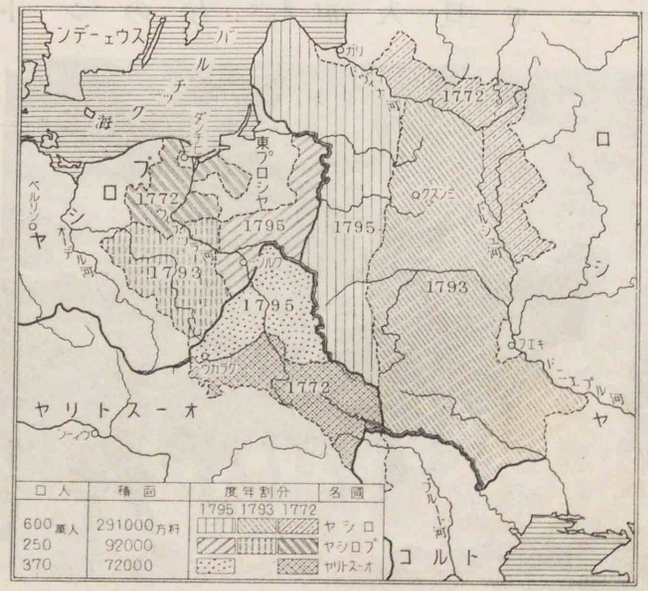
はデンマルクを攻めてからペートル大帝の軍を破り、轉じてポーランド及びサクソニヤに侵入した。この間に大帝はバルチック海の沿岸地方を略取し、帝都をペテルブルグ（今のレニングラード St. Petersburg Leningrad）に奠め、兵備を整へてゐたが、てチャールス十二世はロシヤに攻入つたが、一七〇九ポルタヴァ Poltava の役に大敗し、一旦トルコに逃れたが、後、本國に歸つて歿した。かくて[1]一七二一年兩國はニスタッドで和議を約し、ロシヤはバルチック海沿岸地方を得て、スウェーデン Nystad に代つて北方の強國となつた。

ネルチンスク條約の締結

ポーランド分割圖

四シベリヤの侵略　イワン四世がコサック兵をしてシベリヤ(Sibelia)に侵入せしめてから、次第に拓殖の歩を東方に進め、十七世紀の中頃には太平洋岸に達した。そして他の一隊は清國の北境に迫つて、屢〻清軍と戰つた。ペートル大帝はこれを遺憾とし、清國と交渉してネルチンスク條約(一六九二 Nertchinsk)を結び、外興安嶺とアルグン河(Argun)とを以て、兩國の境界を確定した。

五ポーランドの分割　ポーランド國はスラヴ人の建てた王國で、一時強盛であつたけれども、貴族が政權を專らにしてから、國勢



光格天皇の寛政七年將軍家齊の時代

カザリン二世

第六章　プロシヤの勃興

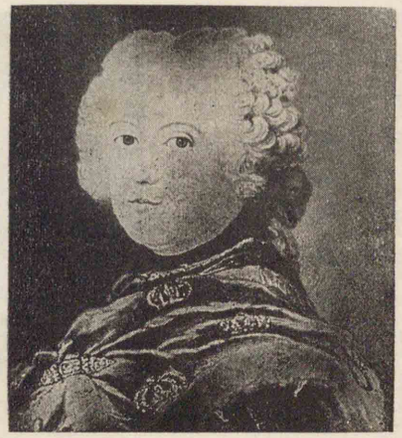
一プロシヤの建國　プロシヤはもとドイツ武士團(Teutonic knights)の所領であつたが、十七世紀の初、ブランデンブルグ(Brandenburg)選擧侯がその地を併せてプロシヤ公と稱した。ところがフレデリック三世はイスパニヤ繼承役に、ドイツ皇帝を援けた功によつて王號を許されたので、やがて卽位して[一七〇一]フレデリック一世(Frederick I.)と稱した。

が次第に衰へるやうになつた。ロシヤの女帝カザリン二世はこの機に乘じ、プロシヤ・オーストリヤ兩國と謀つて前後三回に亙つてその地の分割を行ひ、終にこれを滅(一七九五)してしまつた。ロシヤはかやうにしてヨーロッパ最强國の一となつた。

フレデリック大王の即位

次王フレデリック＝ウィリヤム一世は勤儉で武を尚び、よく國本を培養して、これをその子フレデリック大王に傳へた。

㈡ フレデリック大王 Frederick the Great　大王の即位の年、ドイツ皇帝チャールス六世が歿して男子がなかつたので、曩に公にした家憲に基いて、長女マリヤ＝テレサ Maria Theresa がオーストリヤの全領を相續した。ところがバヴァリヤ公 Bavaria・サクソニヤ侯 Saxony 及びイスパニヤ王などは異議を唱へ、協力してオーストリヤに侵入したので、オーストリヤ繼承戰役 The War of the Austrian Succession が起つた。



フレデリック大王

フレデリック大王のシレシヤ占領

この役にフレデリック大王は急に兵をオーストリヤ領に入れ、シレシヤ Silesia を占領した。マリヤ＝テレサはうら若い婦人であつたが、雄々しくも大王と二回の戰爭をなし、又列國の聯合軍と八年間奮鬪した後、アーヘン Aachen で講和して、諸國に自分の相續權を承認させ、シレシヤの地方はプロシヤに割讓した。一七四八

七年戰役の原因

㈢ 七年戰役　マリヤ＝テレサはシレシヤを奪ひ還さうと思ひ、プロシヤに倣つて國力の充實を圖り、又フランス・ロシヤ・サクソニヤ・スウェーデンなどの諸國と同盟して戰機を待つてゐた。

マリヤ＝テレサ

フレデリック大王はこれを探知したので、急にサクソニヤに入つて宣戰した、この役に大王は破竹の勢で三方面の敵を破つたが、中頃兵隊や軍資の缺乏で非常に困つた。

講和の成立

しかし、大王はなほ屈せずによくこれに堪へたので、形勢は有利になり、曩に奪つたシレシヤ地方を領有することを約して講和した。一七六三これから大王の威名は益〻高く、プロシヤはヨーロッパ最强國の一となつた。

イギリスの植民地

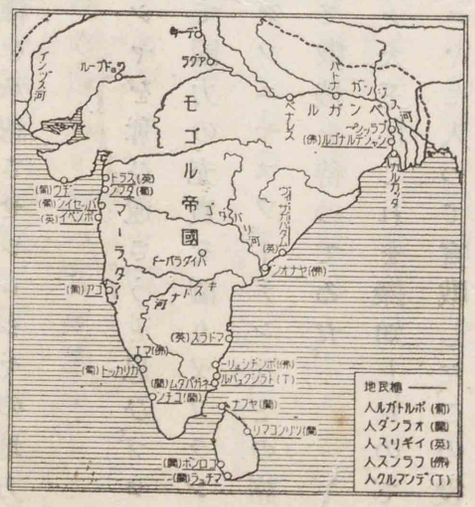
印度に於けるイギリス・フランス衝突圖

フランスの植民地

第七章　イギリス・フランス植民地の衝突　アメリカ合衆國の獨立

㊀衝突前に於ける兩國の植民地　イギリスはエリザベス女王以來植民を奬めたので、十八世紀には北アメリカの東岸に十三州の植民地を作つた。又印度では東印度商會の盡力で、モゴル(Mogul)帝國の衰運に乘じて、マドラス(Madras)・ボンベイ(Bombay)・カルカッタ(Calcutta)などを領有することが出來た。

フランスは十七世紀の初、北アメリカではカナダ(Canada)・ルイジヤナ(Louisiana)などの地方を併せ、印度では東印度商會(一六〇五)を創立し、シャンデナゴル(Chandernagor)・ポンヂシェリー(Pondicherry)などを取



植民地の七年戰役

クライヴ

獨立の原因

植民地の反對

を奪ひ、印度ではクライヴ(Clive)やヘースチングス(Hastings)などの努力で、フランスの植民地を壓するやうになつた。

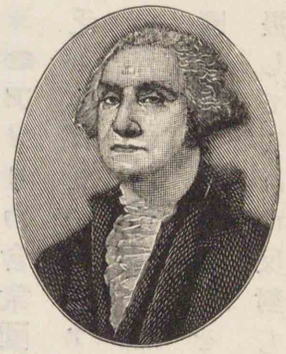
㊁兩國植民地の衝突　かやうにして兩國は、七年戰役の際にも兩方面で衝突したが、イギリスは軍資をプロシヤに補助しただけで、全力をフランス植民地の侵略に注いだので、遂にフランス軍を破つてカナダを奪ひ、印度では

㊂アメリカ合衆國の獨立　イギリスでは、七年戰役以來財政の窮乏を告げたので、北アメリカの植民地にも課稅した。ところが植民地の人民は自由獨立の精神に富み、本國の干渉を好まなかつたから、本國の議會に代議士を出さないのを理由とし、納稅の義務がないと主張してこれに反對した。そして植民地十三州の委員は(一七七四)フィラデルフィヤ(Philadelphia)

ワシントン獨立宣言書の公布

獨立戰爭前後に於けるアメリカ合衆國圖

ヨーロッパ諸國と合衆國



にし、ついでアメリカ合衆國を建てた。

獨立軍は初の間は振はなかつたけれども、フランスやイスパニヤの援を得てから優勢となり、遂に敵の根據地ヨークタウン(Yorktown)を陷れたので、さすがのイギリスもこれに屈して、一七八三年ヴェルサイユで和議を結び、その獨立を承認した。

その後合衆國は憲法(一七八七)を制定して共和政體とし、ワシントンを第一回の大統領に選擧し、ついで都をワシントン(一七九一)に奠めたので、建國の大業は漸く完成した。

に會して、植民地が自治權を得るまでは本國と通商しないことを議決し、翌年宣戰した。そこでワシントン(Washington)が總督となり、一七七六年に獨立宣言書を公

光格天皇の天明七年この年家齊が將軍となつた

合衆國の憲法

經驗說と唯理論

カントの新說

第八章　近古の文明

一　哲學と文學　哲學にはイギリスのベーコンが經驗說を唱へ、一切の知識は經驗に基くものであると說いた。これに反對してフランスのデカルト(Descartes)は唯理論を唱へ、吾人の知性は毫も經驗に基かない一定の原理を先天的に具へ、眞性の認識はこの原理から發生するものであると說いた。その後大哲學者カント(一七二四—一八〇四)(Kant)がドイツに出て、この兩說を綜合して新說を唱へ、近世哲學の開祖となつた。

世界の三大文學者

文學は各國の國語が出來てから著しく發達し、國民文學として見るべきものが續出するやうになつた。イングランドのシェークスピヤはドイツのゲーテ・シルレル（Goethe Schiller）と共に、世界の三大文豪として知られてゐる。その他イギリスのミルトン・ゴルドスミス（Milton Goldsmith）・フランスのモリエール・ラシーヌ・ドイツのレッシング（Molière Racine Lessing）なども皆非凡な文學者で、それぞれ大作を出してゐる。

シルレルとゲーテ　ドイツのワイマルにある記念碑。

㈡ 啓蒙文學

啓蒙文學の唱道

十七世紀以來科學思想の發展は、精神界にも多大な影響を與へ、人間の理性を以て舊來の因襲や迷信を斥け、その非理を破りあらゆる問題を解決して、知識を要求する社會に提示し、その蒙を啓かうとする新思想が興つた。これを啓蒙思想といふ。そしてこの

ヴォルテール

ヴォルテール　モンテスキュー　ルソー

思想から啓蒙文學が出たが、フランス語とその文學とがこの運動の機關として用ひられたので、フランスにこの派の大家が輩出した。卽ちヴォルテール（Voltaire）は輕妙な筆で、貴族・僧侶の專横や教會の腐敗を攻擊して革新の氣運を盛ならしめ、モンテスキュー（Montesquieu）は行政・立法・司法の三大權を分立する必要を唱へて、君主權の打破に努めた。次にルソー（Rousseau）は極端な自由平等論者で、當時の不自由・不平等な社會を覆すべきを說き、いづれも人心に多大の感動を與へた。

建築及び彫刻　モンテスキュー

繪畫

㈢ 美術

ミケランジェロの時代に極盛期に達した建築・彫刻は、十七世紀から十八世紀にかけては殆ど進步しなかつた。これに反して、繪畫にはイスパニヤにヴェラスケス（Velasquez）・

音樂
科學の大家
引力說
ニュートン
氣溫計
避雷計
蒸氣機關
紡績機
種痘法

ムリリョ・オランダにリューベンス・ヴァンダイク・レンブラントなどの大家が輩出したので、一時隆盛を極めた。音樂にはドイツにモザルト・ベートヴェンの二大家が出て各大名を博した。

四 科學　十六世紀にコペルニクス（ポーランド人）は地動說を唱へ、十七世紀にケプレル（ドイツ人）は天體諸星の運行に關する法則を確定し、ニュートン（イギリス人）は引力の大法則を發見した。更に十八世紀に入つて、各方面の大家が輩出して新學說を唱へたので、遂に科學の隆盛時代を作ることとなつた。

五 發明　かやうに科學が發達するに隨ひ、その應用も亦著しくなり、種々な發明が現れた。卽ちセルシウス（スウェーデン人）は氣溫計を、フランクリン（アメリカ人）は避雷針を、ワット（イギリス人）は蒸氣機關を、アークライト（イギリス人）は紡績機を、ジェンナー（イギリス人）は種痘法を發明

近古史摘要及び年表

近古期は一五一七年ルーテルがドイツ國で宗教改革の端緒を開いてから、一七八九年フランス革命まで、二百七十餘年間を包み、我が後柏原天皇の御代の中頃から、光格天皇の御代の初までで、支那では明の武宗の末頃から、清の高宗の末年に及んでゐる。この期の初にドイツで宗

二三一五	一五五五	アウグスブルグの宗教講和	後奈良	世宗	後六年天主教僧京師に布教。翌年シビル汗興つた
二三四八	一五八八	イングランドが無敵艦隊を擊破した	後陽成	神宗	後四年秀吉が朝鮮を征した。前六年利瑪竇支那に來着
二三五八	一五九八	ナント勅令の發布	後陽成	神宗	秀吉薨去。前二年オランダ人が東洋に來た
二三六〇	一六〇〇	イングランド東印度商會の創立	後陽成	神宗	關原の戰
二三六一	一七〇一	プロシヤ王國の建設	東山	聖祖	翌年赤穗義士の復讐
二三七三	一七一三	ユトレヒト（イスパニヤ）條約の締結（繼承役の終）	中御門	聖祖	後七年チベットが降つた
二四三六	一七七六	アメリカ合衆國の獨立宣言書の公布	後桃園	高宗	後四年鄭昭が暹羅王となつた
二四四三	一七八三	イギリスが合衆國の獨立を認めた（ヴェルサイユ和議）	光格	高宗	後三年暹羅が清に朝貢した

近古史摘要及び年表

近古期は一五一七年ルーテルがドイツ國で宗教改革の端緒を開いてから、一七八九年フランス革命まで、二百七十餘年間を包み、我が後柏原天皇の御代の中頃から、光格天皇の御代の初までで、支那では明の武宗の末頃から、清の高宗の末年に及んでゐる。この期の初にドイツで宗教改革が唱へられてから、その影響は諸方に波及し、ヨーロッパ到る所に新・舊兩教派の紛爭を惹起し、遂に三十年戰役で局を結んだ。その結果、ドイツは益〻疲弊して帝國分裂の狀態となり、イスパニヤも亦舊教擁護に敗れてその勢力を墜した。これに反してフランスはルイ十四世の努力によつて一時覇を唱へ、その勢威は將に全歐を風靡しようとした。

けれども、フレデリック大王がプロシヤに出で、ペートル大帝及びカザリン二世が前後してロシヤに君臨し、鋭意國運の發展を圖つたので、プロシヤ・ロシヤの國運は俄かに興り、遂にイギリス・フランスと對峙することとなつた。

次にイギリスの國基は、兩度の革命を經た後に却つて鞏固となり、國運は愈〻隆盛に向つた。そしてアメリカの植民地十三州は合衆國を組織して、イギリスから分離獨立したので、民主的憲法が制定せられ、國力が益〻充實してヨーロッパ大陸の諸國と比肩して、毫も遜色のないやうになつた。

文藝・科學の研究は本期に入つて益〻盛となり、大家・碩學が前後して輩出し、各〻名什傑作を遺した。そして植民・貿易事業も亦非常に發展し、ポルトガル及びイスパニヤの兩國がまづその利を占め、オランダがこれに次ぎ、フランスがその次に發達し、最後にイギリスはオランダ・フランス兩國の海上權を奪取して、アメリカ・印度及びオーストラリヤ方面に活躍し、遂に世界に於ける海王國たるの素地を作ることとなつた。

避雷針を、フランクリン（アメリカ人）Franklin は蒸氣機關
蒸氣機關
紡績機
種痘法
は氣溫計を、フランクリン（アメリカ人）Franklin は蒸氣機關を、アークライト（イギリス人）Arkwright は紡績機を、ジェンナー（イギリス人）Jenner は種痘法を發明

年代 國史・東洋史との對照

皇紀	西紀	重要事項	日本	支那	重要事項
二七七	一五一七	ルーテルが宗教改革を唱へた	後柏原	明 武宗	後九年モゴル帝國が印度に建設せられた
二二〇〇	一五四〇	耶蘇會の組織が成つた	後奈良	世宗	後三年ポルトガル人我が國に渡來。後二年サヴイエルゴアに來着
二二二五	一五五五	アウグスブルグの宗教講和	後奈良	世宗	後六年天主教僧京師に布教。翌年ジビルが來つた
二二四八	一五八八	イングランドが無敵艦隊を擊破した	後陽成	神宗	後四年秀吉が朝鮮を征した。前六年利瑪竇支那に來着
二二五八	一五九八	ナント勅令の發布	後陽成	神宗	秀吉薨去。前二年オランダ人が東洋に來た
二二六〇	一六〇〇	イングランド東印度商會の創立	後陽成	神宗	關原の戰

年代 國史・東洋史との對照

皇紀	西紀	重要事項	日本	支那	重要事項
二二〇八	一六四八	ウエストファリヤ條約の締結（三十年戰役の終）	後光明	清 世祖	前十一年島原の亂。前年李自成が清に降つた
二二四八	一六八八	イングランドの名譽革命	東山	聖祖	翌年ネルチンスク條約の締結
二二六一	一七〇一	プロシヤ王國の建設	東山	聖祖	翌年赤穗義士の復讐
二二七三	一七一三	ユトレヒト（イスパニヤ）條約の締結（繼承役の終）	中御門	聖祖	後七年チベットが降つた
二二四三八	一七七六	アメリカ合衆國の獨立宣言書の公布	後桃園	高宗	後四年鄭昭が暹羅王となつた
二二四四三	一七八三	イギリスが合衆國の獨立を認めた（ヴエルサイユ和議）	光格	高宗	後三年暹羅が清に朝貢した

して、或は工業界の革新を促し、或は人類の幸福を増すやうになつた。

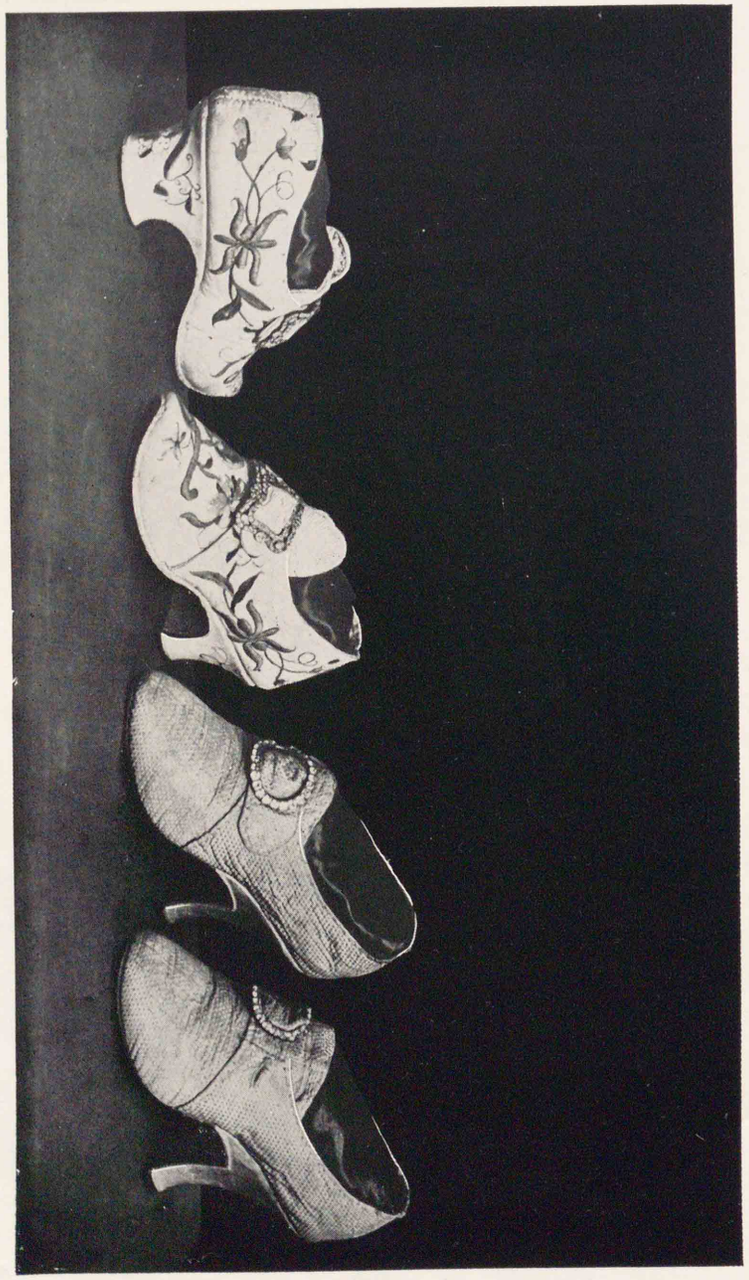
第四篇　近世史

第一章　フランス大革命

㊀革命の原因　フランスではルイ十四世以來、極端な專制政治行はれて人民の權利全く無視され、貴族・僧侶は土地の大半を有しながら免稅で、常に驕奢を極めてゐた。重い租稅を負擔して悲慘な境地に陷つてゐた農民や職工などは、このやうな有樣を見て不平に堪へなかつた。その上モンテスキューやヴォルテールやルソーなどの啓蒙文學者が、盛に君主の專制政治を非難し、人權の自由平等を唱へたので、一部の民衆は、アメリカ合衆國が獨立して共和政治を立てた例に倣つて、遂に奮起して大革命を起すやうになつた。

ルイ十六世の失政

㊁革命の發端　このやうな時に王位を踐んだルイ十六世は、前代



（裏面の説明を見よ）

ルイ十六世及世五十ィルの代時世六十ィルの人婦の靴（ミルク・ーリバ）（巖館物博）

ルイ十五世及びルイ十六世時代の婦人の靴

ルイ十五世及びルイ十六世時代の風俗は頗る華奢に流れ、婦人の服裝も亦華美を極めてゐた。隨つて婦人の靴も絹製の優美なもので、踵は高く爪先は小さく、且表面に精巧な刺繍を施し、その中央部に寶玉類を以て裝飾を加へたものが多數であつた。ここに掲げたのはその代表的なものである。

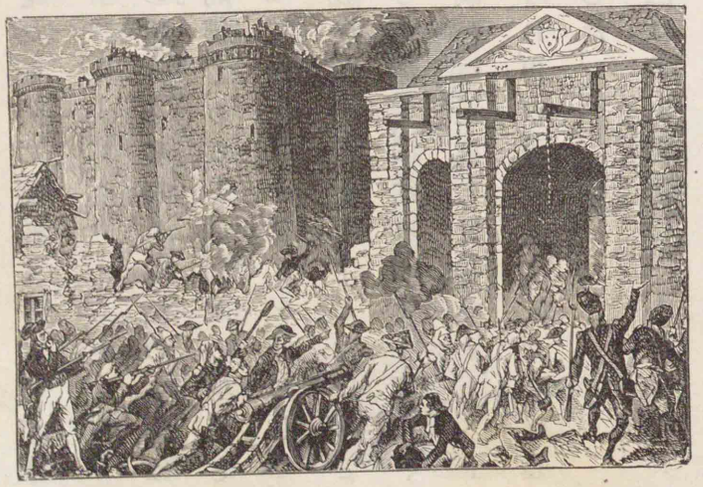
[1] 光格天皇の寛政元年清の高宗の時代

ルイ十六世

バスチーユ牢獄破壞の光景

革命の發端

の榮華な生活と、度々の外征とで紊亂した財政を整理しようとして、[1]一七八九年に久し振りで三部會を States General ヴェルサイユの宮殿に召集した。ところが議論が沸騰したので、結局平民議員は貴族や僧侶から離れて、別に國民議會を作つて、憲法を制定する National Assembly までは解散しないことを誓つた。その後王は貴族や僧侶の請を容れて、武力で國民議會を抑へようとしたから、不平の暴民はバスチーユ Bastille の牢獄を破つて、大革命の烽火を擧げた。これから暴



人權の宣言

國王の逃走及び幽閉

新憲法の批准

プロシヤ・オーストリヤ兩國の來援

動が各所に起つたので、貴族や僧侶などの國外に避難するものが頗る多かつた。

㊂王政の顚覆　その後議會は「人權の宣言」(Declaration of the Rights of Man)を發表し、政治の主權は人民にあること、すべての人民は自由同權であること、個人の身體と財産との安全は、共に保證せられるものであることなどを公にして、國民の自覺を促し、やがて立憲君主主義の新憲法を制定した。けれども國王の信頼してゐたミラボー(Mirabeau)が歿してから、議會の輿論は著しく共和に偏したので、國王は前途を憂ひ、竊かに王宮を脫してオーストリヤに遁れようとしたが、途中で捕へられ、再び王宮に幽閉せられ、曩に國民議會で制定した新憲法を批准した。

この時、プロシヤ・オーストリヤの兩國は革命思想の侵入を恐れ、兵を出してフランス王を援けようとした。議會では國王が兩國に援助を乞うたからであると想ひ、王を捕へて獄舍に禁錮し、軍隊を出して

フランス王の禁錮及びその死刑

マリー＝アントアネット

斷頭機

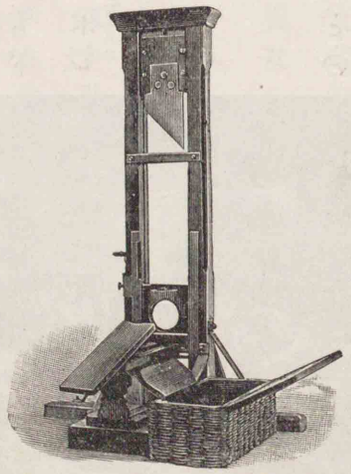
パリー、カルナヴァレ博物館にあ。

ロベスピエール

ロベスピエール等の誅戮

プロシヤ・オーストリヤの聯合軍を破り、やがて王政を廢して共和政治を建て、國王を死刑(一七九三、一月)に處した。

㊃恐嚇時代 (Reign of Terror)　國王が殺されたので、勤王黨は內亂を起し、諸外國は第一回の對フランス大同盟(The First Coalition)を作つて四方からフランスに攻めよせた。そこで過激黨(Jacobins)は前王の妃マリー＝アントアネット(Marie Antoinette)を始め、多數の政敵を悉く斷頭機上で殺し、頗る殘酷を極めたので、世人はこの時代を恐嚇時代(一七九二—一七九四)と呼んだ。ところが間もなく、國民が奮起して最も暴威を逞しくした



新憲法の制定

ナポレオンのオーストリヤ征伐

恐嚇時代の牢獄内で刑戮者を點呼する光景

ヴェルサイユ博物館藏の繪畫に據る。

ナポレオンのエジプト遠征

ロベスピエール等を殺して、過激黨を倒した。Robespierre

五　都督政府　Directory 1795–1799　その後議會は新憲法を作り、行政權を五人の都督に、立法權を上・下兩院に委ねて自ら解散した。Director 新政府はオーストリヤを征伐する爲に三軍を出したが、そのうちドイツに侵入した二軍は共に敗れ、獨りナポレオン=ボナパルトが率ゐて北イタリヤに進出した軍は、到る所に敵を破つてオーストリヤに入り、同國に地を割かせて講和した。Napoleon Bonaparte

ついでナポレオンはイギリスと印度との交通を絶たうとして、エジプトに渡つてその地を占領したが、その海軍はイギリスのネルソン提督にアブーキル灣で破られた。Nelson Aboukir

第二回對フランス大同盟

ナポレオンの實權掌握

ナポレオン一世

オーストリヤ軍をイタリヤに破る

六　執政政治　この頃イギリスが更に第二回の對フランス大同盟を組織して、フランスに侵入したので、パリーの人心は頗る動搖した。一七九ナポレオンはこの機に乘じ急に本國に歸り、武力を以て政府を倒し、新憲法を制定し、自ら第一執政となつて文・武の實權を握つたので、共和政治の外形だけ存し、その實は帝政と異ならぬ有樣となつた。The First Consul

第二章　ナポレオン一世の偉業

一　オーストリヤ征伐　ナポレオンはイギリスとオーストリヤとの二國が、飽くまでフランスの新憲法を認めないのを怒り、自ら北イタリヤに侵入一八〇してオーストリヤ軍を破り、別軍もドイツでこれに勝つたので、ライン左岸

イギリス・フランスの講和
ナポレオンの内治
ナポレオン一世の即位
第三回對フランス大同盟
ネルソン
トラファルガル沖の海戰

の地を割かせて和を講じた。翌年イギリスとも講和したので、ヨーロッパは一時小康を保つやうになつた。

㈡ナポレオンの内治と即位　ナポレオンは深く意を内治に注ぎ、財政を整へ交通の便を開き、次にローマ舊教を再興し教育を奬め、且有名な法典を編成して、國民の信望を一身に集めた。それ故國民大多數の投票で皇帝（一八〇四）の位に登り、ナポレオン一世と稱へ、翌年イタリヤの王位をも兼ねた。

㈢イギリス侵入の失敗　この時、イギリスはヨーロッパ諸國を誘ひ、第三回（一八〇五）の對フランス大同盟を組織して、フランスに對抗した。そこでナポレオンはイギリスを伐たうと思つたが、フランス・イスパニヤの聯合艦隊がネルソンにトラファルガル（一八〇五）Trafalgar の沖で破られて、海上權が全くイギリスに歸したので、その企は失敗に終つた。

ライン同盟の成立
神聖ローマ帝國の解散
プロシヤ征伐
大陸封鎖令
チルジットの講和

㈣神聖ローマ帝國の解散　そこでナポレオン一世はその兵を東に進め、オーストリヤとロシヤとの聯合軍をアウステルリッツ（一八〇五）Austerlitz で破つて、オーストリヤと講和した。ついで西南ドイツの十六州にライン同盟（一八〇六）Confederation of the Rhine を作らせ、自らその保護者となつたので、皇帝フランシス二世は神聖ローマ帝國の解散を公にし、單にオーストリヤ皇帝フランシス一世と稱へた。

㈤ナポレオン一世の全盛　プロシヤは久しく中立を守つてゐたが、ナポレオンの侵略を憤り、ロシヤと同盟して戰（一八〇六）を宣した。そこでナポレオン一世は長驅してベルリンを占領し、大陸封鎖令（一八〇六、十一月）Continental System を出して、大陸諸國のイギリスと通商することを禁じた。ついで東プロシヤに進み、プロシヤ・ロシヤの聯合軍を破つて、兩國の君主とチルジット Tilsit に會し、別々に和を講じた。

ポルトガルの併合

イスパニヤの征服

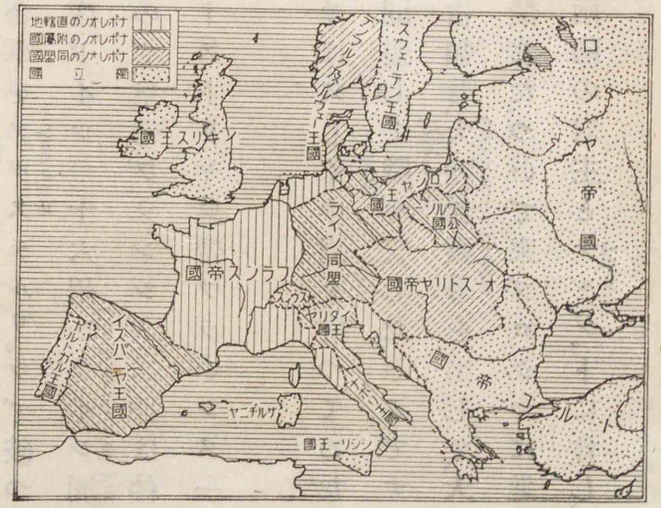
一八一一年のヨーロッパ圖

ナポレオン二世

その後ナポレオン一世はポルトガルが大陸封鎖令を守らないのを責めてその國を奪ひ、イスパニヤの國王父子を幽閉し、その王位を自分の兄に讓らせ、更にオーストリヤ（一八〇九）を伐つてこれに勝ち、同國の皇女マリヤ＝ルイザ（一八一〇 Maria Louisa）を娶つて皇后とし、家門の尊榮を圖つた。これから數年間がナポレオン一世の全盛時代である。

六　ナポレオン一世の衰運

その後ロシヤは大陸封鎖令を破つたので、ナポレオン一世は大擧してその國を侵し、一



（裏面の説明を見よ）

プロシヤ人の軍資獻納

プロシヤ王フレデリック・ウィリヤム三世は、ナポレオン一世がモスコーで大敗したといふ報知に接したので、竊かにベルリンを逃れてブレスラウに赴き、一八一三年二月三日ここから「我が國に訴ふ」といふ壯烈な勅語を全國に宣布して、國民の奮起を促した。そこで愛國的の熱情は欝勃として各地に瀰漫し、義勇奉公の精神は凝結して、各、その本職を拋つて、我先にと軍旗の下に集り、一身を國家に捧げようとするに至つた。そして從軍することの出來ないものは、金銀・財寶は勿論、金銀製の什器類まで、あらん限りを盡し、惜氣もなくこれを獻納し、新婚の妻はその指輪まで、頑是ない兒童は貯金箱を空しくし、婦女はその頭髪を斷ち、農夫は最後の馬までも提供して、奉公の赤誠を披瀝した。本圖はその光景を示したもので、各種各階級の民衆が陸續として來り、祖國の爲に各種の物資を携帶して、これを獻納してゐる有樣が紙面に躍如として顯れ、眞に國民奮起の實際を十二分に發揮したものである。

モスコーの大敗

第四回對フランス大同盟

ライプチヒ戰勝記念碑

ナポレオン一世の退位

ナポレオン一世の再擧

ワーテルローの戰

旦モスコー(Moscow)を占領したが、圖らずも大火に遭つて大いに窮し、その上糧食乏しく、爲に全軍敗退した。列國はこの報に接し、忽ち起つて第四回の對フランス大同盟を作り、大いにナポレオン一世の軍をライプチヒ(Leipzig)で破り、進んでフランスに攻入つて、パリーを陷れた。そこでナポレオン一世は帝位を辭してエルバ(Elba)島に流され、ルイ十六世の弟ルイ十八世がフランスの帝位に登つた。

㊐ナポレオン一世の再擧　ナポレオン一世は竊かにエルバ島を脱して本國に歸り、多數の兵隊を率ゐてパリーに入り、再び皇帝となつた。ところが間もなくイギリスのウェリントン(Wellington)とワーテルロー(Waterloo)で戰

ウェリントン

ウィーン條約の內容

ウィーンに會して、大戰後に於ける國土の分合その他について協議したが、意見が區々で容易にまとまらなかつたが、ナポレオンの再擧によつて互に讓り合つて漸く終結した。即ち(1)フランスはその侵地を返し(2)オーストリヤはネーデルランドを棄ててイタリヤの北部を得、(3)ロシヤはポーランドの大部を取り、(4)プロシヤはサクソニヤの北半を得、そしてドイツの三十五州と四自由市とはドイツ聯邦(German Confederacy)を組織したイギリス(5)はマルタ・ヘリゴランドの兩島と、戰爭中に占領した植民地とを得、(6)スウェーデンはノルウェーを併せ、オランダはネーデルランドを併せ、スウィスは新に三州を加へて聯邦共和國を作り、(7)イスパニヤ・ポルトガルなどの諸國は、各、その舊領を回復した。

一八一四—一八一五 Vienna

ウィーン會議 St. Helena

(六)ウィーン列國會議　曩にイギリス・ロシヤ・プロシヤ・オーストリヤ及びフランスなどの諸國の代表者は、セントヘレナの孤島に流され、ルイ十八世が再び位に復した。

第三章　神聖同盟　アメリカの諸國及びギリシヤの獨立

神聖同盟

メッテルニヒ

(一)神聖同盟　ウィーン會議の後、ロシヤ皇帝アレクサンドル一世はオーストリヤ皇帝及びプロシヤ國王と神聖同盟(Holy Alliance)を組織し、キリスト教の主義に基いて、各國の王侯を視ること兄弟の如く、キリスト教國民を視ること一家族の如く、相親しみ相愛して永久の平和を維持することを唱へた。ヨーロッパの諸國は概ねこれに加盟したが、中でもオーストリヤの首相

イスパニヤ植民地の獨立

メッテルニヒ Metternich はこの同盟を利用し、ドイツ・イスパニヤ・イタリヤなどに起つた自由主義と、民族統一との運動を抑へて、專制政治を行ふ方便にした。

㈡ アメリカ諸國の獨立　アメリカにあつたイスパニヤの植民地は、本國の植民政策に不滿を抱き、ナポレオン時代にすでに獨立の狀を呈してゐたが、ウィーン會議後は終に獨立し、アルジェンチン Argentine・チリ Chili・コロンビヤ Colombia・メキシコ Mexico などの共和國を作つた。

南・北アメリカに於けるイスパニヤ・ポルトガル兩植民地圖

ついでポルトガル領のブラジルも亦獨立した。メッテルニヒはかやうな運動は、神聖同盟の趣旨に背くものであると唱へ、武力でこれを抑へようとしたが、イギリスとアメリカ合衆國大統領モンロー Monroe との反對に遭つて、果すことが出來なかつた。

モンロー

㈢ ギリシヤの獨立　ギリシヤは人種と宗教とを異にしてゐるトルコの束縛を脫しようとして叛旗を飜したが、[一八二]トルコはエジプト太守の援を得て、殆どこれを平げようとした。ところが豫て野心を抱いてゐたロシヤは、神聖同盟の主義に背き、イギリス・フランスの二國と同盟してギリシヤを援けた。そしてその聯合艦隊はトルコの艦隊を[一八二七]ナヴァリノ Navarino ノ灣に破り、トルコをしてギリシヤの獨立を[一八二九]認めさせた。

神聖同盟の破綻

チャールス十世の暴政

第四章　フランスの政變　ナポレオン三世

㈠ 七月革命　フランスでは、ルイ十八世の後に卽位した王弟チャー

七月革命の影響

ルイ=フィリップ

ルス十世は、保守專制政治を行ひ、恣に議會を解散し、且言論や出版の自由をも束縛した。そこでパリーの市民は奮起し、王宮を圍んだので、王はイギリスに避難し、ついで王族ルイ=フィリップ(Louis Philip)が迎へられて、フランス國民の王(King of French People)となつた。これを七月革命(July Revolution)といふ。

㋺ベルギーの獨立　七月革命の影響はベルギー・ポーランド・ドイツ・イタリヤなどの諸國に波及して、各所に自由・獨立の運動を起させた。中でも多年オランダに對して不滿を抱いてゐたベルギー人は、兵をブリュッセル市に擧げ、オランダ軍を擊破して、(一八三〇)獨立を宣言した。列强はやがてロンドンに會してこれを認め、且永世局外中立國たることを保證した。

㋩二月革命とその影響　フランス王ルイ=フィリップは初、善政を施したが、ギゾー(Guizot)を用ひて保守專制政治を行つてから、民心が全く離反し、

第二共和政治の成立

二月革命の影響

ナポレオン三世と皇后

遂に一八四八年二月になつて、パリーに暴動が起つた。そこで王はイギリスに奔り、フランスは再び共和政體となつた。これを二月革命(February Revolution)といふ。ついで新憲法が制定せられ、ナポレオン一世の甥ルイ=ナポレオン(Louis Napoleon)が大統領に選ばれた。

二月革命の報知が傳はると、オーストリヤではウィーンに暴動が起つて、メッテルニヒはイギリスに奔り、皇帝フェルヂナンド一世は位を甥のフランシス=ジョセフ(Francis Joseph)に讓つた。ホンガリヤ・プロシヤ・イタリヤなどでも相前後して革命運動が起つたが、いづれも成功するに至らなかつた。しかし、自由統一の思想は次第に濃厚となつて來たので、一般の民衆は多年の目的がやがて

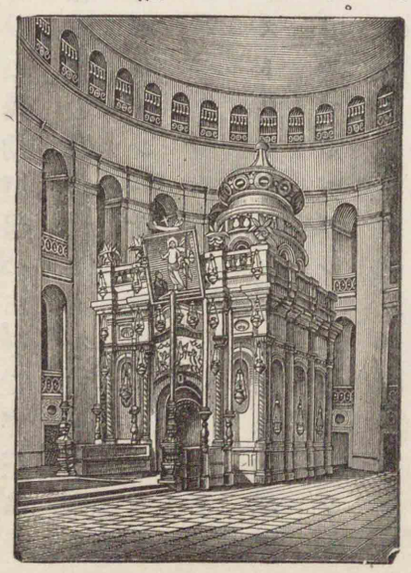
ルイ＝ナポレオンの人心收攬

實現せられるであらうといふ期待をもつやうになつた。

四 ナポレオン三世の卽位　大統領ルイ＝ナポレオンは豫てから帝位を希望してゐたので、就任以來自黨の人物を拔擢し、又人心の收攬に努めた。ついで一八五一兵力で反對黨を抑へ、國民多數の投票により一八五二帝政を再興して皇帝となり、ナポレオン三世と稱へた。

五 クリミヤ戰役 Crimean War 1854–1856　ナポレオン三世は帝政の基を固める爲、人望を得ようとして、イェルサレムに於ける靈地管理權をトルコ皇帝から得た。ところがロシヤ皇帝は大いにこれを憤り、トルコに對して抗議し、且トルコ領内のキリスト教徒の保護權を要求して拒絶せられたので、遂に戰を開いた。そこでナポレオン三世

聖墓の内部



セバストポール要塞の陷落

パリーの和約

はイギリスと同盟してトルコを援け、ロシヤ軍をクリミヤ半島の要塞セバストポール Sebastopol に圍み、更にサルヂニヤの援兵を得て、終にこれを陷れた。そしてパリー一八五六會議に於て和議が成立ち、列國はトルコの獨立と領土の保全とを尊重し、黑海を中立として、ロシヤ南進の計畫を打破した。

第五章　イタリヤの統一

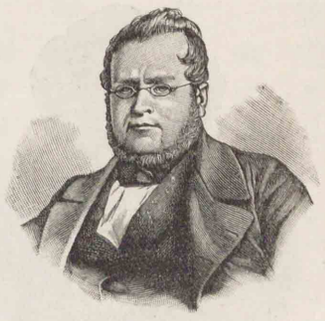
一 イタリヤの國情とサルヂニヤ王の企圖　イタリヤは中古以來、久しく分裂してゐたので、國人は屢〻統一の運動を起したが、成功しなかつた。サルヂニヤ王ヴィクトル＝エマニュエル Victor Emanuel II. 二世はこれを遺憾として統一を企畫し、賢相カヴール Cavour を用ひ、内は政治を勵み、外はクリミ

ヴィクトル＝エマニュエル二世

サルヂニヤ王の統一計畫

[1] 孝明天皇の文久元年

カヴール



ヤ戰爭に出兵してイギリス・フランスの歡心を求め、戰後更にナポレオン三世と約束して戰備を整へ、遂にオーストリヤに宣戰した。この役に、サルヂニヤ王はナポレオン三世の援助を得て大いにオーストリヤ軍を破り（一八五九）、ロンバルヂヤを割讓させて講和した。

中部諸小國の併合

ナポリ王國の併合

ガリバルヂ

イタリヤ王國の建設

二　イタリヤ王國の建設　サルヂニヤ王はカヴールと共に、中部イタリヤの諸小國を併合した後、法王領に入つてその大部を攻略した。そして曩に義勇兵を率ゐ、シシリー島を征伐して北上したガリバルヂ（Garibaldi）の軍と力を協せ、ナポリ（Naples(Napoli)）王國を滅し、ヴェニス（Venice）及び法王領以外のイタリヤ全土を統一した。そこで[1]一八六一年にヴィクトル・エマニュエル二世はイタリヤ國王の位に卽き、つ

統一の大成

イタリヤ統一圖

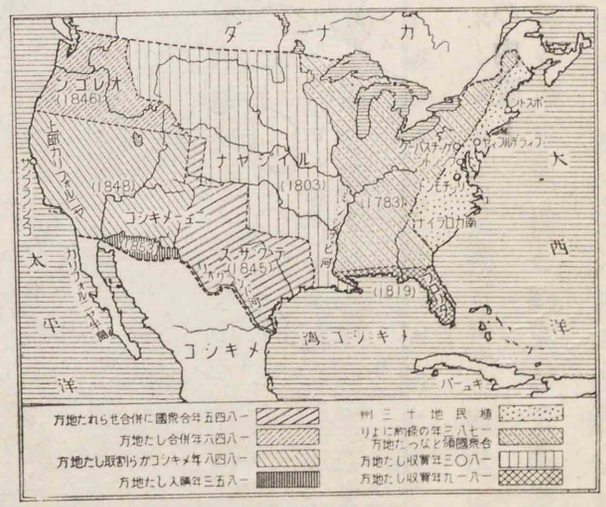
いで國都をフロレンス（Florence）（一八六五）に遷した。

三　統一の大成　その後國王はプロシヤ・オーストリヤ（一八六六）戰役に、プロシヤを援けてオーストリヤからヴェニスを取り、又プロシヤ・フランス戰役（一八七〇）の時に、ローマを占領し、法王領の殆ど全部を併せ、都をこ（一八七一）に遷し、統一を大成した。

第六章　アメリカ合衆國の內亂とメキシコの動亂

合衆國の版圖擴張と南北戰役圖

㊀版圖の膨脹　アメリカ合衆國は建國以來、國勢隆々として發展し、やがてフランスからルイジヤナ(一八〇三 Louisiana)を、イスパニヤからフロリダ(一八一九 Florida)を買收し、更にメキシコと戰つて領地を西方に擴め、遂に太平洋に達するやうになつた。



㊁南北戰役　このやうに領土の膨脹するに隨つて、工業を主とする北部と、農業を主とする南部との間に政治上の主張や、經濟上の利害を異にしてゐたが、更に社會上奴隸の存廢に關して、兩者の意見は遂に衝突した。偶、この時に奴隸廢止論者リンカーン(一八〇九 Lincoln)が大統領に選擧せられたので、終に破裂して南北戰役となつた。

北軍の勝利

リンカーン

初、南軍が優勢であつたが、後にグラント(Grant)將軍が北軍を指揮するやうになつてから形勢は一變し、南軍の主力がリッチモンド(一八六五 Richmond)に降つて、戰爭は終つた。間もなくリンカーンは兇漢に狙擊せられて殪れたが、幸に南北が合一(一八七〇)して、國勢は再び隆盛に向つた。

メキシコの紛擾

㊁メキシコの動亂　メキシコ共和國は多年黨派の軋轢と、財政の窮乏とに苦しめられて、一時(一八六一)外債の償還を中止した。そこでイギリス・フランス及びイスパニヤの三國は各、兵を出してこれに對抗し、遂に外債の支拂を約束させた。ナポレオン三世はこの機會にメキシコを征服し、共和政治を廢して帝政とした。しかし、間もなく合衆國の强硬な抗議に會つて、その兵を撤退したので、帝政は忽ち倒れ、ナポレオン三世の聲望は全く地に墜ちた。

ナポレオン三世の干涉
合衆國の抗議

第七章　ドイツの統一

㊀ウィリヤム一世の即位と軍備の擴張

ドイツはウィーン會議の決議で聯邦を組織したが、プロシヤとオーストリヤとは互に權力を爭つてゐた。そこでプロシヤ國王ウィリヤム一世(William I)はビスマルク(Bismarck)を宰相に、モルトケ(Moltke)を參謀總長に拔擢して、議會の反對をも顧みないで、軍備の擴張を斷行した。

ウィリヤム一世

ビスマルク

㊁プロシヤオーストリヤ戰役(Austro-Prussian War 1866)

プロシヤは豫てオーストリヤを聯邦外に放逐して、ドイツの統一を完成しようと思つてゐたので、曩にデンマルクから奪つたシュレスヴィヒ=ホルスタイン(Schleswig-Holstein)の處分で、オーストリヤと衝突して、

プラーグの講和

モルトケ

北ドイツ聯邦の組織

戰役の諸因

終に宣戰した。

この役、プロシヤはイタリヤの援を得て、オーストリヤ軍を破つてプラーグ(Prague)で講和した。その結果、オーストリヤはドイツ聯邦を退き、シュレスヴィヒ・ホルスタインをプロシヤに、ヴェニスをイタリヤに與へた。

戰後プロシヤは北ドイツの小邦を併せ、又マイン(Main)河北の諸國を以て北ドイツ聯邦(一八六六)を作つて自らその盟主となり、更に南ドイツの四王國とも秘密の同盟を結んだので、國勢が益々隆盛となつた。

㊂プロシヤフランス戰役

フランス[1]はプロシヤの隆盛となつたのを嫉み、ビスマルク[2]はドイツを統一するのには、フランスと戰爭することが必要であると思つてゐたので、兩國の關係は次第に切迫した。偶々[3]イスパニヤ王位繼承問題で兩國の意見が衝突したので、終に戰

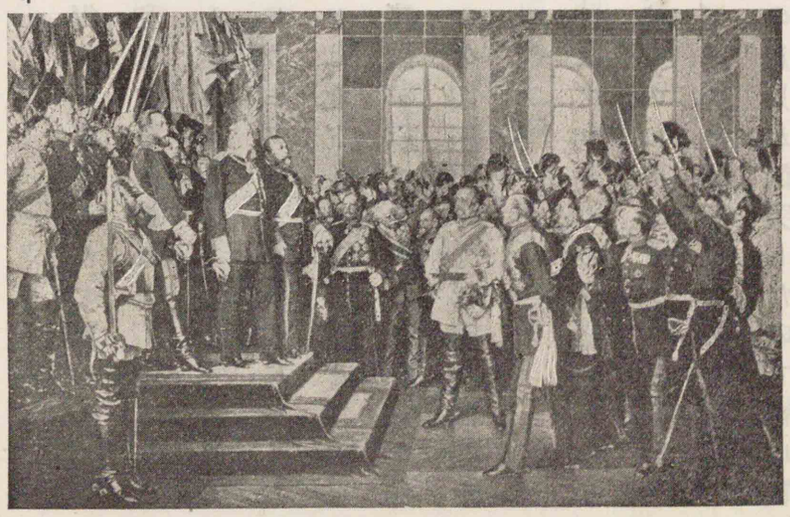
ふやうになつた。

この役、プロシヤの大軍は整備した鐵道で速かにフランス國内に侵入し、ストラスブルグ(Strassburg)・メッツ(Metz)を圍み、更にナポレオン三世をセダン(Sedan)に破つてこれを捕虜にした。フランスは王政を廢して假共和政府を建て、專ら國防に努めたがその効なく、(一八七一年一月)メッツもパリーも共に陷つたので、遂に償金五十億フランを出し、且エルザス(アルサス)(Alsace)とロートリンゲン(ロレン)(Lorraine)とを割いて講和した。

セダンの敗戰

パリーの陷落と講和

ヴェルサイユ宮殿に於けるウィリヤム一世卽位式擧行の光景



四 統一の完成　この戰役中にドイツ統一の議が漸く熟したので、國王ウィリヤム一世は國民多數の希望を容れ、[1]一八七一年大本營であつたヴェルサイユ宮殿で、ドイツ皇帝の位に卽き、ついでベルリンに聯邦會議を開いて聯邦の憲法を制定し、プロシヤ國王はドイツ皇帝の位を世襲することとなり、統一の事業が漸く完成した。

[1] 明治四年この年廢藩置縣

ウィリヤム一世の卽位

新憲法の制定

第八章　ロシヤトルコ戰役

原因

一 ロシヤトルコ戰役 (Turco-Russian War 1877–1878)　クリミヤ戰役後もロシヤのトルコを侵略しようとする考は變らなかつた。ところがトルコ皇帝は專制政治を行ひ、マホメット教を信じてキリスト教徒を迫害し、恣に重稅を課して驕奢を極めたので、バルカン半島の諸民族が相前後して叛き、國運は漸く危くなつた。ロシヤはこの機會に、イギリス・フランス・オーストリヤの諸國と相議した上で、トルコに內政の改革を迫つたが、容れられなかつたので、遂に宣戰した。(一八七七)

オスマン＝パシャ

サン＝ステファノ條約

イギリス・オーストリヤ兩國の抗議

ベルリン條約に基いたバルカン半島圖

ベルリン條約の内容

この役、ロシヤ軍はドナウ河を渡り、勇將オスマン＝パシャ Osman Pasha の死守してゐたプレヴナ Plevna 要塞を陥れ、進んで一八七八 アドリヤノープル Adrianople を占領したので、トルコは大いに驚き、急にロシヤとサン＝ステファノ San Stefano 假條約を結んだ。

㈢ベルリン會議　イギリスとオーストリヤとは、この條約がトルコの獨立を危くするものとして反對し、頻りに戰備を修めるやうになつたので、ビスマルクは相互の間に斡旋し、列國會議をベルリン一八七八に開き、前條約に修正を加へてベルリン條約を締結させた。これによつてトルコは(1)モンテネグロ・セルビヤ及びルーマニヤ Roumania の獨立を認め、(2)ブルガリヤの領地を縮小し、且トルコに朝貢する自治國とし、(3)オーストリヤにボスニヤ・ヘルゼゴヴィナの統治を委任し、(4)ロシヤとイギリスとに多少の土地を與へた。

近世文明の二大特色

自由主義と物質文明

科學の發達とその應用

第九章　近世の文明

㈠近世文明の特色　近世文明の二大特色はフランス大革命以來、ヨーロッパの各方面に普及せられた自由主義 Liberalism の發達と、物質文明の著しい進歩とである。そして自由主義發達の結果として、十九世紀の後半になつて、各國は概ね憲法を作り、國會を設け、富裕な平民は貴族や僧侶に代つて勢力を得るやうになつた。

次に科學の發達は物質文明の進歩を促した。即ち科學が各方面に應用せられ大規模な工場經營となり、その結果、産業革命 Industrial Revolution を促し、都市・村落の面目を新にしたことも亦著しい新現象であつた。しかし、生産

資本家・勞働者の紛爭

の利益を獨占する資本家(Capitalists)と、その命令に從つて使役せられ、極めて悲慘な境遇にあつた勞働者(Laborers)との衝突は漸く烈しくなり、同盟罷工(Strikes)や工場の閉鎖などが屢〻行はれ、これを解決する爲に社會主義が發生し、終に社會の重大問題となつた。

哲學

(二)哲學と文藝　哲學の研究はドイツが最も發達し、殊にカントは從來哲學の二潮流であつた唯理派と、經驗派との學說を綜合して知識そのものの研究を遂げて、近世哲學の開祖と仰がれ、その後ヘーゲル(Hegel)・シ(Schopenhauer)ペンハウエル(以上ドイツ人)・スペンサー(Spencer)(イギリス人)などの大家が出た。次に文學の方面では感情を尊重したロマンチック派の新思想が十九世紀の後半を風靡してゐて、ウォーズウォース(Wordsworth)・バイロン(Byron)(以上イギリス人)・ハイネ(Heine)(ドイツ人)などの詩人を出した。ところが十九世紀の後半となつては自然科學の發達と共に、描寫の

文學

カント

史學

ランケ

精緻を尚ぶ自然主義がこれに代るやうになつた。卽ちトルストイ(Tolstoi)(ロシヤ人)・イブセン(Ibsen)(ノルウェー人)・ゾラ(Zola)(フランス人)・ハウプトマン(Hauptman)(ドイツ人)などは、この派の代表的な文豪であつた。

次にランケ(Ranke)は歷史に科學的研究法を應用して史界を一新し、トライチケ(Treitschke)(ドイツ人)・フリーマン(Freeman)(イギリス人)・ギゾーなどの大家がその後に出た。

終りに美術の方面でも、文學に於けるとほゞ同一の傾向を有し、十九世紀の前半では題材の新奇なものを好み、形や線よりも色彩に重きを置いてゐたが、その後半になつては、自然科學の影響を受けて自然主義的色彩が濃厚となつた。シンケル(Schinkel)(ドイツ人)・ガルニエー(Garnier)(フランス人)は建築の大家で、シャドー(Schadow)(ドイツ人)・ロダン(Rodin)(フランス人)は彫刻、ダヴィード・ミレー(David Millet)(以上フランス人)・ターナー(Turner)(イギリス人)は繪畫の巨擘として、いづれも令名嘖々たるものであつた。

科學

ダーウィン

勢力不滅則

レントゲン

㈣ 科學　自然科學の發達は十八世紀に曙光を放つたが、十九世紀になつて更に長足の進歩をなし、空前の盛況を呈し、天文・數學・物理・化學・醫學・生理學・地理學などに種々な發明が行はれ、又新說が認められた。中でもマイエル(ドイツ人)は勢力不滅則を確立し、一八〇九―一八八二 Darwin ダーウィン(イギリス人)は「種の起源」を公にして生物進化論を大成した。Mayer The Origin of Species

次にデヴアー(イギリス人)は永久瓦斯と信じられてゐた水素・酸素などを液化し得ることを發見し、Dewar レントゲン(ドイツ人)は一八九五 X放散線を發見し、ついでキュリー夫妻は一八九八 ラヂウムを發見し、その研究によつて從來分解することが出來ないと信じてゐた原子が電子から成立つてゐることを確かめた。アインシュタイン(ドイツ人)は一九一五 相對性原理を發見して、引力說の說明に一大變化を促した。Röntgen Curie Radium Atom Electron Einstein Relativity

キュリー夫人

地理的探檢家

アムンゼン

この外醫學・人類學・地理學にも各、知名の大家が出た。中でも地理的探檢熱は近頃漸く盛となり、スヴェーン＝ヘヂン(スウェーデン人)は中央アジヤ・チベット方面に大旅行を企て、Sven Hedin ノルデンシェルド(スウェーデン人)はシベリヤの北岸を迂回し、我が國を經て世界を一周し、Nordenskjöld アムンゼン(ノルウェー人)は南極點に、Amundsen ピアリー(アメリカ人)は北極點に、到達した。Peary

㈤ 科學の應用　十九世紀の文明に最も重大な影響を與へたものは、蒸氣力及び電氣力の應用であつた。卽ちフルトン(アメリカ人)は蒸氣力を船に應用して汽船を造り、一八〇七 ハドソン河上に試運轉を行つて成功し、次にスチヴンソン Fulton Hudson Stephenson

フルトン

始めて太平洋を航海したサヴァンナ號

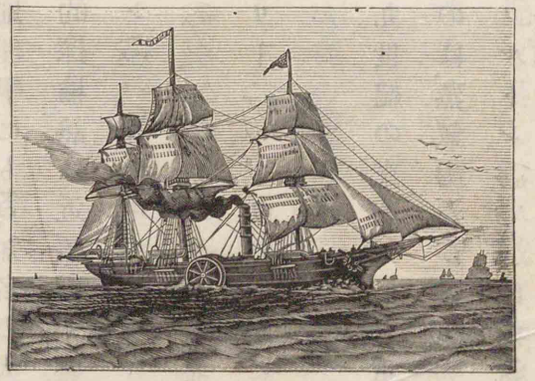
電信機

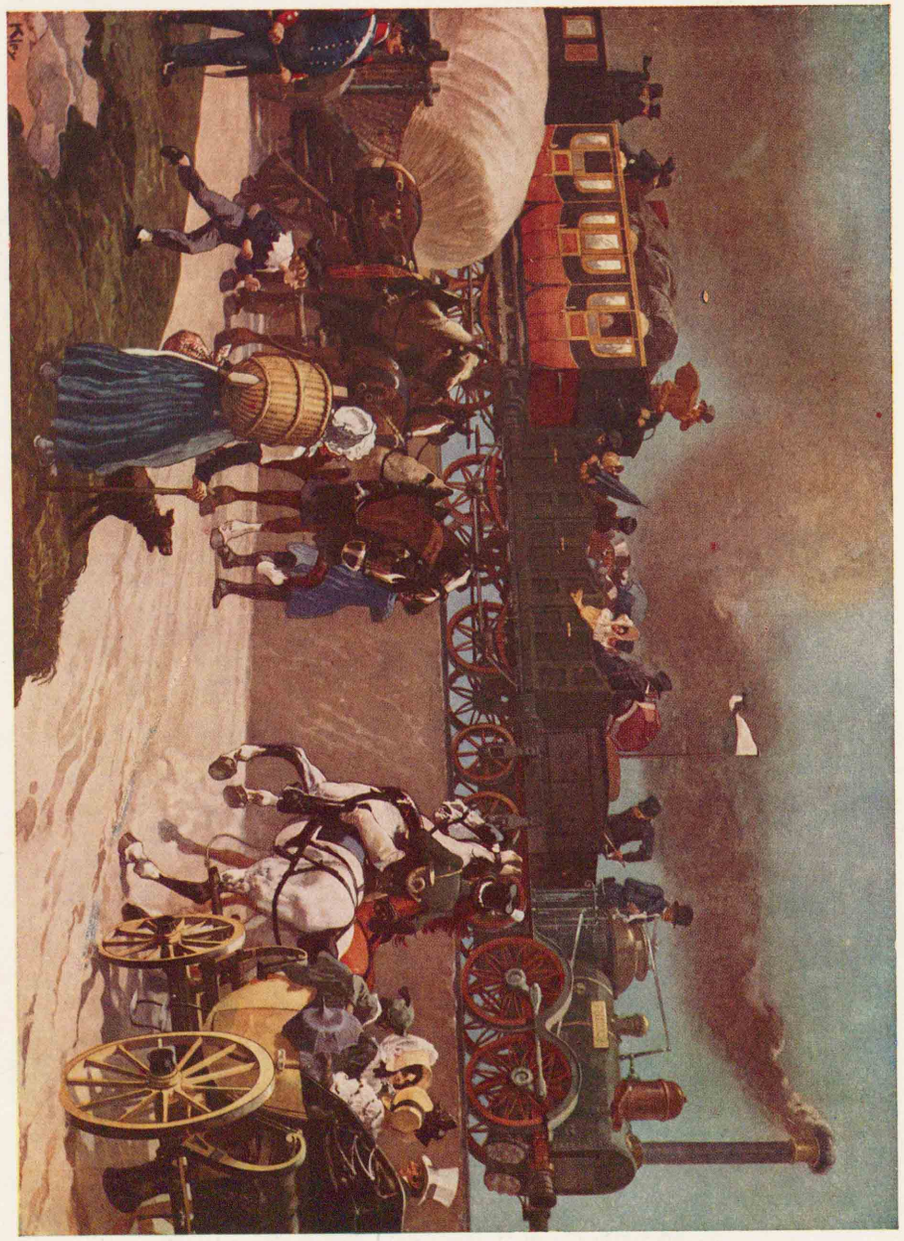
スチヴンソン

（イギリス人）は蒸氣力を機關車に應用して汽車を造り、後、リヴァプールとマンチェスターとの間に鐵道（一八三〇開通）が布設せられて、世界に於ける鐵道工事の先鞭をつけた。

電氣力はモース（アメリカ人）Morse によつて金線（一八三七）に應用せられて電信機となり、その後イギリス・フランス間に海底電信線（一八五一）が沈設せられた。近頃

グラハム・ベル（アメリカ人）Graham Bell（一八六六）は電話機を、エヂソン（アメリカ人）Edison（一八八〇）は蓄音機及び電燈を、マルコニー（イタリヤ人）Marconi は無線電信を發明し、ついで無線電話も亦有効となつたので、最





（裏面の説明を見よ）

蒸汽車の初めて國ツイドを運轉せしら

ドイツ國で運轉せられた最初の汽車

ドイツでは、一八三五年に始めてバヴァリヤ州のニュルンベルヒとフュルトとの間に鐵道が開通し、汽車が運轉せられることとなつた。この圖は當時の實況を寫したものである。當時使用した列車は、乘合旅行馬車の車體を三個連結したやうに構造せられてゐた。そしてこの三室内で旅客は向ひ合せに座席を占め、左右兩方面に窓を作り、その中間に昇降口を設け、荷物は屋根の上に載せ、車掌が毎列車の前方に乘つてゐるところは、全く乘合旅行馬車式である。軌道側の道路を疾走してゐる馬車馬が汽車の音響に驚かされて飛上り、犬は吠え、往來の老婆や兒童が驚異の眼で新式の交通機關を凝視してゐる有樣を思ひ合せると、當時の光景がありありと眼前に浮んで來るやうである。

潛水・航空の兩術

世界大博覽會

世界共通事業

新文明の利器は各地に採用せられ、汽車・汽船と相俟つて世界の交通貿易上に大變動を促した。

二十世紀になつてから、科學の應用は更に各方面に行はれ、潛水・航空の兩術は著しい發達を遂げ、中でも飛行機と飛行船とは、軍用以外に運輸交通の上に盛に使用せられるやうになつた。

㈥ 世界共通平和事業の發達 十九世紀の中頃から交通機關の發達するに隨ひ、種々な世界共通の事業が發達した。卽ち世界大博覽會(International Exhibition)は最初(一八五二)にロンドンに開かれてから、順次世界各國の大都に開催せられてゐる。この外萬國電信聯合(一八七五)(International Telegraph Union)・萬國郵便聯合(一八七八)(International Postal Union)・各種學藝上の會議、萬國平和會議などが相ついで開かれ、各國の國際的の關係は次第に親密となり、各種の事業が國際的に發達するやうになつた。中でも一八六三年ジュネーヴ(Geneva)の規約に基いて、戰時傷病者の救護を目的として創立せられた萬國赤十字社(Red Cross Society)の如きは最も世界的のものである。思ふにこ

のやうな國際的の會合は、向後益〻增加する傾があるから、我が國民は進んでこれに加り、世界的に人生の幸福を增進することに努めなければならない。

婦人の參政權

㊐婦人問題　フランス大革命時代人權の宣言が行はれた際に、婦人も女權の宣言を公にした。爾後世態の變遷するに隨ひ、男女の同權を主唱し、更に進んで教育・職業及び政治上の自由平等を要求するやうになつた。そしてノルウェー・スウェーデンなどの諸國では、遂に參政權を與へた。世界大戰後にはイギリス・ドイツ・ロシヤ・アメリカ合衆國などの諸國も、亦婦人の參政權を認めるやうになつた。

近世史摘要及び年表

近世期は一七八九年のフランス大革命から一八七八年のベルリン會議まで八十九年間をいつたものである。

二四六五	一八〇五	トラファルガルの大海戰	光格	仁宗	露人が蝦夷に寇した。前年モゴル帝國が英の保護に歸した
二四六六	一八〇六	神聖ローマ帝國の解散	光格	仁宗	露人が蝦夷に寇した
二四七二	一八一二	ナポレオン一世のロシヤ遠征	光格	仁宗	露艦が高田屋嘉兵衛を捕へ去つた
二四七三	一八一三	ライプチヒの大戰	光格	仁宗	天理教匪が亂をなした
二四七五	一八一五	ワーテルローの大戰。ウイーン會議の終了	光格	仁宗	杉田玄白が蘭學事始を著した
二四八三	一八二三	合衆國大統領モンローが教書を公にした（モンロー主義）	仁孝	宣宗	獨人シーボルト長崎に來着。英人がバルマを征した
二五二六	一八六六	プロシヤオーストリヤ戰役	孝明	穆宗	翌年大政奉還。前三年朝鮮大院君の執政
二五三〇（明治三年）	一八七〇	プロシヤフランス戰役。イタリヤ王國統一の完成	明治	穆宗	前年東京奠都。翌年ロシヤが伊犂を占領した
二五三一	一八七一	パリー開城。ヴェルサイユ條約の締結。ドイツ統一の完成	明治	穆宗	大使を歐米諸國に派遣した。香港上海間海底電線布設
二五三七（明治十年）	一八七七	ロシヤトルコ戰役。エヂソンが電燈を發明した	明治	德宗	西南の役。イギリス女王が印度女帝となつた
二五三八	一八七八	ベルリン會議	明治	德宗	翌年アフガニスタンがイギリスの保護國となつた

近世史摘要及び年表

近世期は一七八九年のフランス大革命から一八七八年のベルリン會議まで八十九年間を包み、我が光格天皇の御代の初から明治天皇の明治十一年までで、支那清朝高宗の末から德宗の初に及んでゐる。この期の初にフランス國民は專制君主政治を破らうとして大革命を起し、一旦王政を覆した。間もなくナポレオン一世が起つて帝政を創め、次第に四方を攻めて一時全歐を風靡したが、ライプチヒとワーテルローとで大敗を蒙つてから、既往十五年間の苦心は全く水泡となつた。かうして亂後の處分を行ふ爲に開かれたウィーン會議は、革命前の舊態に復することに重きを置き、革命の爲に起つた自由主義や統一の思想を斥けたので、その決定せられた條項は各國民を滿足させることが出來なかつた。そこで國民的統一の熱情は次第に增進して、終に各地に革命的紛擾を演出するやうになつた。ギリシャがトルコから獨立し、ベルギーがネーデルランドから分離し、ポーランドが數次暴動を起して、ロシヤの束縛を脱しようとしたなどは皆その實例である。その他ヴィクトル＝エマニュエル二世がイタリヤを統一し、ウィリヤム一世がドイツ帝國を再興したなども、亦同一の目的から出たものである。この間、イギリスは超然として大陸の紛爭に關係しないで內政を勵み、且世界の各方面に植民して益〻國力を增進した。アメリカ合衆國も亦南北戰爭以後國運の發展を圖り、モンロー主義を變じて帝國主義を採り、ロシヤは數次トルコと戰つて南侵の希望を達しようとしたが、ベルリン會議の結果、當分その計畫を中止し、專ら中央アジヤの經營に從事することとなつた。

次に文藝・科學の進步發展は本期の最も特色とするところで、科學の應用も亦盛に行はれ、空前の盛況を呈するやうになつた。

年代 國史・東洋史との對照

皇紀	西紀	重要事項	日本	支那	重要事項
二四四九（寶龜元年）	一七八九	フランス大革命が起つた。ワシントンが第一回の大統領となつた	光格	清高宗	翌年異學の禁令發布
二四五二	一七九二	フランス共和政體の創始	光格	高宗	露艦が蝦夷に來た。前二年パルマが清に朝貢した
二四五五	一七九五	ポーランドの滅亡（第三回の分割）	光格	高宗	翌年白蓮教匪が亂をなした
二四六四（文化元年）	一八〇四	ナポレオン一世が帝位に卽いた	光格	仁宗	露使が長崎に來つて互市を乞うた
二四六五	一八〇五	トラファルガルの大海戰	光格	仁宗	露人が蝦夷に寇した。前年モゴル帝國が英の保護に歸した
二四六六	一八〇六	神聖ローマ帝國の解散	光格	仁宗	露人が蝦夷に寇した
二四七二	一八一二	ナポレオン一世のロシヤ遠征	光格	仁宗	露艦が高田屋嘉兵衛を捕へ去つた
二四七三	一八一三	ライプチヒの大戰	光格	仁宗	天理教匪が亂をなした
二四七五	一八一五	ワーテルローの大戰。ウイーン會議の終了	光格	仁宗	杉田玄白が蘭學事始を著した
二四八三	一八二三	合衆國大統領モンローが教書を公にした（モンロー主義）	仁孝	宣宗	獨人シーボルト長崎に來着。英人がバルマを征した

年代 國史・東洋史との對照

皇紀	西紀	重要事項	日本	支那	重要事項
二四八九	一八二九	トルコがギリシヤの獨立を承認した	仁孝	宣宗	松平定信が歿した
二四九一	一八三一	ベルギーの獨立が認められた	仁孝	宣宗	大阪川口を浚ひ天保山を築いた
二五一二	一八五二	ナポレオン（帝政）三世の卽位（再興）	孝明	文宗	翌年米の水師提督ペリーが浦賀に來た
二五一四（安政元年）	一八五四	クリミヤ戰役が起つた	孝明	文宗	安政の開國。後四年愛琿條約が調印せられた
二五二一（文久元年）	一八六一	イタリヤ王國の創建。アメリカの南北戰役が起つた	孝明	文宗	前年櫻田の變。前二年サイゴンが占領せられた
二五二六	一八六六	プロシヤオーストリヤ戰役	孝明	穆宗	翌年大政奉還。前三年朝鮮大院君の執政
二五三〇（明治三年）	一八七〇	プロシヤフランス戰役。イタリヤ王國統一の完成	明治	穆宗	前年東京奠都。翌年ロシヤが伊犂を占領した
二五三一	一八七一	パリー開城。ヴェルサイユ條約の締結。ドイツ統一の完成	明治	穆宗	大使を歐米諸國に派遣した。香港上海間海底電線布設
二五三七（明治十年）	一八七七	ロシヤトルコ戰役。エヂソンが電燈を發明した	明治	德宗	西南の役。イギリス女王が印度女帝となつた
二五三八	一八七八	ベルリン會議	明治	德宗	翌年アフガニスタンがイギリスの保護國となつた

第五篇　最近世史

第一章　アフリカ・アジヤ・大洋洲に於ける歐・米諸國の經營

列强の植民政策

㊀列强の世界政策　十九世紀の後半になつて、各國に於ける人口の激增と、商工業の發展に基いた生產物の過剩と、ドイツ・イタリヤなどの諸國の民族的統一の完成と相俟つて、列强は世界政策を採り、盛に世界の各方面に領地や保護國を作り、過剩の人口を移植し、生產品を販賣しようとするやうになつた。

㊁アフリカの分割　アフリカは暗黑大陸(Dark Continent)として、久しく世人から顧みられなかつたが、かのリヴィングストン(Livingston)やスタンリー(Stanley)などのナイル河の上流地方の探檢によつて、その實狀が發表せられてから、列國

イギリスの運河株券買収

レセップス

アラビーパシャの亂

は爭つてこれが分奪を企てたので、エジプトやアビシニヤ(Abyssinia)などを除いた地方は、大概ヨーロッパ列國の植民地又は保護領となつた。

㊂ イギリスのエジプト及び南アフリカの經營　イギリスはエジプトの財政困難を極めてゐた時、エジプト太守のもつてゐたスエズ(Suez)運河の株券を一手に買收し、財政の顧問となつた。ついで獨力でアラビ=パシャ(Arabi Pasha)の内亂を鎭め、軍隊を駐屯させて、事實上エシプトをその保護國とした。

曩にイギリス人がアフリカの南端にあるケープ地方に移住したので、その地方のブール人(Boers)(オランダ人の子孫)は北方の内地に入つて、トランスヴァール(Transvaal)とオレンジ(Orange)との兩共和國を建てた。ところがこの地方に金と金剛石とが多量に採取せられるやうになつてからイギリス人の移住するものが俄かに增した。イギリス政府はこれ等移住民の爲に參

トランスヴァール戰爭

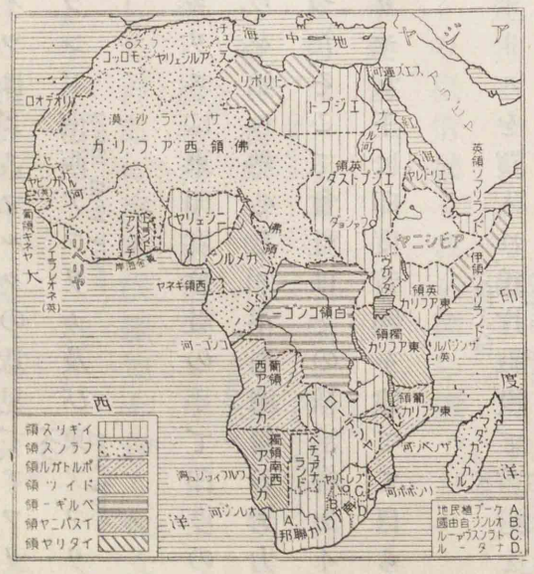
アフリカ分割圖

モロッコ保護權の獲得

政權を要求して拒絶せられたので、終に宣戰(一八九九—一九〇二)してこれを征服した。その後イギリスはこれ等兩國とナタル(Natal)・ケープ兩植民地とを併せて、南アフリカ聯邦(Union of South Africa)(一九一〇)を作り、總督を任命してこれを統治させた。

㊃ フランスのアフリカ經營　フランスは自國の對岸にあるアルジェリヤ(Algeria)(一八四〇)を占領し、その隣邦チュニス(Tunis)(一八八一)を保護國とし、ついでサハラ(Sahara)とその南方一帶の地方とを攻略し、更にマダガスカル島(Madagascar)を占領して純然たる屬領とした。

ついでフランスはモロッコ(Morocco)問題(一九一一)でドイツと衝突したが、フランス領コンゴー(Congo)の一部をドイツに割いて、モロッコを保護國とした。



イギリスの印度併有

イギリスの南亞及び東亞に於ける活動

㊄ドイツのアフリカ經營　ドイツはビスマルクの意見で、アフリカの經營に着手し、一八八四カメルン・トゴランド Kamerun Togoland・南西アフリカ South West Africa 及び一八八五東アフリカ East Africa の植民地を得た。

㊅イギリスのアジヤ經營　イギリスは東印度會社の手で印度の經營に着手したが、幸にもクライヴ Clive を始め、熱心な知事や總督の努力で、その大半を領有するやうになつた。そこで會社はその統治權をイギリス政府に移したので、一八七七ヴィクトリヤ女王は印度帝國を建てて自ら帝位に卽いた。

これより先イギリスは一八二四シンガポール Singapore を買入れ、一八四〇―一八四二鴉片戰役 Opium War で一八四二香港 Hong-kong を取り、更に一八六〇北京條約で香港の對岸にある九龍 Kowloon を得た。これからベルチスタン Baluchistan を一八七六保護國とし、一八八五バルマ Barma を併せ、更に日清戰役の後の清國から威一八九八海衞を租借した。

㊆ロシヤのアジヤ經營　ロシヤはムラヴィヨフ Muravief の努力で、東部シベリヤの方面に拓殖の歩を進め、清國から一八五八黑龍 Amur 江以北の地と、一八六〇ウスリ Usuri 江以東の地とを取つて、一八七二ウラヂヴォストックに海軍の根據地を設けた。日清戰役の後には我が國に干涉して、遼東半島を支那に還付させ、やがてその一部なる關東州を租借したが、一九〇五日露戰役の後に、その租借權を我が國に讓つた。

ムラヴィヨフ

ムラヴィヨフの極東經營

㊇フランス・ドイツ兩國のアジヤ經營　フランスはナポレオン三世時代から印度支那の經營に努め、初にサイゴン Saigon を陷れ、一八五九交趾支那 Cochin-China を取り、一八六七カンボヂヤ Cambodja を保護國とした。その後共和政治時代に東京 Tongking を得、安南を保護國とし、日清戰役の後には遂に一八九九廣州灣を租借するやうになつた。次にドイツも亦一八九八膠州灣を租借して、青島に海軍根據地を作り、偉大な勢力を支那の各方面に扶植しようとした。

フランスの印度支那經營

ドイツの膠州灣租借

㊈大洋洲の分割　大洋洲に屬する諸島の中で最大なのはオース*

*歐大陸全面積の約四分の三を有する。

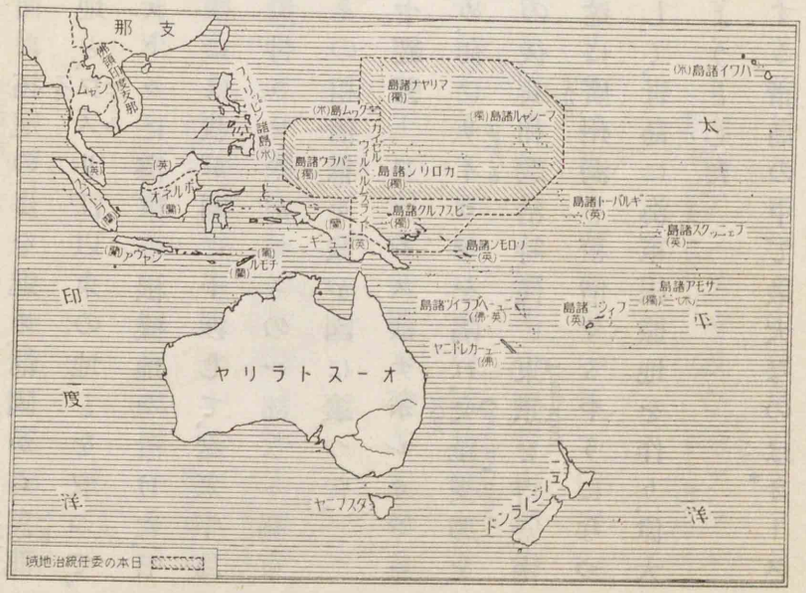
大洋洲諸島の分割

イギリスの所領

大洋洲分割圖

ドイツの所領

トラリヤで、十九世紀の初からイギリス人がこれを開拓したが、天産物が豐富なので、移住民が激增した。そして後には一九〇〇オーストラリヤ聯邦(The Commonwealth of Australia)を組織して自治制を採用した。この外イギリスはニュージーランド(New Zealand)及びフィジー(Fiji)の全島ニューギニー(New Guinea)及びボルネオ(Borneo)兩島の一部を領有した。ドイツはカイゼル=ウィルヘルムスランド(Kaiser-Wilhelmsland)・ビスマルク(Bismarck)諸島・マーシャル(Marshall)諸島を領し、マリヤナ(Mariana)・カロリン(Caroline)・パラウ(Palau)の三諸島をイスパニヤから購ひ、なほサモア諸島の



フランス・オランダの所領

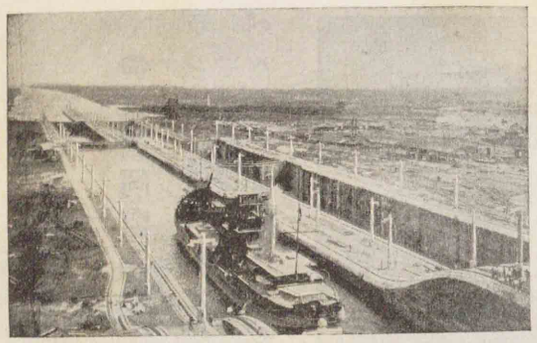
アメリカ合衆國の帝國主義

パナマ運河

パナマ運河の開鑿と極東方面進出の企

一部を取つた。フランスはニューカレドニヤ(New Caledonia)の一部を、オランダはニューギニー及びボルネオ島の一部を領した。

◎アメリカ合衆國の活動　アメリカ合衆國は多年モンロー主義を唱へて來たが、國力の增進するに隨ひ、次第にその主義を變じて帝國主義を採るやうになつた。卽ちイスパニヤ領キューバ(Cuba)及びフィリッピン諸島が一八九八叛旗を飜したのを援けてイスパニヤ軍を破り、キューバ島を保護國とし、更にポルトリコ(Porto Rico)を得、フィリッピン諸島を購入した。合衆國は又一八九八ハワイ(Hawaii)の革命に干渉してこれを併せ、更に一九〇〇サモア諸島の一部を占領し、近頃パナマ(Panama)運河を開いて大西・太平兩洋の連絡を圖り、優勢な海軍力を以て太平洋を威壓しようとしてゐる。



第二章　十九世紀末に於けるヨーロッパの情勢

三國同盟

ヴィクトリヤ女王

二國同盟

ヴィクトリヤ女王時代の隆盛

㊀三國同盟及び二國同盟　ドイツはプロシヤフランス戰役後フランスに備へる爲、オーストリヤ・ロシヤと三帝同盟（一八七三）を結んでゐたが、ベルリン會議後、ロシヤの代りにイタリヤを招いて一八八二年オーストリヤ・イタリヤとの間に三國同盟（Triple Alliance）を結んだ。そこで多年孤立の地位にあつたフランスは、一八九一年ロシヤと二國同盟（Dual Alliance）を結んで、ドイツに對抗するやうになつた。

㊁イギリスの情勢　ヴィクトリヤ（Victoria）女王時代には保守黨のディスレーリ（Disraeli）・ソールスベリー（Salisbury）や自由黨のグラッドストン（Gradstone）などの大政治家が代る代る政黨内閣を組織して選擧法を改正し、アイルランド問題を處理し、又海外發展にも成功し、且強大な海軍を作

十九世紀後半に於けるフランス婦人の服裝（一八六八年頃）

（マックス＝フォン＝ボエーン著十九世紀フランス文明史所載）

名譽の孤立

統一大成後の經營

ウィリヤム二世の抱負

チエールチエールの盡瘁

つた。そこで國運は隆盛になり、獨力で三國・二國兩同盟に對抗することが出來るやうになつた。

㊂ドイツの情勢　ドイツ帝國建設後、宰相ビスマルクは戰後の經營に努め、一方には社會黨を抑へ、他方には社會を改良し、勞働者を保護することに腐心した。ついで農・工・商業を奬め、且アフリカ及び大洋洲に植民地を作つて國力を增進した。帝の後を承けたフレデリック三世(Frederick III.)の歿後にウィリヤム二世(一八八八 William II.)が卽位した。帝は早くからドイツを世界的の大國家とする抱負を有し、海・陸軍の大擴張を斷行し、勤勉な國民性を利用して殖產工業の發展を圖つたので、國力は充實し、富强は他の諸國を凌ぐやうになつた。

㊃フランスの情勢　フランスはプロシヤフランス戰役後、チエール(Thiers)を始め、歷代大統領の盡力で徐々に國力を回復した。これより先共和政(一八七三)

體が確立してから産業發達し、軍備が充實することとなつた。

㊄ロシヤの情勢　アレクサンドル二世(Alexander II.)はロシヤトルコ戰役に勝つてベルリン會議で敗れ、晩年專制政治を行つて民心を失つた。その後アレクサンドル三世を經てニコラス二世(Nicholas II.)が帝位に卽いて熱心に政治を勵み、藏相ウィッテ(Witte)を用ひて財政を整理させた。帝は又極東の經營にも努めたが、我が國と交戰して大敗を招いてから、國民はその政治に對して不平を抱くやうになつた。

アレクサンドル二世

第三章　イタリヤトルコ及びバルカン兩戰役

㊀ブルガリヤの獨立とオーストリヤの活動　トルコでは青年トルコ黨(Young Turky)が革命を起して立憲政治を行ひ、後、皇帝を廢立したブルガリヤはこの機會に獨立を宣言し、ついでオーストリヤも豫て統治を委任せられてゐたヘルツェゴヴィナ(Herzegovina)・ボスニヤ(Bosnia)二州の併合を公にしたが、トルコは微力であつたから、空しく恨を呑んでこれを認めた。

オーストリヤの二州併合

㊁イタリヤトルコ戰役(Italo-Turkish War 1911-1912)　イタリヤはチュニスをフランスに取られてから、トリポリ(Tripoli)の經營に努めてゐたが、トルコの國力が回復しない間に、これを領有することが得策であると考へ、トリポリの讓渡を要求した。トルコはこれを拒絶したが、戰爭に敗れたので終に屈し、その地をイタリヤに與へて講和した。

原因

トリポリの割讓

㊂バルカン戰役(Balkan War 1912-1913)　トルコでは新帝マホメット五世が卽位したが、積弊は少しも改められなかつたので、暴動が所々に起つた。ブルガリヤ・セルビヤ・ギリシヤ・モンテネグロ(Montenegro)の四國はこの機に乘じ、聯合してトルコと

マホメット五世

戰ひ、大いにこれを破つた。ところが四國はトルコから得た土地の分配に關して衝突し、ブルガリヤは終に他の三國及びトルコ・ルーマニヤ（Rumania）と戰を交へた。しかし、ブルガリヤは連戰連敗の末、一九一三ブカレスト（Bukharest）條約を結んで講和した。その結果、トルコはヨーロッパに於ける所領の大半を失ひ、その他の五國は各その一部を分取した。

バルカン戰役以後に於けるバルカン半島略圖

ブカレスト條約

第四章　世界大戰役の勃發

一　ヨーロッパ列强間に於ける國際關係の變動

三國同盟と二國同盟とは、共にヨーロッパの平和を保つべき防禦同盟であつたが、ドイツ

の國運が非常に發展した爲に、却つてヨーロッパの均勢を破らうとするやうになつた。そこでイギリスは光榮ある孤立の主義を棄てて、遠くは我が國と日英同盟（一九〇二）を結び、近くはフランス・ロシヤと三國協商（一九〇七）を約して、ドイツに對抗した。そしてロシヤとドイツとの兩國は、バルカン半島内に住居してゐる自國民族を支配して、他を斥けようとしたので屢〻衝突した。

イギリスとドイツとの對抗

エドワード七世とその銅像　ロンドン、ウォータールー廣場にある、一九二一年七月除幕式擧行。

二　大戰役の原因と列强の參戰

かやうにイギリスとドイツの對抗と、バルカン半島に於けるロシヤとドイツとの勢力爭と、一八七〇

オーストリヤ皇儲フランシス＝フェルヂナンド大公

近因

オーストリヤの宣戰

列國の參戰

オーストリヤ皇帝フランシス＝ジョセフ

一九一四皇儲夫妻をボスニヤの首府で暗殺したことが近因となつて、兩國の間に戰爭が勃發した。そこでロシヤとフランスとの兩國はセルビヤを援け、ドイツはオーストリヤに味方して、共に宣戰した。ついでイギリスはドイツの大軍がベルギーの中立を破つて侵入したことを非難してロシヤ・フランス側に與し、我が國は東亞の平和と日英同盟の誼とを重んじてドイツに宣戰し、一九一五イタリヤ・一九一六ルーマニヤ・一九一七アメリカ合衆國などは聯合側に年來ドイツとフランスとの間に結ばれて解けなかつた不和反目の念とは、本役の三遠因であつた。そして豫てオーストリヤがボスニヤとヘルツェゴヴィナとを併せたことを憤つてゐたセルビヤ種の一青年が、オーストリヤの

參加し、一九一四トルコ・一九一五ブルガリヤなどはドイツ・オーストリヤ側に味方して、ここに未曾有の大戰役を見るやうになつた。

第五章　世界大戰の經過（その一）

一　東西兩方面の戰況

ドイツは優勢な大軍でまづフランス軍を破り、それから東方に轉じてロシヤ軍を粉碎する豫定であつたから、その主力軍はベルギーの中立を侵してフランスに入り、一時パリーを脅かした。ジョッフル將軍は機を見て攻勢に轉じ、こ一九一四、九月Joffreれをマルヌ河Marne畔に破つた。そこでドイツの名將ヒンデンブルグHindenburgは從來の方針を變じ、ドイツ・オーストリヤの軍を以てポーランドに入り、首府ワルソーWarsawを陷れて東進した。

マルヌの會戰

ヒンデンブルグ元帥

セルビヤ全土の征服

ルーマニヤの大敗

ドイツ海軍の窮狀

㈡バルカン方面の戰況　トルコはドイツに味方してロシヤに宣戰したので、イギリス・フランスの聯合艦隊はダーダネルス海峽(Dardanelles)からトルコを攻撃したが、空しく失敗した。そしてドイツ・オーストリヤの大軍は新に參加したブルガリヤ兵と策應して、北・東の兩方面からセルビヤを夾み擊つて、その全土(一九一五、十一月)を攻取つた。

その後形勢を觀てゐたルーマニヤがオーストリヤに宣戰したので、ドイツ・オーストリヤの大軍はトルコ・ブルガリヤ軍と力を協せて、西と南とから進擊して首府ブカレスト(一九一六、十二月)を陷れて、國土の大半を占領した。そこでイギリスとフランスとの聯合軍は僅かにサロニキ(Saloniki)を守備する有樣となつた。

㈢ドイツ海外植民地の喪失　イギリス・フランス側の諸國は、優勢な海軍力でドイツの海運事業に大打擊を與へ、且その軍艦を軍港内に壓迫した。そこでドイツの海外植民地は全く孤立となり、そのアフリカにあるものは、主としてイギリス植民地の兵に、太平洋にあるものは我が國及びイギリスの爲に占領せられた。又我が國は更に膠州灣を攻取つて、極東に於けるドイツの勢力を滅した。

日本の膠州灣占領

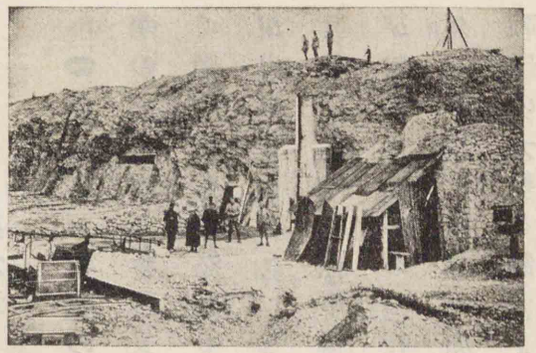
第六章　世界大戰の經過(その二)

㈠ヴェルダン要塞の攻擊　前に述べたやうに、大戰役の戰線は東・西・南の三方面で愈〻延長し、殊に西部戰線の如きは、彼・此共に塹壕を築いて相對抗し、純然たる要塞戰と化したので、容易に勝敗を決することが出來ないやうになつた。イギリスはこの期間を利用して、兵士の徵發及びその訓練・軍器・軍需品の製造などに全力を集中して、その成績が頗る良好であつたので、ドイツのウィリヤム二世は前途を憂ひ、ヴェルダン(Verdun)(一九一六、二月―八月)要塞に强襲を加へ、戰線の一角を突破してパリーに進出を試み、戰局の大勢を制しようとした。それ故その攻擊は猛烈を極め、屍山血

ヴェルダン要塞攻擊の由來

フランス軍の反擊奏功

ヴェルダン要塞ヴォー砲壘の現狀



無制限潛水艇戰爭の開始

アメリカ合衆國の宣戰

河の慘狀を呈したが、要塞司令官ペタン Petain の沈勇と、將卒の奮戰とによつて、その計畫が挫かれた。

㊁ドイツ潛水艇の活動　ドイツは交戰二年に亙つてなほ勝敗を決することが出來ないのを遺憾とし、一方には飛行機・飛行船を飛ばして聯合側の市街に爆彈を投下し、他方には潛水艇を用ひて聯合側の軍艦や商船を擊沈した。殊に一九一七年二月以後は、無制限潛水艇戰爭を開始し、人道を無視して海上に暴威を逞しくした。アメリカ合衆國は久しく中立を守つてゐたが、ドイツ人の海・陸兩方面に於ける兇暴な行動を惡み、正義・人道の爲に宣戰した。その後中米や南米の諸國を始め、支那・暹羅（シヤム）なども相前後して、ドイツに宣戰したので、戰局は一變した。

レニン

ロマノフ朝の滅亡

ブレスト=リトウスク條約の締結

㊂ロシヤの革命と單獨講和　ロシヤは農業國で、殖產・工業がまだ發達してゐなかつたから、軍器・軍需品が缺乏し、又精銳な將校を補充する途もなくなつた。その上作戰の秘密が密偵の爲にドイツに洩れて大敗を重ねたので、戰爭の中止を切實に希望するやうになつた。多年專制政治の積弊を憤つてゐた勞働者や農民は、この機會に兵隊と力を協せて終に革命を起し、ニコラス二世を廢してロマノフ Romanov 朝を倒した。ついでレニン・トロッキー Trotsky などの過激共產黨派が、ソヴェート政府を建てて政權を握るに及び、ドイツとブレスト=リトウスク Brest-Litovsk に單獨講和を結んで、聯合側を脫退した。

第七章　世界大戰の終局

イタリヤ軍の進撃

㈠イタリヤ方面の戰況　イタリヤは聯合側に參加してから、オーストリヤ軍と戰つて敗北した。ロシヤ革命の後、オーストリヤ軍は再び攻撃（一九一七）を始め、一旦イタリヤの東北部を占領した。ところがイタリヤ軍は猛烈な逆撃と追撃とをこれに加へて、その軍を北イタリヤ以外に驅逐し、終に休戰條約を結ばせた。

㈡西方に於ける聯合軍の大攻撃　ドイツは多年の戰爭で兵員の不足、物資の缺乏と、士氣の沈衰、人心の動搖とを感じたので、東方から廻送した兵力を合せ、西方戰場で最後の大攻撃を決行した。その時フォッシュ元帥は聯合軍の總司令官となつて、巧に全軍を指揮統帥して奮戰したので、さすがのドイツ軍も遂に總崩れ（一九一八）となつて潰敗した。

ドイツ軍の潰敗

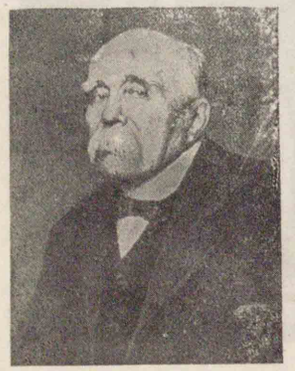
フォッシュ元帥

㈢ドイツ・オーストリヤ兩國の革命　ドイツ軍の潰敗は各方面に多大な影響を與へ、ブルガリヤとトルコとの兩國はまづ休戰を約し、セルビヤはその國土を回復し、ついでドイツ・オーストリヤ兩國内には君主政治を廢して革命を斷行し、平和を回復しようとする運動が起つたので、兩國の皇帝は相ついで帝位を去り、兩國はいづれも民主的の共和國を建て、ホンガリヤも亦オーストリヤから分離獨立した。

ウィリヤム二世と皇后

講和會議議長クレマンソー

㈣休戰と講和の成立　ドイツの新政府は内外の形勢の極めて危險に瀕したのを觀て、聯合側の提出した休戰條約（一九一七、十一月）を認めた。やがてイギリス・フランス・イタリヤ・アメリカ合衆國及び日本の五大國以



平和調印の光景

下大戦に關係した諸國は、パリーで（一九一九・四月）ドイツに對する講和條約を協定し、ついてヴェルサイユ（一九一九・六月）でドイツをしてこれに調印させた。そして（一九一九）オーストリヤ（サンジェルマン條約）・ブルガリヤ（ヌイイ條約）（一九一九）・トルコ（セーヴル條約）（一九二〇）三國に對する講和條約も亦相次いで調印せられたので、かくして四年半に亙つた世界大戦役の結末が漸くついた。

第八章　大戦後の世界

一　世界の改造と新興國　大戦後の世界は敗戦國が著しくその領土を縮小したことと、同一民族が結合して獨立した國家を作つたこ

ドイツ
オーストリヤ
イタリヤ
トルコ
新興の七國

とで、從來よりも非常に變化した。

ドイツはエルザス（アルサス）＝ロートリンゲン（ローレン）をフランスに、西プロシヤ以下二三の地方をポーランドに割讓し、ベルギーとデンマルクとにも各若干の土地を與へ、海外にあつた領土と租借地との全部を放棄した。陸・海軍はその兵數を制限せられ、巨額の償金を支辨することとなつた。

オーストリヤは僅かに舊領の三分の一を領有する小共和國となり、ホンガリヤは分離獨立し、その他の地方は新興の諸國に分割せられた。イタリヤは多年希望してゐたトレンチノ・トリエスト以下の地を回復し、トルコは僅かにコンスタンチノープル附近の小地と、小アジヤ半島とを領して、その他の土地を失つた。

次に民族自決主義に基いて、新にポーランド（舊ロシヤ・ドイツ・オーストリヤ領の一部を含む）・チエコスロヴァキヤ（舊オーストリヤ＝ホンガリヤの一部を含む）・ユーゴースラヴィヤ（或はセルヴィヤ・クロアチヤ・スロヴェニヤ）

ン王國とも稱する、舊モルビヤ及びモンテネグロの全土並びに舊オーストリヤ領の一部を含む）・フィンランド（舊ロシヤ領）エストニヤ（舊ロシヤ領）・ラトヴィヤ（舊ロシヤ領）・リトワニヤ（舊ロシヤ領）などの諸國が創立せられた。しかし、これ等の諸國は一二を除く外は、いづれも實力に乏しいから、國基を確立することは頗る困難である。

Estonia　Latvia　Lithuania

イギリスの委任統治地方

イギリスはエジプトを保護國とし、舊アジヤ＝トルコ領のパレスチナ・メソポタミヤ・アフリカにあつたドイツ領東アフリカの大部分（ケニヤ植民地）・カメルン及びトゴランドの一部を委任統治し、南アフリカ聯邦はドイツ領南西アフリカを、オーストラリヤ聯邦はドイツ領ニューギニー及び赤道以南の太平洋上に於けるドイツ領の諸島（サモア島を除く）を委任統治し、フランスはシリヤ及びドイツ領カメルン・トゴランドの大部を委任統治することとなつた。

フランスの委任統治地方

我が國の委任統治と膠州灣租借權の獲得

我が國は赤道以北の太平洋上にあるドイツ領の諸島を委任統治し、且ドイツが山東半島に於て有してゐた膠州灣の租借權及び鐵道・

鑛山・海底電線などに對する一切の特權を得た。

㈡國際聯盟とその効果　國際聯盟はパリー講和會議で合衆國大統領ウィルソンの主唱に基いて成立し（一九二〇、一月）、國際間の協力によつて戰爭を避け、世界の平和を維持することを目的としてゐる。そして五十五國はこれに加入してゐるが、アメリカ合衆國・ロシヤなどの數國がまだ加盟しないから、その効力も亦十分ではない。

League of Nations　Wilson

ムソリニ

㈢イタリヤとムソリニ　イタリヤは講和成立後、恣にアドリヤチック海岸のフィウメを占領したので、ユーゴースラヴィヤと紛擾を釀したが、結局兩國（一九二四）の協定で、イタリヤがこれを併せることとなつた。

Fiume

イタリヤとムソリニ

その後ファシスト黨の領袖ムソリニが首相（一九二二）となり、國王ヴィクトル＝エマニュエル三世を輔けて共產主義を撲滅し、議會政治に反對して獨裁

Fascists　Mussolini

政治を斷行し、且各方面に互つて整理刷新を行ひ、熱誠に國力の回復を圖つてゐるので、その効果は大いに見るべきものがある。

トルコでは國民黨の領袖ケマル＝パシャ（Kemal Pasha）が奮起してアンゴラ（Angora）に據り、飽くまでセーヴル條約を否認してギリシヤ軍を小アジヤから驅逐（一九二二）した。やがてトルコは關係諸國とローザンヌ（Lausanne）條約を結んで舊領の一部を回復した。その後國民は帝政を廢して共和政體となし、ケマル＝パシャを大統領に選擧して回教教主を廢し、熱心に政治の改善と、國力の充實とに努めるやうになつた。

ケマル＝パシャ

共和政體の成立

㊃ドイツの賠償問題とロカルノ條約　フランス・ベルギー兩國はドイツが賠償金（約我が六百六十億圓）を支拂はないのを怒つて、ドイツ工業の中心地であるルール地方（Rhur）を軍事的に占領（一九二三）した。イギリスとアメリカ合

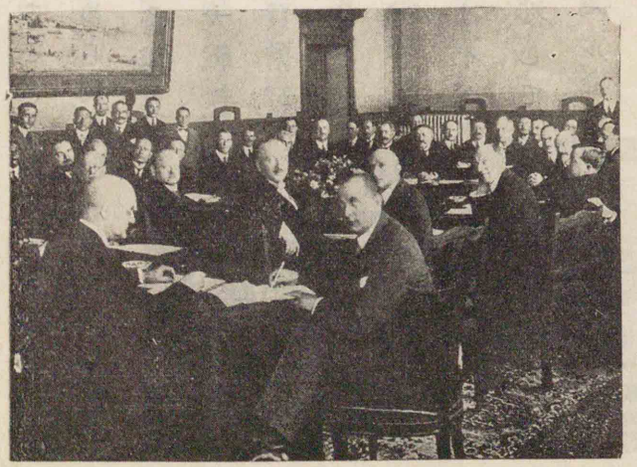
ルール問題

衆國とはこれを遺憾とし、フランス・イタリヤ・ベルギーなどの諸國と協議して、賠償金支拂法を作成し、ドイツをしてこれを採用せしめた（一九二五）。そこでフランス・ベルギーの聯合軍はルール地方を撤退して、これをドイツに還付したので、ヨーロッパの經濟界は漸く活氣を呈するやうになつた。

その後イギリス・フランス・ベルギー・イタリヤ・ドイツ・ポーランドなどの諸國はロカルノ（スウィス國にある）（Locarno）で會議を開いて、互に國境の安全を保障し、一切の紛爭を仲裁裁判に附して、これを平和的に解決することを約束した。これによつてフランスとベルギーの兩國は、ドイツからその國境を侵略せられる

ロカルノ會議

ロカルノ會議の開催及びその結果

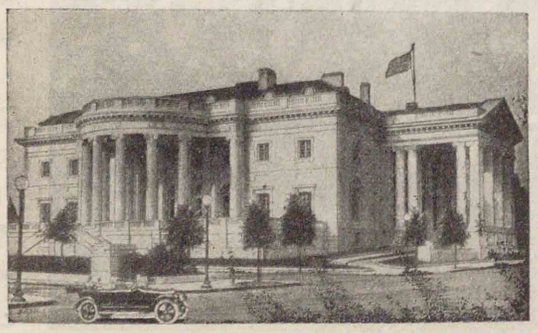


合衆國大統領ハーヂング

ワシントン會議の會場

であらうといふ不安の念を一掃することが出來た。そしてドイツ國も亦列國の承認を得て、正式に國際聯盟(一九二六)に加入し、相携へてヨーロッパの復舊に努力することとなつたので、平和の曙光が始めて認められるやうになつた。

㊄ワシントン會議と軍備縮小問題　大戰後、各國共に國民の負擔が重くなつたので、これを輕減する爲に、軍備を縮小しようとする輿論が漸く高まつて來た。そこでアメリカ合衆國の大統領ハーヂング(Harding)はイギリス・フランス・イタリヤ及び我が國と交渉して、軍備制限會議をワシントン(一九二一、十一月)に開き、更にベルギー・オランダ・ポルトガル及び支那の四國をも加



海軍縮小協定

太平洋問題に關する四國協約

イギリス王ジョージ五世と皇后

對支協定

へて、太平洋及び極東問題などを協議した。その結果、イギリス・フランス・イタリヤ・アメリカ合衆國及び我が國は十個年間主力艦建造の標準比率を定め、その餘を廢棄することを約束した。しかし、陸軍兵力の制限については異論を挾むものがあつて、遂に協定を見るに至らなかつた。次にイギリス・フランス・アメリカ合衆國及び我が國は十年間四國協約を結んで、太平洋上の平和と現狀維持とを確保し、且太平洋上の島嶼である屬地及び領地に關する各自の權利を保持することを約束し、同時に、日英同盟(一九一〇)の廢棄を公にした。そして支那に對しては、前記九國の間に條約を結んで、支那の主權・獨立並びに領土の保全を尊重することを約した。

合衆國の發展

㈥ 太平洋上に於ける日本と合衆國との關係　アメリカ合衆國は土地が非常に廣くて、天然の資源が極めて豐富である。その上國民は活潑進取の氣象に富み、常に世界第一を標榜して邁進してゐる。その物質文明は殆ど頂點に達し、商・工業が繁榮を極めてゐる。

合衆國大統領クーリッヂ

クーリッヂ Coolidge 大統領は就任以來、勵精治を圖り、早くから教育を刷新し、移民法を制定し、又各國と戰時の債務を協定して、その支拂を可能ならしめ、同時に、海外投資を奬めて勢力を中米・南米より、更に太平洋方面に扶殖して、永く覇を世界に稱へようとしてゐる。

我が國民の覺悟

翻つて我が國情を觀察して見るに、國土は狹小で物資に乏しく、學藝の進歩や商・工業の發達などは、イギリスやアメリカ合衆國などに比べて遙かに遜色がある。その上に西洋の過激思想や風俗が輸入せられたので、思想界は漸く混亂を來たし、質實の美風は衰へて浮華の弊風が盛になつて來た。けれども今や昭和の新時代を迎へ、上に叡聖な今上陛下を戴き、下に忠君愛國の念に富んだ七千萬の大和民族を有してゐる。もしこのやうな多數の民衆が、萬世一系の帝室を中心として相結束して一國となり、正義・人道を目標として邁進したならば、我が國運を益々發展させ、且世界の列强と協力して恒久の平和を維持させることは決して困難ではない。我が國民は特にこの點に留意し、各々その抱負を遠大にしてその職務を勵み、君國に奉仕することを寸時も忘れてはならない。

新撰女子西洋歴史終

最近世史摘要及び年表

最近世期は一八七八年のベルリン會議から今日まで五十年間を包み、我が明治天皇の明治十一年、支那清朝德宗の光緒四年から今日に及んでゐる。この期の初にドイツ・オーストリヤ・イタリヤの三國同盟とフランス・ロシヤの二國同盟とイギリスとは、鼎立してヨーロッパの均勢を

明治三十七年						
	日露戰役が起つた			ロシヤが滿洲を占領した	二五八三	一九二三
	トレコ革命。			前年頃太言及		

	ブルガリヤ革命勃發。ロヽザンヌ會議（英土間題）。	大正	徐世昌 黎元洪 曹錕	石井ランシングの協約廢棄。關東大震火

最近世史摘要及び年表

最近世期は一八七八年のベルリン會議から今日まで五十年間を包み、我が明治天皇の明治十一年、支那清朝德宗の光緒四年から今日に及んでゐる。この期の初にドイツ・オーストリヤ・イタリヤの三國同盟とフランス・ロシヤの二國同盟とイギリスとは、鼎立してヨーロッパの均勢を維持してゐた。ところがドイツの國力が益〻增進してこの均勢を破らうとしたので、イギリスは光榮ある孤立の主義を棄ててフランス及びロシヤと三國協商を結んで、これに對抗することとなつた。その後イギリス・ドイツ兩國間の激烈な競爭と、プロシヤフランス戰役以來フランス・ドイツ兩國間に釀されてゐた不和反目の念と、更にバルカン半島に於けるロシヤ・オーストリヤ兩國の利害關係の衝突とによつて、未曾有の世界大戰役が勃發することとなつた。

大戰の結果世界は改造せられ、ドイツ・オーストリヤ及びロシヤ三國の帝政は倒れ、民族自決主義に基いて數多の共和國が新設せられた。しかし、いづれの國も同樣に、戰後の經營と復舊事業とに對して非常に惱まされてゐる。たとひ、ロカルノの安全保障條約が成立し、ドイツが國際聯盟に加入したとしてもヨーロッパが大戰前の狀態を回復するには、なほ相當に長い年月を要することは明瞭である。

これに反してアメリカ合衆國人は、無限の富と横溢した實力とを十二分に利用して太平洋方面にも進出し、永く覇を世界に稱へようとしてゐる。隨つて太平洋上に於ける我が國と、合衆國との關係は向後非常に重大で、我が國民の大いに覺悟しなければならないところである。

年代 重要事項 國史・東洋史との對照

皇紀	西紀	重要事項	日本	支那	重要事項
二四二	一八八二	普墺伊三國同盟成立	明治	德宗	濟物浦條約締結
二五四八	一八八八	ドイツ皇帝ウイリヤム二世の卽位	明治	德宗	翌年憲法發布
二五五一	一八九一	露佛二國同盟成立	明治	德宗	前年敎育勅語發布。後三年東學黨蜂起
二五五八	一八九八	アメリカイスパニヤ戰役。合衆國がハワイを併合した	明治	德宗	露英佛三國が清の港灣を租借した。前四年日清戰役
二五五九（明治三十二年）	一八九九	トランスヴァール戰役が始つた。萬國平和會議の開催	明治	德宗	翌年北清戰役義和團が暴動を起した
二五六四（明治三十七年）	一九〇四	英佛協商成立。日露戰役が起つた	明治	德宗	前二年日英同盟成立。前年ロシヤが滿洲を占領した
二五六九	一九〇九	トルコの革命。マホメット五世の卽位。ブルガリヤ王國の創建	明治	宣統	前年西太后及び德宗崩御。翌年朝鮮併合
二五七〇	一九一〇	ポルトガルが共和國となつた	明治	宣統	
二五七一	一九一一	イタリヤトルコ戰役	明治	宣統	日英新同盟成立
二五七二（大正元年）	一九一二	バルカン戰役。ローザンヌ條約成立	大正	袁世凱	明治天皇崩御。清朝滅亡
二五七五	一九一五	ワルソー陷落。ブルガリヤが宣戰した	大正	袁世凱	卽位禮及び大嘗會
二五七四	一九一四	世界大戰役が起つた	大正	袁世凱	日獨宣戰。我が軍が膠州灣を占領した
二五七六	一九一六	オーストリヤ皇帝フランシスヨゼフ崩御	大正	袁世凱 黎元洪	日露新協約成立。袁世凱病歿
二五七七	一九一七	オーストリヤ皇帝チャールス一世卽位。ロシヤ皇帝ニコラス二世の退位及び幽閉（露國革命）。	大正	黎元洪 馮國璋	支那對獨墺宣戰。張勳復辟運動の失敗

年代 重要事項 國史・東洋史との對照

皇紀	西紀	重要事項	日本	支那	重要事項
二五八一（大正十年）	一九二一	ギリシヤトルコ開戰。ワシントン會議開催。第一軍備縮小。日英米佛四國協約成立	大正	徐世昌	東宮殿下英佛伊白等御巡訪。御見學の後御歸朝。原首相が東京驛頭に刺殺せられた。東宮殿下攝政御就任
二五八二	一九二二	伊、ムソリニ內閣成立。英、ロイドジョージ內閣總辭職。ポナロー內閣成立。獨、クノー內閣成立	大正	徐世昌	英國皇太子來朝。山東條約批准。交換。我が派遣軍がシベリヤ及び北滿洲から撤退した
二五八三	一九二三	フランス・ベルギー軍ルール地方占領。ブルガリヤ革命勃發。ローザンヌ會議（希土問題）。英、ボルドウィン內閣成立	大正	徐世昌 黎元洪 曹錕	伏見宮貞愛親王薨去（國葬）。石井ランシング協約廢棄。關東大震火災。山本內閣成立。清浦內閣成立
二五八四	一九二四	英、マクドナルド內閣（勞働黨內閣）成立。合衆國の前大統領ウィルソン死去。レニン死去。伊、ファシズムを併合。獨、マルクス內閣成立	大正	曹錕 段祺瑞	東宮殿下良子女王殿下御成婚。加藤內閣成立。支那大亂勃發
二五八五	一九二五	日露通商條約成立。ヒンデンブルグ元帥がドイツ共和國の大統領に就任した。ロカルノ安全保障條約成立	大正	段祺瑞	孫文死去。段祺瑞が臨時執政を罷めた。廣東國民政府成立。我が國普通選擧法公布
二五八六	一九二六	イギリスに勞働大爭議が勃發した。ポアンカレー擧國一致內閣成立。ドイツが國際聯盟に加入した	大正 今上	段祺瑞	加藤首相薨去。若槻內閣成立。北京政變勃發。大正天皇崩御

することは明瞭である。

これに反してアメリカ合衆國人は、無限の富と横溢した實力とを十二分に利用して太平洋方面にも進出し、永く覇を世界に稱へようとしてゐる。隨つて太平洋上に於ける我が國と、合衆國との關係は向後非常に重大で、我が國民の大いに覺悟しなければならないところである。

國史・東洋史との對照

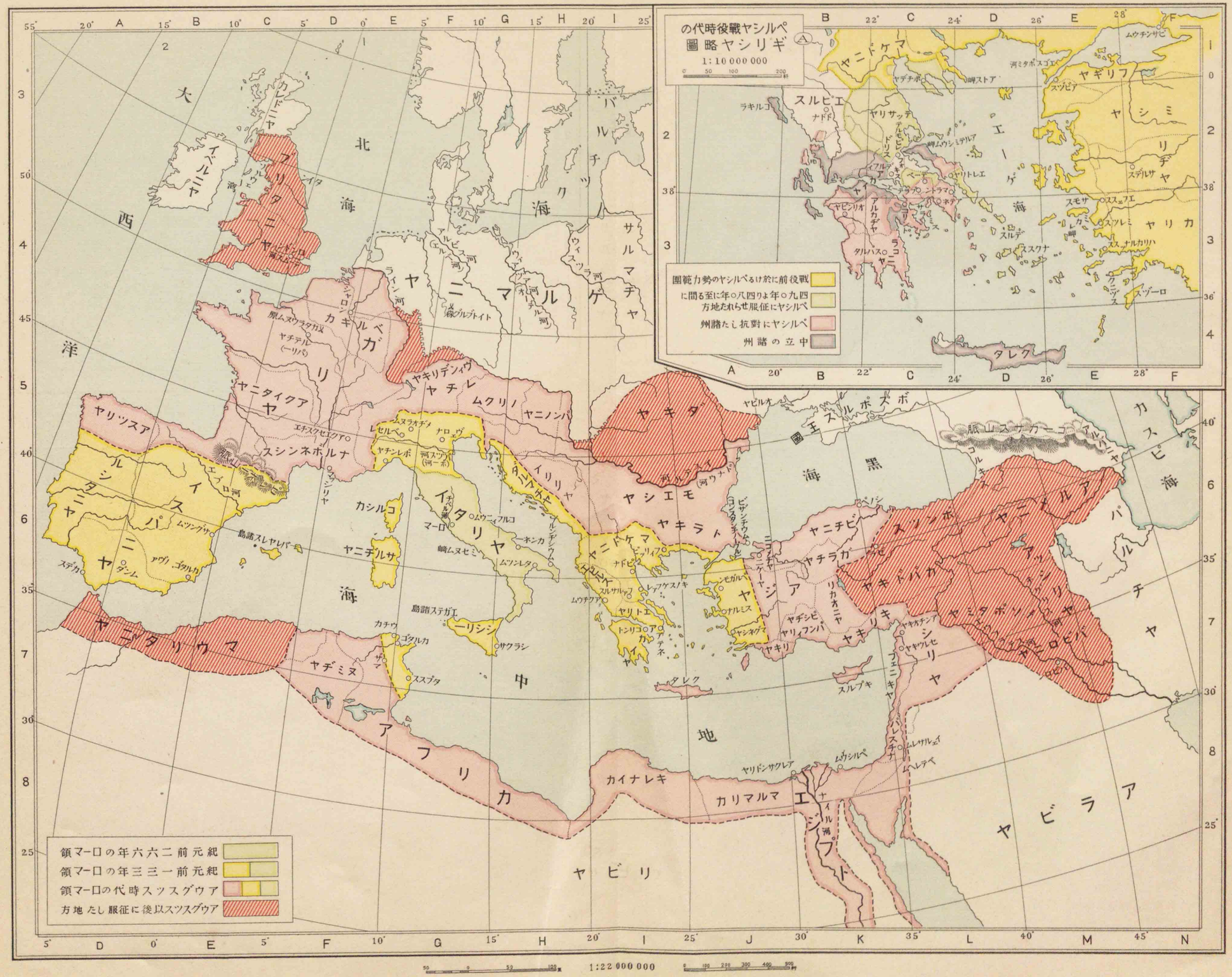
年代 皇紀	年代 西紀	重要事項	日本	支那	重要事項
二五四二	一八八二	普墺伊三國同盟成立	明治	德宗	濟物浦條約締結
二五四八	一八八八	ドイツ皇帝ウイリヤム二世の卽位	明治	德宗	翌年憲法發布
二五五一	一八九一	露佛二國同盟成立	明治	德宗	前年敎育勅語發布。後三年東學黨蜂起
二五五八	一八九八	アメリカイスパニヤ戰役。合衆國がハワイを併合した	明治	德宗	露英佛三國が清の港灣を租借した。前四年日清戰役
二五五九（明治三十二年）	一八九九	トランスヴァール戰役が始つた。萬國平和會議の開催	明治	德宗	翌年北清戰役義和團が暴動を起した
二五六四（明治三十七年）	一九〇四	英佛協商成立。日露戰役が起つた	明治	德宗	前二年日英同盟成立。前年ロシヤが滿洲を占領した
二五六九	一九〇九	トルコの革命。マホメット五世の卽位。ブルガリヤ王國の創建	明治	宣統	前年西太后及び德宗崩御。翌年朝鮮併合
二五七〇	一九一〇	ポルトガルが共和國となつた	明治	宣統	
二五七一	一九一一	イタリヤトルコ戰役	明治	宣統	日英新同盟成立
二五七二（大正元年）	一九一二	バルカン戰役。ローザンヌ條約成立	大正	袁世凱	明治天皇崩御。清朝滅亡
二五七四	一九一四	世界大戰役が起つた	大正	袁世凱	日獨宣戰。我が軍が膠州灣を占領した
二五七五	一九一五	ワルソー陷落。ブルガリヤが宣戰した	大正	袁世凱	卽位禮及び大嘗會
二五七六	一九一六	オーストリヤ皇帝フランシスヨゼフ崩御	大正	袁世凱 黎元洪	日露新協約成立。袁世凱病歿
二五七七	一九一七	オーストリヤ皇帝チヤールス一世卽位。ロシヤ皇帝ニコラス二世の退位及び幽閉（露國革命）。合衆國の聯合側參加	大正	黎元洪 馮國璋	支那對獨墺宣戰。我が軍の膠州灣を占領した。張勳復辟運動の失敗
二五七八	一九一八	ブレストリトウスク條約の締結。西部戰線に於ける獨軍の大攻勢が阻止せられた。獨墺兩國の革命勃發。ドイツ皇帝ウイリヤム二世の退位及び逃亡	大正	徐世昌	我が國シベリヤに出兵。寺內內閣總辭職。原內閣成立
二五七九	一九一九	パリー講和會議開催。對獨・對墺・對勃講和條約締結	大正	徐世昌	東宮殿下御成年式擧行。朝鮮獨立運動が阻止せられた
二五八〇	一九二〇	國際聯盟の會合。對土講和條約締結	大正	徐世昌	尼港在住卡邦人及び軍隊三百名パルチザンに虐殺せられた

國史東洋史との對照

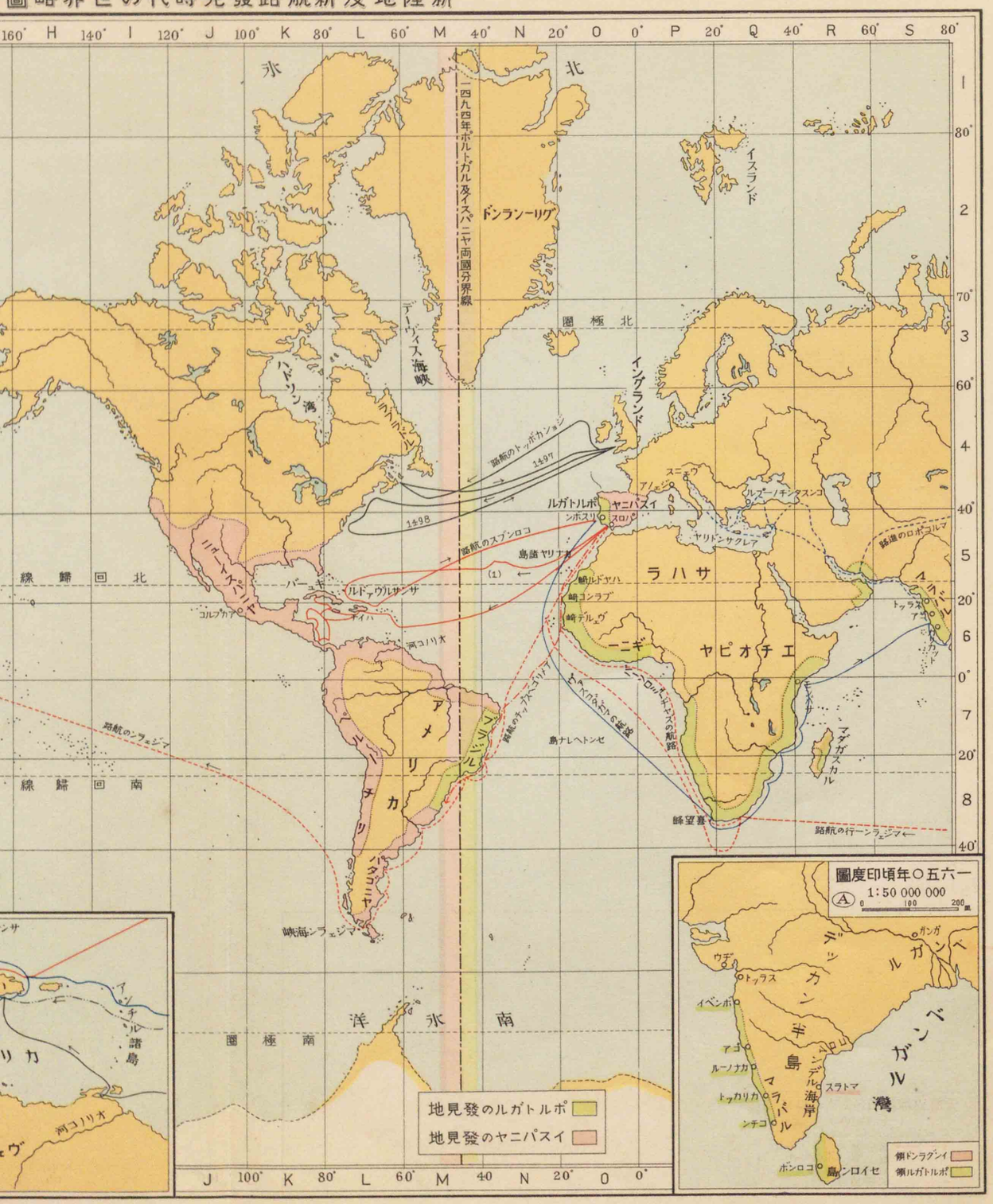
年代 皇紀	年代 西紀	重要事項	日本	支那	重要事項
二五八一（大正十年）	一九二一	ギリシヤトルコ開戰。ワシントン第一軍備縮小會議開催。日英米佛四國協約成立	大正	徐世昌	東宮殿下英佛伊白等御巡訪御見學の後御歸朝。原首相が東京驛頭に刺殺せられた。東宮殿下御就任攝政
二五八二	一九二二	伊、ムソリニ內閣成立。英、ロイド＝ジョージ內閣總辭職。ポアロー內閣成立。獨、クノー內閣成立	大正	徐世昌	英國皇太子來朝。山東條約批准交換。我が派遣軍がシベリヤ及び北滿洲から撤退した
二五八三	一九二三	フランス・ベルギー軍ルール地方占領。ブルガリヤ革命勃發。ローザンヌ會議（希土問題）。英、ボルドウィン內閣成立	大正	徐世昌 黎元洪 曹錕	伏見宮貞愛親王薨去（國葬）。石井ランシング協約廢棄。關東大震火災。山本內閣成立。清浦內閣成立
二五八四	一九二四	英、マクドナルド內閣（勞働黨內閣）成立。露、レニン死去。合衆國の前大統領ウィルソン死去。伊、ムソリニ內閣獨、マルクス內閣成立	大正	曹錕 段祺瑞	東宮殿下良子女王殿下御婚。加藤內閣成立。支那大亂勃發
二五八五	一九二五	日露通商條約成立。ヒンデンブルグ元帥がドイツ共和國の大統領に就任した。ロカルノ安全保障條約成立	大正	段祺瑞	孫文死去。段祺瑞が臨時執政を罷めた。廣東國民政府成立。我が國普通選擧法公布
二五八六	一九二六	イギリスに勞働大爭議が勃發した。佛、ポアンカレー擧國一致內閣成立。ドイツが國際聯盟に加入した	大正	段祺瑞	加藤首相歿去。若槻內閣成立。北京政變勃發。大正天皇崩御
二五八七	一九二七	ジユネーヴ第二軍備縮小會議開催。ルーマニヤ國王崩御	今上		若槻內閣總辭職。田中內閣成立。中華民國の動亂。我が國が支那に出兵した
二五八八	一九二八	全米會議ハバナで開催。イプセンの百年祭	今上		日支交戰。我が軍濟南占領。日獨通商條約成立。張作霖死去。國民政府北伐完成

ペルシヤ戰役時代の
ギリシヤ略圖
1:10 000 000
團結力勢のヤシルペるけ於に前役戰
に間る至に年○八四りよ年○九四
方地たれらせ服征にヤシルペ
州諸たし抗對にヤシルペ
州諸の立中
ヤシルペ
ヤキリ
ヤシエモ
ヤキラ
ヤニトケマ
ヤキダ
ヤキリデンヤ
ヤチレ
ムクリ
ヤニノンパ
イリリヤ
イタリヤ
ヤニトケマ
ヤシ
ヤキ
ヤニ
ヤチ
ヤキ
ヤシ
ヤキ
ヤシ
ヤニ
ヤチ
ヤキ
ヤシ
ヤニ
ヤキ
ヤシ
ヤニ
ヤキ
ヤシ
ヤニ

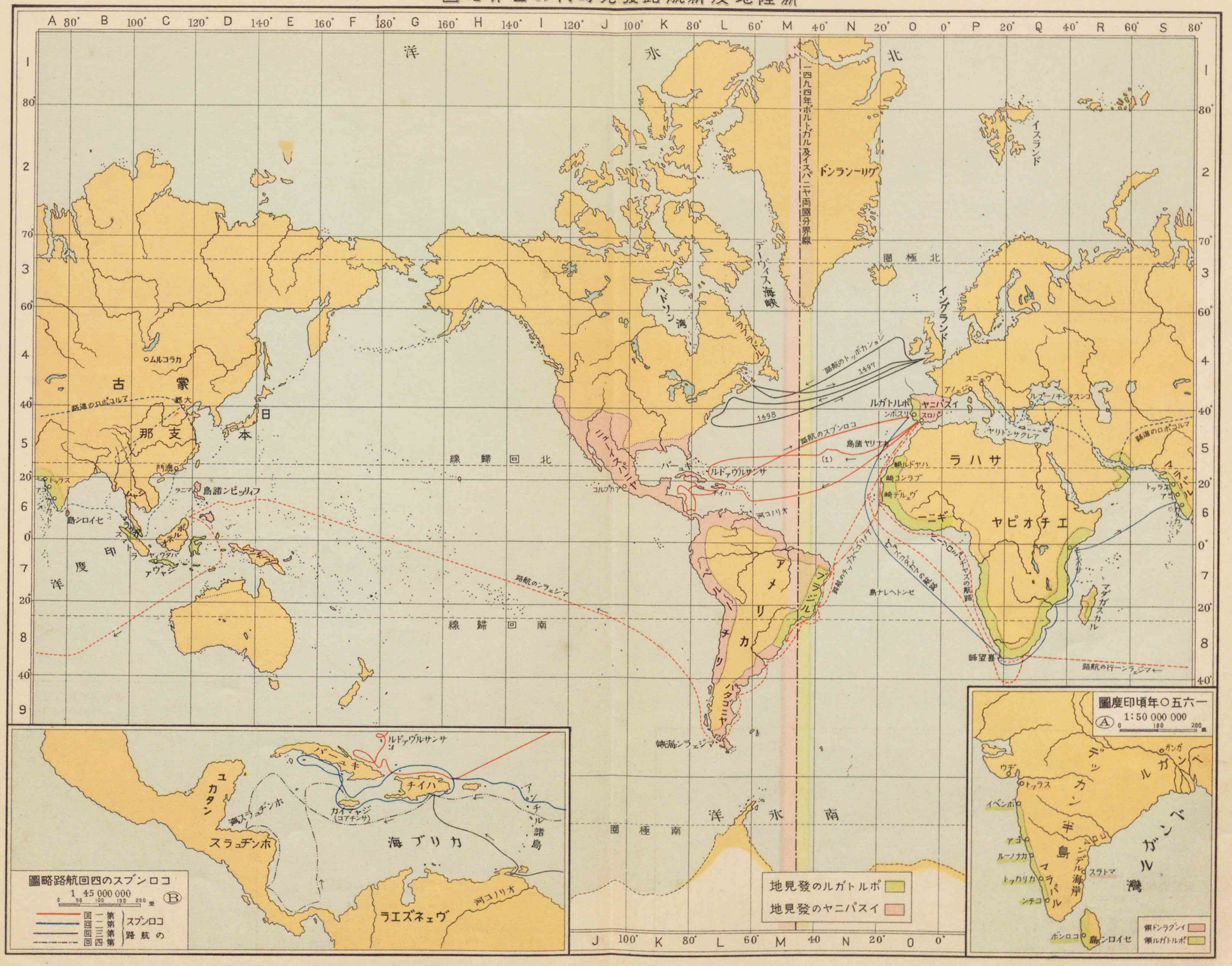
ローマ版圖擴張圖


ギリシヤ略圖
1:10 000 000
領範圍力勢のヤシルペるけ於に前役戰
に間る至に年〇八四りよ年〇九四
方地たれらせ服征にヤシルペ
州諸たし抗對にヤシルペ
州諸の立中
領マーロの年六六二前元紀
領マーロの年三三一前元紀
領マーロの代時スツスグウア
方地たし服征に後以スツスグウア
大西洋
北海
バルチック海
ヤニマルゲ
サルマチヤ
ヤニタリウマ
ヤビリ
ヤビラア
ヤシエモ
ヤキラト
ヤシミリチヤ
ヤリカ
ヤキリ
ヤシリヤ
ヤニメルア
ヤキドパカ
ヤシタポンタ
ヤニロパ
ヤニチビ
ヤチラガ
ヤニドケマ
ヤキダ
ヤチレムクリ
ヤニノンパ
ヤキリデンヴ
ヤニタイクア
ヤリツスア
スシンネホルナ
ヤニパルシタニ
ヤニスパ
ヤニタリア
ヤニチルサ
カシルコ
ヤチミヌ
アフリカ
カイナレキ
カリマルマ
エジプト
ヤビラア
ヤリドシサクレア
ヤリトエ
ヤシヤ
ヤキリ
ヤチリフ

新陸地及新航路發見時代の世界略圖



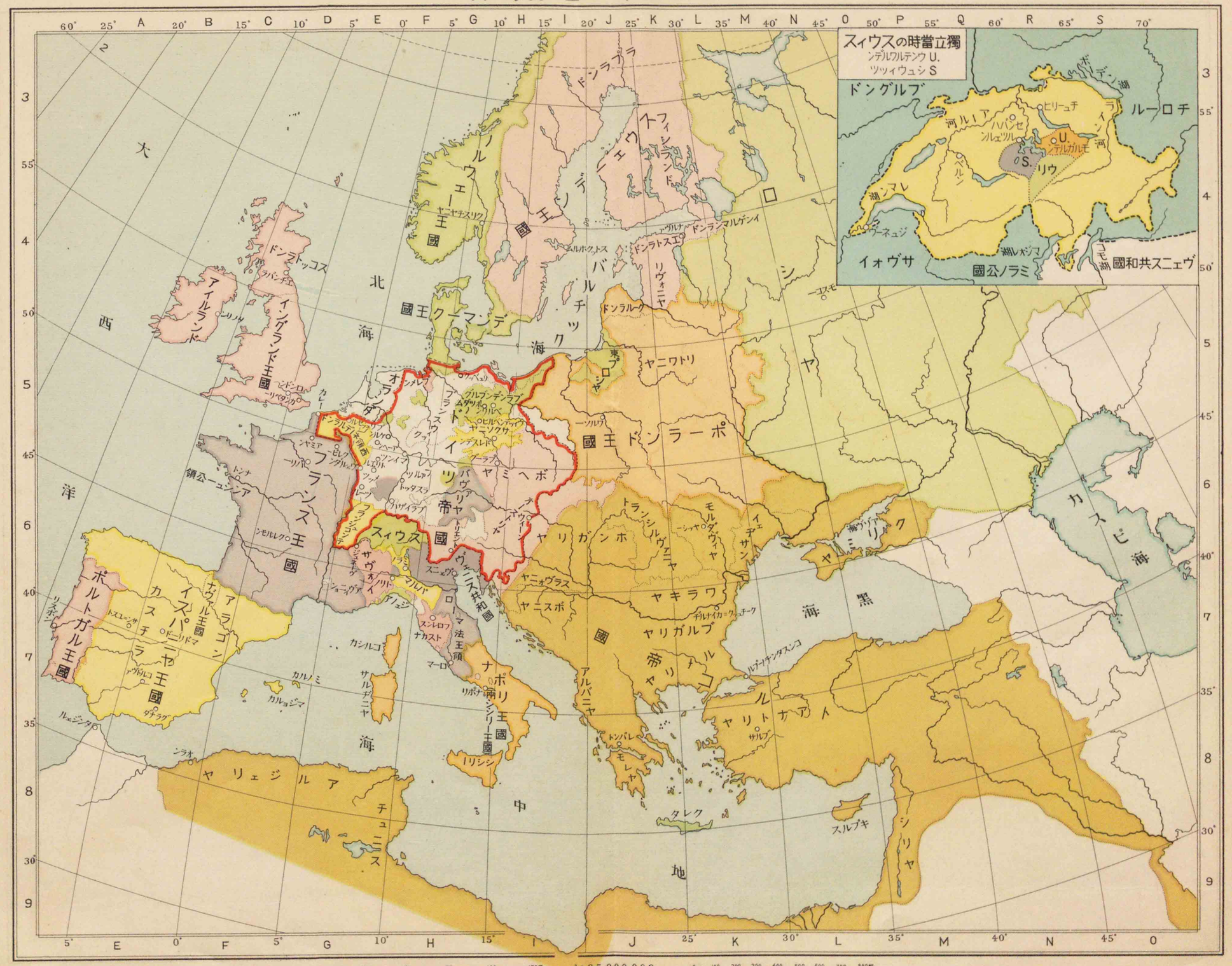
新陸地及新航路發見時代の世界略圖



一六四八年のヨーロッパ圖

獨立當時のスィウス
ンデルワルテンウ U.
ツッィウュシ S
ドングルブ
ルーロチ
ボデン湖
ヒリーュチ
ハバンセ
ンルェツル
ベルン
ウリ
ローマ
ヴェニス共和國
ナポリ王國
ヤニワトリ
ヤリガンボ
ヤキラワ
ヤリガルブ
ヤリトナアル
ヤニスポ
ヤニヴラス
ヤミヘボ
ヤミリク
ヤ
カスピ海
黑海
中
地
シリヤ
スルブキ
タレク
アルバニヤ
ドンラルク
ドンラトス工
ドンラマルテンイ
ドンラフラ
ルウェー王國
ルチック海
ドングルブ
ポーランド王國
ドンラーポ王國
ドンラルク王國
ドンラフィンランド
ドンラトウェー王國
ドンラマルテンイ
ドンラトス工
ヤニワトリ
ヤニスポ
ヤニヴラス
ヤリガンボ
ヤキラワ
ヤリガルブ
ヤリトナアル
ヤミリク
ヤミヘボ
ヤリガンボ
ヤリガルブ
ヤリトナアル
ヤミリク
ヤミヘボ
ヤニヴラス
ヤニスポ
ヤキラワ
ヤニワトリ
ヤ
ヤ
ヤ

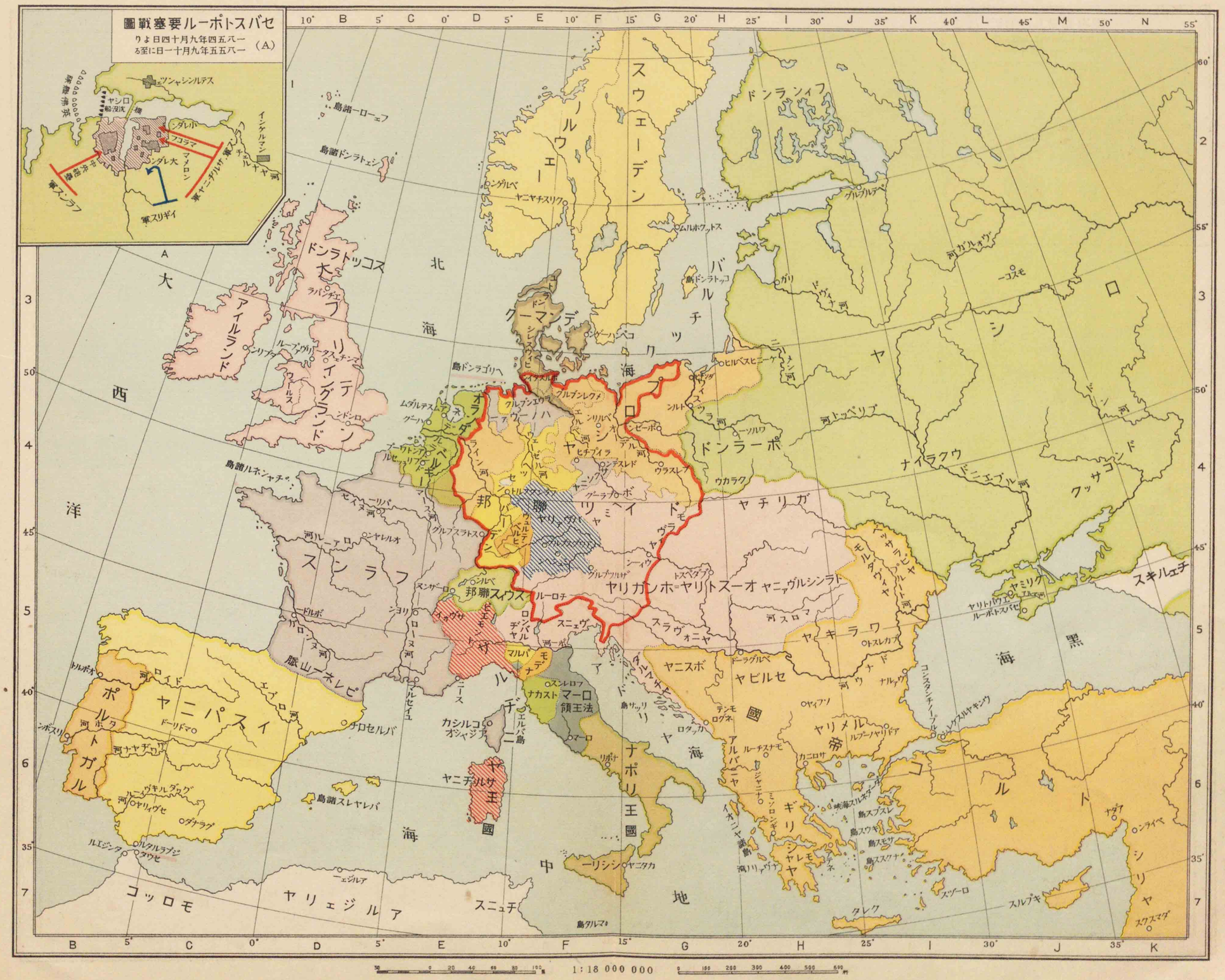
一六四八年のヨーロッパ圖


獨立當時のスイウス
ンデルワルテンウ U.
ツツィウュシ S
ドングルブ
ルーロチ
イオヴサ
國公ノラミ
ヴェニス共和國
大西洋
北海
バルチック海
ノルウェー王國
スウェーデン王國
フィンランド
ロシヤ
ドンラトッコス
アイルランド
イングランド王國
ドンラルク
ドンラマルゲンイ
ドンラトスエ
ヤニワトリ
ポーランド王國
ドイツ帝國
ヤミヘボ
ヤリガンホ
ヤニヴラス
ヤスボ
ヤキラワ
ヤリガルブ
ヤリトナアト
ヤリルコ帝國
ヤリルコ
ヤリルコ
ヤリルコ

一八一五年以後のヨーロッパ圖

ノルウエー
スウエーデン
ドンランド
バルチック海
ヤシロ
ドンラーポ
ナイラクウ
クッサコンド
ヤチリガ
ヤリガンポ=ヤリトスーオ
ヤニヴルシンラ
ヤキラワ
ヤニスボ
ヤビルセ
ヤリメル帝國
コルト
黑海
スキルエチ
ヤミリク
ヤリトパワエ
ルーポトスパセ
ヤニヴルシラ
ヤキラワ
ヤニヴルシ
ヤニヴルシ
ヤニヴルシ

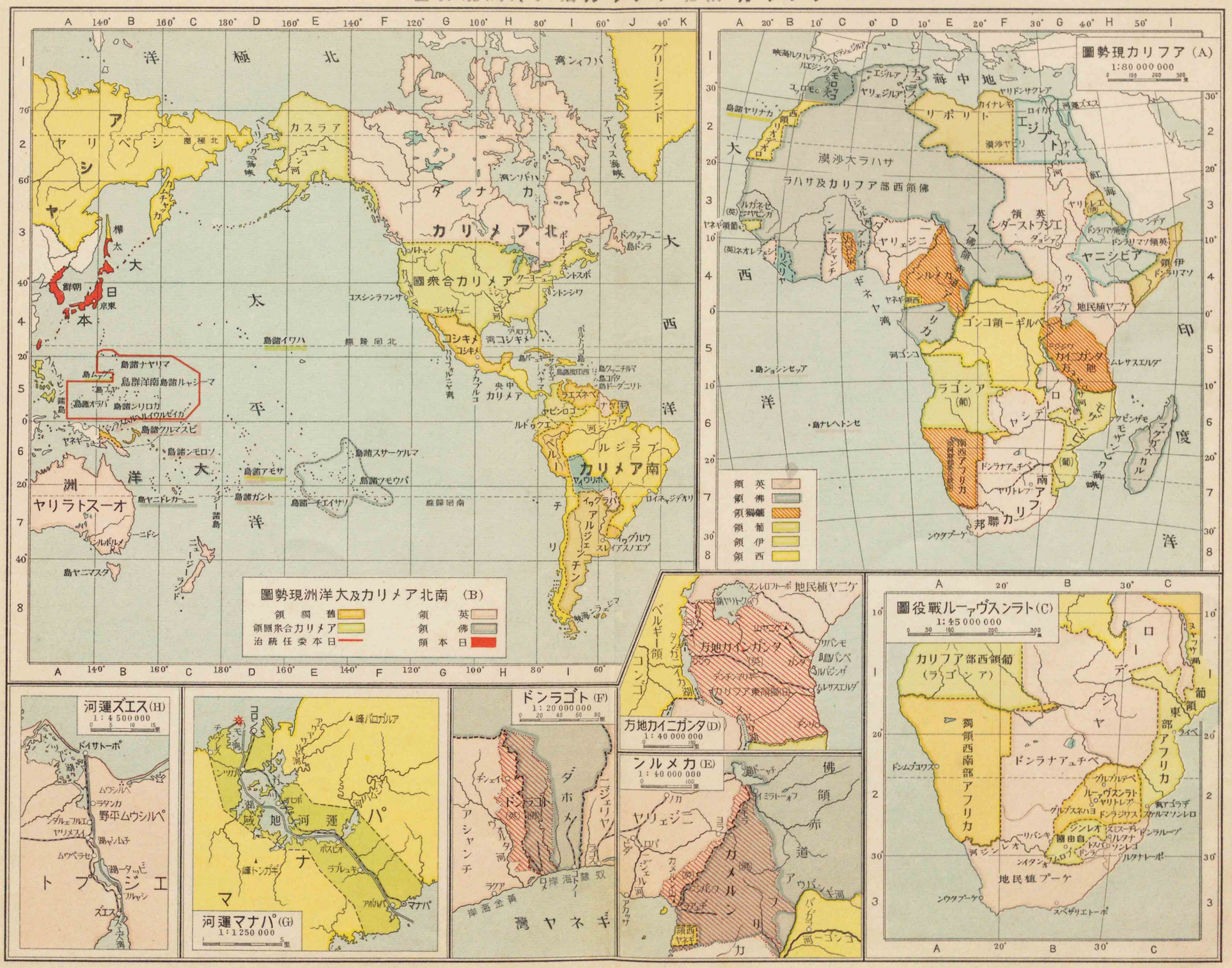
一八一五年以後のヨーロッパ圖


セバストポールー要塞戰圖
一八五四年十月九日より
一八五五年十月九日に至る
(A)
ヤシロ船沒沈
ンダレバ
フコラマ
ンダレ大
マメロン
イシケルマン
ヤ河
軍ストラフ
軍ヤニンダリ
軍スリギイ
大西洋
北海
ドンラトッコス大
アイルランド
ブリテン
イングランド
島諸ーローフ
島諸ドンラトッコ
スウエーデン
ノルウエー
ドンランィフ
クーマンデ
バルチック海
ドンラーポ
ヤチリガ
ヤリメイド
ヤリガンホ
ヤリトスーオ
ヤニヴルシンラト
ヤキラワ
ヤビルセ
ヤニスボ
ヤリメル帝國
ヤニパスイ
ポルトガル
スンラフ
ヤリエジルア
コッロモ
スニュチ
ナポリ王國
ヤニチルサ王國
ヤリシン
ヤニタカ
中地海
黑海
ヤシロ
ドンラッカ
ナイラクウ
クッサコド
ヤミリク
スキルュチ
ヤリトパウエ
ルーポトスパセ
ヤリメル帝國
コルト
シリヤ
島諸スレヤレバ
島諸ルネンャチ
島ドンラゴリヘ
島ドンラトッコ
ムルホクットス
ンダルベ
ヤニヤチスリク
ヒルベスヒニーケ
ムダルテスム
グーハ
ルーブ
ウルテス
シドシロ
ンリブラ
ラバンチェ
ドルボ
ガロンヌ河
脈山ーネレピ
ナロセルバ
ヤレルオ
ヤニパスイ
ドーリドマ
ヴキルダッグ
ヤリィヴセ
ダナラグ
ルエジンタ
ルタルラブジ
ダウセ
ンボスリ
トルボオ
ロイド河
エブロ河
ヌンザーロ
ショリ
ローヌ河
ルセイユ
ニース
カシルコ
オシジア
エルバ島
ルーチ
ローバル
ヤチ
スンェヴ
ルーロチ
ヤリ
ヤニ
ヤ
ヤ
ヤ

アフリカ南北アメリカ及大洋洲現勢圖

圖勢現カリフア (A)
1:80 000 000
地中海
大西洋
印度洋
ヤニシビア
エジプト
リボリト
ヤリドサクレア
カイナレキ
ロイガ
河運ズエス
紅海
ヤリトレエ
ドンラリマ領伊
ドンラリマ領英
領伊ドンラリマ
地民植ヤニケ
漠沙大ラハサ
ラハサ及カリフア部西領佛
領英ンダーストブジエ
ダシアブ
ヤリエジニ
ヤネギ領西
ゴンコ領ーギルベ
カインガンダ地方
ムレサスエルダ
ラゴンア(葡)
ヤシデロ
ドンラナアュチベ
南アフリカ聯邦
ヤリトレブ
シウタブーケ
マダガスカル
モザンビク海峡
領英
領佛
領獨
領葡
領伊
領西
カリフア北南 (B)
領英
領佛
領本日
ドンラゴト (F)
1:20 000 000
方地カイニガンタ (D)
1:40 000 000
ンルメカ (E)
1:40 000 000
ヤリエジニ
カメルン
ヤネギ灣
ダホメ
ニジェリヤ
アシャンチ
ドンラル
ウルタ河
ラゴア
マナバ
佛領
赤道
アウバンギ河
バガラ河
コンゴ
地民植ヤニケ
方地カインガンタ
カリフア東部獨領
カリフア部西領葡
(ラゴンア)
獨領西南部アフリカ
ドンラナアュチベ
ドンラジウス
ルーアヴスンラト
ヤリトレア
ルタナ
ソンレコ
ルタナトーポ
ンタンガ
ドンラ
ンウタブーケ
地民植ブーケ
スベザリエトーポ
ドンムブコワス
ライベ
ヌヤサ湖
東部アフリカ
ロディシヤ
獨領西南部アフリカ
獨領東部アフリカ
獨領西部アフリカ
獨領中部アフリカ
獨領

アフリカ南北アメリカ及大洋洲現勢圖


圖勢現カリフア(A)
1:80 000 000
圖勢現洲大及カリメア北南(B)
領獨舊
領國衆合カリメア
治統任委本日
領英
領佛
領本日
圖役戰ルーァヴスンラト(C)
1:45 000 000
方地カイニガンタ(D)
1:40 000 000
ンルメカ(E)
1:40 000 000
ドンラゴト(F)
1:20 000 000
河運マナパ(G)
1:1 250 000
河運ズエス(H)
1:4 500 000
極北洋
太平洋
大西洋
印度洋
ヤリラトスーオ洲
ヤリベシ
カスラア
ダナカ
カリメア北
國衆合カリメア
カリメア南
ヤリジエ
ヤニシビア
ヤリトプエ
ヤリネギ
ヤリ
ヤリ
ヤリ

世界大戦以後のヨーロッパ

北海
バルチック海
ノルウェー
スウェーデン
ドンラ
ヤントスエ
ヤヴトラ
ヤニワトリ
ヤシロプ東
ドンラーポ
ヤチハワガ
ヤキラワ
ヤニマール
ヤリガルブ
ヤリガンホ
ヤリトスーオ
ヤィヴラスーゴーユ
ヤニアヴルシンラト
ヤミボ
ヤリアヴバ
ヤ
ヤ
ヤ

世界大戰以後のヨーロッパ

北海
ノルウェー
スウェーデン
ボトニヤ湾
ドンラント
ヤニトスエ
ヤヴトラ
ヤニワトリ
ヤシロプ東
ドンラーポ
ヤチリガ
ヤキラワ
ヤニマール
ヤリガルブ
ヤリガンホ
ヤリトスーオ
ヤヴラスーゴーユ
ヤニスボ
ヤルビセ
ヤルモ
ヤリシ
ヤリシ海
ヤリシ海
ヤリシ海

昭和三年八月十二日印刷
昭和三年八月十五日發行
昭和四年一月十一日訂正再版印刷
昭和四年一月十四日訂正再版發行

新撰女子西洋歷史

定價金壹圓拾八錢

著者　瀨川秀雄
東京市神田區神保町一丁目三番地

發行者　合資會社　冨山房

同所社長　坂本嘉治馬

東京市牛込區榎町七番地

印刷所　大日本印刷株式會社榎町工場

發行所　東京市神田區神保町一丁目三番地
合資會社　冨山房
電話神田　二、一七一—二、一七八番
振替口座東京五〇一番

荻村製

大阪水道

九三〇

庫
29
261
広島大学図書
2000081261